亡友芥川龍之介への告別

池崎忠孝著

Digitized by the Internet Archive
in 2010 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/byakutagawarynos00ikez

池崎忠孝著

亡友芥川龍之介への告別

東京　天人社

PL
719
I4

目次

亡友芥川への告別……一
一　僕の別辭……三
二　君の自殺……四
三　君の懷疑主義……一三
四　君の藝術境……一七
五　君の技巧と文章……二〇
六　君の碑銘……二四
アンナ・カレニナの悲劇……二九
一　「アンナ・カレニナ」の意義……四一
二　ヘレンの美とアスパシアの才……四三
三　アンナの性格……四五
四　アンナの境遇……四九

五　悲劇への發程……三三
六　悲劇への到着……五七
七　悲劇の眞因……六〇
八　「アンナ・カレニナ」の教訓……六四
グスターヴ・フローベルと「祖國」……六七
一　「聖アントワンヌの誘惑」……六九
二　祖國に對する感情……七三
三　藝術家の心……七八
佐藤春夫論……八二
はしがき……八五
一　谷崎君の推輓……八七
二　「病める薔薇」……八九
三　「お絹とその兄弟」……九三
四　ロマンチシスト……九七

五　佐藤君と月光……一〇〇
六　佐藤君の文章……一〇四
社會改良家としてのラスキン……一〇七
一　聖ジオージ協會……一〇九
二　ラスキンとトルストイ……一一三
三　ラスキンの經濟思想……一一九
四　ラスキンと現代……一二三
國木田獨歩――人、作品……一二九
一　私と獨歩……一三一
二　果して自然主義か……一三六
三　彼の作品……一四九
四　彼の生涯……一四四
五　彼の心境……一四八
六　彼の占むべき地位……一五三

アッシジに於けるゲエテ……一二七
一　女神ミネルヴの祠堂……一二九
二　ゲエテの卓越性……一三三
三　精神の自由……一三七
四　デエモニッシェ……一四〇
井原西鶴の描いた女性……一四三
一　女性を描いた作品……一四五
二　彼の代表作……一五六
三　「一代女」の梗概……一七九
四　「五人女」の梗概……一八二
五　戀愛即性慾……一八七
六　ワイニンゲルの女性觀……一九〇
七　ワイニンゲルと西鶴……一九三
八　西鶴と近松……一九六

近代文藝とデモクラシー……一九九
一　デモクラシーの語義……二〇一
二　文藝上の民本主義……二〇六
三　ヴィクトル・ユーゴー……二一三
四　三者の比較……二一八
五　ワルト・ホイツトマン……二二四
六　ホイツトマンの心の弟子……二二九
七　北方と南方……二三五
白樺派雜感……二三七
一　La pléiade……二三九
二　「昴」の出現……二四〇
三　過去の追憶……二四二
四　「白樺」の出現……二四三
五　文壇の輕薄性……二四四

六　白樺派の意義……二四五
七　清新派の空想家……二四六
八　有島氏の作品……二四七
九　長與氏「項羽と劉邦」……二四九
一〇　志賀氏の短篇……二五〇
一一　武者小路氏とロンサール……二五一
人としての森鷗外……二五二
一　二つの生涯……二五五
二　傍觀者としての鷗外氏……二五八
三　「あきらめ」の心持……二六七
四　「あそび」……二七三
五　新らしい保守主義者……二七九

亡友芥川への告別

一　僕の別辭

亡友芥川よ。君が求めて世を辭してから、もう三年になるさうだ。僕は不幸にして君の葬儀に列することも出來なかつたし、今以て君の墓前に額いて香を炷く機會も有たない。君が生前の遺作全部は、すでに姚麗の裝ひを凝らして市に出で、時に懶惰僕のごときをして發奮の機を與へてゐる。今にして一篇の別辭を艸することなくば、僕は終に默して君の死を送ることになるかも知れない。墳上の土既に乾いて、今漸くこの篇をなす。君は必ずしも遲きに過ぐるを咎めないだらう。

併し、君の聰明なる、よもや僕から世間並のEloge を聞かうとは思つてゐまい。僕が讃美者としての資格に於て缺くるところ多きは、君が夙に輕蔑の情とともに熟知するところだ。僕が僕らしい役割を演じることは、人事の天眞を愛する君の寧ろ快とするところでなくてはならない。「社交は虛言の上に立つ。」とは君の信條だが、死者の靈に對する別辭も、矢張一

種の社交を出でないものとすれば、僕は僕の社交性に熟しないことを憾んで止むの外はない。殊に、棺を蓋うて後、君は Proneri の讃歌によつて包まれ、君の背後にはパルナスの神々にふさはしい光輪さへ生じつゝあるやうだ。微力僕のごときが敢て君の瑕疵二三に就て語つたところで、世を擧げて嘆美する君の瑤質を傷ける處れはあるまい。君の論鋒に倣ふと、ホメロスを酷評したアレキサンドリアのアリスタークスを知るものは極めて寥々たるものだが、彼が苛辣な鞭を加へたホメロスは、今も尚ほ萬人の記憶の中に生きてゐる。作中の人物をして「予の全集は三百年の後、萬人の賞ふところとなるべし。」と豪語させた君のことだ。僕の言はんとするところに快く耳を傾け、孺子果して何をか爲しえんやと高を括るくらゐな度胸は有つてゐるはずだ。僕は意を安んじて、僕の言はんとするところを言ひ、アレキサンドリアのアリスタークスとともに、その愚を千載の後に傳へることとせう。

二　君の自殺

新聞紙によつて君の唐突な死が傳へられた時、僕は全然豫期しない訃報に接したといふ感じを有たなかつた。すくなくとも僕は有島氏の死によつて驚かされはしなかつた。君の死を報じた友人のあるものは、「彼は、彼のアフェクテーションを完成した。」とさへ言つた。世を擧げて驚愕し、疑惑し、愛惜し、時には歎美するものさへある中に、曾て君の知遇を忝ふした僕は、反つて冷かに君の死を迎へた一人だつたと告白してもいい。

彌が上にも好奇心を煽られた世間は、君が求めた死の動機に對して、多大の興味を感じたやうだつた。併し、そこにはたゞ冷々淡々として他を言ふ一篇の遺書、「或舊友に與ふる書」があるだけで、すべてのものは暗中の神祕に封ぜられてゐた。「自殺者の心理——レニエ——不安——マインレンデル——非人間的——美的嫌惡——阿含經——クライスト——女人——人間獸——エムペドクレス……」——難解な語彙の羅列する遺書を前にして、何か事あれかしと待ち構へてゐた世間の呆然自失した顏は、今に至るも尙ほ僕を苦笑させねば止まない。世間は意外に單純だ。終に自殺者の博識の前に甲を脫いで、「世には、われ〳〵凡人の迚も理解

出來ない死がある。」と、素直に觀念する外はなかつたらしい。不可知のものに對する驚異の情が宗教的禮拜への道を開くことは、素より君の理解するところだ。君の自ら選んだ死が、君の「みづから神としたい欲望」の上から觀て、頗る策を得たものであつたことは、僕の毫も疑ふところでない。

併し、僕と雖も尙ほ死に面した君によつて、ある嚴肅な人間の聲を聽かんとする流俗の徒だ。「或舊友に與ふる書」を讀まんとした瞬間の僕は、今こそ君の眞實言に接し得る時だと思つて多少とも僕の心に神聖なものを用意したことは事實だつた。君と交ること數年、君と語つて愉快な Tit for Tat を樂しんだことは幾度だつたか判らない。しかも不幸にして一度たりとも君の肺肝から迸り出た眞實言に接した記憶を有たない僕が、君の遺書を前にして、不覺にもかく輕信したからと言つて、君は直ちに僕生來の鈍をのみ冷笑するわけにはゆくまい。僕は「或舊友に與ふる書」を讀んだ。句々滿身の注意を傾けて讀んだが、僕は必ずしも世間人とゝもに君の羅列した語彙には驚かなかつた。併し、僕は死に面した君が、平然自若として實驗心理を講じ、得意の學識を驅つて博引旁證する餘裕ある膽力には驚いた。僕は初

めて君と相識つた時、君の口からコルネーユに就て、タツソーに就て、プレークに就て、かなり多くの新知識を與へられた。しかも今、死の國に旅立たんとする君から聽くところも、矢張レニエであり、マインレンデルであり、クライストであつた！　君は、君の操守に於てすくなくとも渝るところはなかつた。僕の眼に映じた君は、徹頭徹尾知識の狂信者として終始したからだ。

君が暗に指示した「或舊友」は、多分自殺者の心理に就て極度の關心を有する心理學者でもあらう。さもなければ、兩者の間に存する友誼の感情は、かゝる重大な瞬間に於て、相互に今すこし人間的な言葉を期待したに相違ないから。——君自身は、昂然として、「非人間的」だと揚言してゐるが、社交の哲理を說いて人間性の輕薄を洞察した君が、反つて社交の勇者として君を取捲く讃美者の中に生きてゐたことは事實だ。尨大な君の書簡集は、虛僞を忌み、流俗を斥け、天眞を愛する高尙な審知の下にも、尙ほ卑陋な功利の觀念を容れ得る餘地の十分にあることを實證する好個の文獻として、長く倫理學者の書庫を飾るに相違ない。全集編纂者等の不用意な皮肉よ。嘆美と、友情とを以て、彼等が在來のコンヴェンションを

踏襲した結果は、君の書簡が纏められて即座の鳥瞰に便するがごとき形を與へられた。君自身にとつては、寧ろ有難迷惑ではなかつたか。「何といふ才智の中に隠れた嬌飾か！」——君の書簡を通讀すると、何人にも增して、君が先づかう呟いて顔を赧らめるに相違ない。

その後に至つて、僕は漸く「闇中問答」、「齒車」、「或阿呆の一生」などを讀んだ。これらの遺稿を讀んで、僕は君を死に導いたものが、必ずしも「人生の倦怠」や「懷疑主義」ではないことを知つた。好んで流俗の悲劇に到達したとしては、君の飽くなき自負心が承知すまい。思想戰の敗者が、自己の處決を或精神界の隱徴に假托したとすれば、それは所謂「アフエクテーションの完成」を以ても一笑に附することは出來よう。併し、君は冷かな批判の下に、「彼は『新生』の主人公ほど老獪な僞善者に出會つたことはなかつた。」と放言する人間だ。彼此の順序を顚倒して、「新生」の主人公が、若し君を評して、「僕は『或阿呆の一生』の主人公ほど老獪な露惡家に出會つたことはなかつた。」と放言したも、死に處する君の「誠實」を疑つてゐる僕は、君とともに「新生」の主人公を責めて、獨り君を辯護する氣持にはなれない。好んで君の嘲笑する流俗は、君のごとく自家韜晦の才辯を弄する能力は有たないかも

知れないが、君のごとく巧みに死を糊塗する能力を有たないことも事實だ。——「闇中問答」以下三篇の遺書に眼を曝した僕は、今更ながら才人の輕薄に驚いた。

「闇中問答」に於て、君は珍らしくも素裸になつた君を衆人環視の中に曝したかのごとく語つてゐるが、用心深い君は、矢張肌に一枚の鍵帷子を着けて、眞逆の場合、急所に致命傷を受けないだけの準備は忘れてゐない。「闇中問答」は、鋭い內部の聲に耳を傾けて、ある反省の世界を展開せんとする心の暗闘を描いたものだ。併し、ここに現れてゐる君は、奇警な語句を手裏劍のごとく弄んで、身を衛るに巧者な劍客としての君を示してゐる。「齒車」に於て君は漸く鍵帷子を脫いだ。すくなくとも苦しみ悶えてゐる君が、「齒車」の隨所に痛ましい影を落してゐることは疑へない。君は最早猾智に長けた辯證家としての君ではない。例によつて例のごとく、自他の何れをも欺くに足らない減らず口を叩く代りに、君は悲鳴を擧げて慟哭することさへ隱さうとしてゐない。眞實は、多少とも人を動かすものだ。僕は初めて君の苦痛を前にして頭を低げたい衝動を感じた。精妙な機構裝置の半ば壞れかかつた神經の荒れ狂ふ嵐の中に、見るも痛々しい蒼顏痩身のタンタラスが、身に餘る苦痛を負うて責め呵なま

れてゐる光景を想像しただけでも、僕が「或阿呆の一生」に期待するところの大きかつた所以は、素より當然の歸結だと言はなければなるまい。

君の末期に於ける慘ましい死戰の活記錄たる「或阿呆の一生」は、「齒車」に於ても、尙ほ隱微の間に君を衞つてゐた肉襦袢をかなぐり棄て、僕の前に眞個の素裸となつた君を立たせるに相違ない。——かう考へた僕は、幾分恐怖の豫感を交へて、「或阿呆の一生」を讀んだ。併し、何たる失望ぞ！　わづか二箇月の日子は、君をして再び「閻中問答」の君に退却させてゐる。虛僞が凱歌を擧げて、眞實が敗北した間の消息は、僕の最も聞かんとするところであつて、君の終に語らなかつたところだ。「彼は最後の力を盡し、彼の自敍傳を書いて見ようとした。が、それは彼自身には存外容易に出來なかつた。それは彼の自尊心や、懷疑主義や、利害の打算の未だ殘つてゐるためだつた。」と言ふのは、君としてはかなり勇氣のある告白だが、意味深長な君の「退却」に對しては、何等の說明にもなつてゐない。この間の消息にして明かにされないかぎり、君は君が俗惡だとして輕蔑してゐる世間には、或種の保護色を着けて臨み、君が意を安んじて與し得るサークルには、恰も罪あるもののごとく裝うて臨んだと言

はれても、殆んど辯解の辭に苦しむだらう。君の狡智な作戰は、君の死が當然將來すべき批難に對しては愛惜を、嘲笑に對しては憐憫を盜み取つたのだ。この種の複雜な戰法は、君の所謂老獪な「新生」の主人公と雖も、恐らくは未だ企て及ばなかつたことに相違ない。況んや正直者の典型ともいふべき有島氏などは餘りにも多く君から學ぶべきところがあると言つていい。

「將軍」と題する君の短篇は、軍人さへ輕蔑すると、それで文人の見識が保たれるとでも思つてゐるらしい小說の一つである。モデルは有名なN將軍だが、作者たる君は、作中の一青年をしてN將軍の自殺を批評させ、彼が自殺前に態々撮影したことは、彼の「至誠」に對して十分な疑惑を挾ませる餘地があると言はせてゐる。君は、君の自殺を、「四分の一は僕の遺傳、四分の一は僕の境遇、四分の一は僕の偶然、——僕の責任は四分の一だけだ。」と辯じてゐる男だ。さすれば君は、人間の性格が、人間以外の條件によつて影響されることの多いのを承認してゐるものと考へていゝ。N將軍は、彼獨特の境遇、獨特の遺傳、獨特の教養、獨特の時代に生きてゐた人だ。N將軍が自殺前に態々撮影したことは、人間以外の條件によつて影響された彼獨特な生活樣式の一面であつて、彼の感情とは毫も交涉のないことではないか。自

殺前に撮影すら出來ないやうなことでは、堂々たる武人の名折れだと考へてゐたとしても、何等彼の至誠を傷ふ理由とはなるまい。君の言ふごとく、彼も人間だ。彼の死後、彼の寫眞が或は商賈の店頭に飾られることあるを窃かに豫期してゐたかも知れない。併し、自ら懷疑家を以て任ずる君にして、尙ほ死後の褒貶を氣にしたり、遺作の出版書肆を懸念したりするではないか。N將軍は旅囘鮮明な理想主義者だ。彼の風丰に接して、窃かに懦夫の立つことあるを豫期してゐたにしても、敢て咎め立てをするには當らない。何れにしても、自殺前のN將軍は、辛うじて撮影するぐらゐの餘裕はあつたが、君のごとく縷々數百言を陳ねて自殺者の心理を辯ずるだけの餘裕はなかつたやうだ。餘裕の有無によつて死の「誠實」を批判することになると、君の場合は、遙かに不利益な地位に置かれなければなるまい。

僕は自殺の讃美者でないと同樣な程度で、自殺の批難者でもない。自分が意欲して生をえたものでないかぎり、自分が意欲して生を棄てることは、個人の自由な權利だとも言ひ得よう。從つて、僕は君の自殺を批難するのでもなければ、君を自殺に導いた動機であつた事實を批難するのでもない。死に處する君の態度を批難するのだ。才人芥川をして、終に小悧巧

な卑怯者たらしめた君の功利主義を批難するのだ。——人が死に對して寛大なのは、死が最後の「誠實」を齎らすからだ。最後の「誠實」を齎らさない死に對しては、死なるの故を以て、特に寛大であらねばならん理由はあるまい。

僕は甘んじて死屍を鞭つの譏を受けんとするものだ。

三　君の懐疑主義

博識な君は、勿論知識の過剰によつて蝕ばまれた人間性の醜さを承知してゐるに相違ない。知識は肥料と同樣だ。適量に施すと、草木は色艶を增して蓁々と生ひ茂るが、適量を越えると、直ちに枯死して終ふ。君と手を携へて、今更ラアウスト博士の書齋を訪れるまでなく、僕は極く卑近な例を君自身に於て見たい。君の全集八卷は、過剰な知識に壓倒されて呱々呻つてゐる人間を、歷々と僕の眼前に描き出してくれるではないか。人間の肉體も、結局物理學の敎へる法則より外には出ないやうだ。あまりに多くの知識が詰め込まれると、その代り

に感情が出て行かねばならない。心と頭とを交換して終ふと、後には全體何が殘るのだ。君はいゝ言葉を教へて呉れた。――「人間獸」！

知識の狂信は、人生觀上の重金主義である。富の容積を黄金によつて計量するごとく、人生の價値を知識によつて計量せんとするものだ。透明な睿知や、豐富な知識は、人を俗塵の世界に拉して、「人生の如何に惱みに充ちてゐるか。」を教へては呉れるが、「人生を如何に生くべきか。」に教へては呉れない。倉廩空しくして、黄金徒らに山積するも、人間の生きてゆく上には何のかゝはりもない。あらゆる感情が枯死して、徒らに理性と本能とが跳梁跋扈する索漠たる光景を想像して見給へ。魑魅魍魎のごとく、百鬼夜行のごとく、常住座臥、縱橫無盡に荒れ狂ふ五慾の煩惱を制して、悍馬ペルシュロンを禦する果敢な騎士のごとくあらんとする理智の暗鬪を。――君は曾て「地獄」を說いたが、これは果して何といふ地獄か。「孤獨地獄」か、それともまた「根本地獄」か。山間、曠野、樹下、空中、どこへでも忽然として現れる可能性があるところを見ると、矢張「孤獨地獄」とでもいふのか。

「莫迦を言へ。僕は戀愛の勇者だぞ。感情の枯死した人間に、戀が出來るか！」

かう言つて、君は僕を頭からドヤシ付けるかも知れない。なるほど君は、どこかで「戀をしたことがないといふ人間。——何といふ俗惡さだ。」とも言つてゐたやうだ。僕は一應君の抗議に服することゝせう。併し、僕の學んだ動物學の知識は、すべての動物が戀するためには、たゞ本能の鞭韃だけで結構だといふことを敎へてくれた。戀の本質は、元來さうしたものかも知れない。それに色々感情の衣を着せて五彩繚亂たる裝ひをさせるのは、畢竟人間の餘計な「さかしら」といふものではあるまいか。僕は君の聰明を以てして、尙ほ戀愛に最後の「信仰」をかけてゐた——その思想的根據を疑ひたい。

君は屢々「俺は懷疑家だ。」と號して威張つてゐる。君が懷疑家だといふことには、僕も別に異論を立てようとは思はない。心（ハート）を喪つて、たゞ頭（ヘッド）ばかりになつた人間は、せめて懷疑家にでもならなければ、外になるものがないではないか。併し、君が懷疑家に相違ないからと言つて、君は君自身の不幸を悲しむべき理由こそあれ、別に肩を聳かして威張るわけはないはずだ。多くの懷疑家が誤信するやうに、君は「最も聰明な精神は、最も優越な睿知の世界に住み、最も優越な睿知の世界はたゞ懷疑家の肉體にだけ宿つてゐる。」とでも考へてゐるの

ではないか。誤解なら幾重にも詫びるが、「君は莫迦だ。」と言はれるよりも、「君は泥坊だ。」と言はれる方が、君にとつては寧ろ我慢し易いのではないか。かうなると、過剰な知識によつて蝕ばまれた人間性ほど、世にも厄介至極なものはあるまい。君は君の明鏡止水のごとき頭腦にも拘らず、誤つた認識の上に立つて、誤つた決論を築き上げてゐるやうだ。主客顚倒の形ではあるが、僕は君を前にして、多少のお談議を試みたい衝動を感じて來た。

人間の歷史に於て、大小幾多の光榮ある歷史——かう言ふと、君は直ぐ横槍を入れて、どこに光榮ある歷史なんていふものがあるんだいと冷罵するかも知れない。だが併し、懷疑家の君さへ、あれほど信用を措いてゐる藝術の歷史もあるぢやないか。——を書いたものは、必ずしも聰明な精神だけではない。高貴な感情も、金鐵の意志も、ともに彼等の持分を要求する當然な權利があるのだ。釋迦や、基督や、孔子のやうな人間が、單に聰明な精神だけを有つてゐた畸形な存在だと、果して君に言ひ切るだけの自信があるか。君が無條件に降參し得る藝術の士を捉へて來てもいい。ミケランゼロも、ベートヴエンも、トルストイも、單に頭がちな侏儒ではなかつたはずだ。君が最も高い位置を與へようとした聰明な精神は、必ず

しも人間の最も光輝ある天分ではなさゝうだ。況んや、最も優越な叡知の世界が、たゞ懐疑家の肉體にだけ宿つてゐるといふやうな考へは、より一層笆棒な誤解だといふ外はない。プラトーや、アリストテレスは、全體懐疑家だつたのか。ゲエテは懐疑家だつたのか。カントは懐疑家だつたのか。

「すべてに對して疑つてかゝる。」ことゝ、「俺は懐疑家だ。」と號することゝは、それこそ白雲相距つこと萬里だ。——懐疑家の好んで愛用する蒼白い外套は、どうも人生の勇者が着る上衣にはふさはしくないやうだ。

君は君の伯父さんとしてモンテーヌや、アナトール・フランスを選び、兄弟としてクライストや、マインレンデルを選んでゐるらしい。それは君自身の自由ではあるが、選ばれたアナトール・フランスや、クライストの方からいふと、かなり有難迷惑な感じがしないでもあるまい。オツトー・ワイニンゲルまでが、君の博捜の網にかゝつて、從弟ぐらゐの位置を與へられてゐるのを見ると、僕はこの勇敢な青年理想主義者のために一掬の涙なきをえない。彼のチユートニックな精神は、未だ曾て羅典風な泣言を並べることなどには馴らされてゐない。

彼は恐らく君以上に博學で、君以上に聰明な精神を有つてゐたと思ふが、君と似てゐるのは自殺したといふだけのことで、彼の遺作たる「性と性格」や、「最後の事物に就て」などは、決して、決して、懷疑家の軟弱な繰言などから生れたものではない。一人でも親類緣者の多い方が氣丈夫だといふのなら、なにも選りに選つて體格頑強な、見るからに懷疑家らしくもないワイニンゲルなどを連れて來ないでも、君の豐富なライブラリーを探すと、欣んで君の手を握るものは、その邊にいくらでもウヨ〳〵してゐようではないか。回教徒の信仰に據ると、地獄と極樂との間にはアルジラートと名付ける橋があるさうだ。天界の星の光が落ちて來て、橋下の水の上に散つた野薔薇にキラ〳〵と戲れるところで、君は今姑らくの間待つてゐ給へ。地獄にも極樂にも片付きかねる懷疑家どもは、今後と雖も續々アルジラートに辿り付いて、その鹿爪らしい顏を並べ立てるに相違ないから。

君は曾て樗牛を貶して「嘘吐き」だと言つたことがある。なるほど彼にも彼の感情を誇張することによる「嘘」はあつたかも知れない。それは寧ろ好漢樗牛の愛すべき所以であつて別に咎を鳴らして責め立てねばならんほどのことではない。僕は君の「山鳴」と題する小篇

を想起する。そこには意地悪のトルストイと、好人物のツルゲーネフとが、一方は傲慢な冷笑を浮べて立ち、一方は困惑した悲哀を帯びて立つてゐる。傍観者としての君は、果して何れに手を伸べるか。君にして若し後者に手を伸べたい衝動を感じたなら、君は毫も楊牛にだけ苛酷であつていゝといふはずはない。世間には、もつと下等な、もつと罪の深い「嘘」がある。悪漢が「俺は悪漢だ。」と告白することさへ、それ以上奸譎な「嘘」はないと感じることのあるものだ。複雑な理知から生れた「嘘」は、屢々善意の世間を瞞着するではないか。懐疑家の君は、逸早く「詩と真實」といふ城砦に逃避して、白々しく鼻の尖を撮んでゐるが、君の驚嘆したルーソーでも、君の軽蔑した「新生」の主人公でも、果して君のごとく鮮かに自己を晦ますことが出來たかどうか。

懐疑家芥川よ。君は如何にも天才らしく多くのエピグラムを殘してゐるが、その一つに「天才の一面は、明かに醜聞を起し得る才能である。」といふ一句がある。眞正面から君の言葉を信じてかゝると、極力スカンダルを避けたらしく思はれる君は、その點だけで既に天才の資格がないといふことになる。それともまた、君は君一流の辯證法を以て、醜聞を起し得る才

能は、同時に醜事を起し得る才能だから、畢竟兩者は同一だと言はうとでもするのか。――全體、君の懷疑主義は、君の身を護る盾か、君の身を殺す刃か。活殺自在の武器であるとすれば、僕は世にかくも調法至極な武器があらうとは思ひもそめなかつたと言ふの外はない。戀愛を樂み、藝術を愛し、功名に對する人一倍の執着心を有ち得る懷疑家！かうなると、懷疑家も徒らに灰色の霧にばかりは包まれてゐないやうだ。必ずしも絶望すべきでない。

四　君の藝術境

君の人間性の上に、頗る感服しがたい暗影を投じた君の「知識」や、「懷疑主義」も、君の文學の上には有力な一特色を點じたことは事實だ。

知識は、單に學者の佑券を裏書するばかりでなく、文學に於ても尙ほ多くの役割を勤めるらしい。文人ゲーテの名聲には、明かにゲーテの博識が手傳つてゐる。知識は、文學の本質

でも必須條件でもないが、文學の或重要な内容とはなり得る。文人漱石、文人鷗外、文人露伴の聲名の中には、彼等の有する宏深な知識の背光が、彼等の殘した文學の上に、必ずや何等かの意味に於ける精彩を添へてゐるに相違ない。

率直に言ふ。君の知識は斷片的であり、且つ本道に薄くして間道に厚い失はあるが、兎に角博捜に於て驚嘆すべきものだ。和、漢、洋の何れをも擯けない點に於て、君は正しく「學東西に亙つた」一人だらう。對談時餘にして、君の口を衝いて出るものは、上は先秦の舊辭、薩珊の織文、希臘の古玩、中世のマニュスクリプト、フランクの歌謠から、下は化政の俗文學、明清の陶磁、モーゴルの繪畫、象徴派の詩文、英米の裏店作家に至るまで、混々、蕩々、殆んど究盡するところを知らない慨があつた。君は知識を愛し、知識に生き、知識に淫した結果、大いに知識の優越を誇りもした。獅子も、時に羚羊を逸する。君が Lope de Vega の大名を知らなかつた時の顔！　亡友の俤を偲ぶ好笑の一場面として、僕は永く記憶の中に留めて置きたい。

君の眼星しい作品は、他の作家が體驗に手頼つて描くところを、多く知識に手頼つて描い

てゐる。君の知識に於けるは、宛も他の作家の體驗に於けるがごとしと言つていい。君は深刻豐富な體驗によつて作品の迫力を強め、否應なく讀者の頭に烙きつくやうな印象を鏤刻せる底の作家ではない。

知識によつて人生を描くことは、哲學によつて人生を語るごとく、人生の諸相を概念化して一つの鑄型に嵌める上には便利であるが、人生そのものゝ生きた姿を捉へて活潑々地に躍動させる所以ではない。況んや、知識は時として知識た盡きる場合がある。「孤獨地獄」は、終に孤獨地獄の解說に留まつてはゐないか。「道祖問答」は、終に古事談か今昔物語かの註釋に留つてはゐないか。「二つの手紙」、「さまよへる猶太人」、「秋山圖」、「第四の夫から」、「尼提」、——かく數へて來ると、君の智的遊戲もまた廣汎なりと言はねばならない。併し、君の老練猾智なる、さすがに尾鰭をつけて尤もらしい「お話」を捏造し、知識を知識のまゝに吐き出して肚裏の汚穢を御披露するがごとき愚を演じてはゐないが、粉飾萬遍するも、女形は終に女形であつて、女ではないのだ。

幸ひにも、君の藝術を、知識の專橫から relieve して、しかも知識を一層效果あらしめる

ものは、君の有する豊富な Vision のお蔭である。君の有する Vision を以て豊富なりとするは、或は識者の與しないところかも知れない。

併し、君の遺作百數十篇の中、或は「不朽」を以て稱すべき幾篇かは、知識の土臺の上に立ちつつ、尚ほ知識の存在を滅却する底の旺盛な Vision によつて構築されてゐる。「偸盗」に描かれた王朝時代の京都が、知識によつて說明される前に、先づ Vision によつて再現されてゐるごとく、「地獄篇」に描かれた戀と藝術との恐怖は、因果の理數を說示する前に、先づ妖血斑々たる畫卷として展開されてゐる。君にして若し、惡左府賴長や、足利義政のごとき興味ある人物を中心として、ある時代の文明を背景とする人間性の葛藤を活寫したならば、歷史小說家としての君は、多分日本の文學史を獨歩する地位をえただらう。「ペーターとアレキシス」や、「サランボー」のごとき雄篇大作を編む代りに、「魔術」とか、「南京の基督」とか、「アグニの神」とか、「馬の脚」とか題する紛々たる唐作を綴り、ために君が惜げもなく天賦の才を濫費したことは、僕の最も遺憾とするところだ。

君は元來作品の內容が示唆する獨自の世界——或は思想的に、或は藝術的——によつて、

自己の存在を主張する作家ではない。君は新しい「恐怖」を創造したわけでもなければ、新しい「美」を發見したわけでもない。君の藝術的天國は、先人未到の域に築かれてゐるわけでもなければ、先人未知の境に建てられてゐるわけでもない。ゴーチェの名によつてゴーチェの世界を想像し、谷崎潤一郎の名によつて谷崎潤一郎の世界を想像するごとく、僕は芥川龍之介の名によつて芥川龍之介の世界を想像することは出來ない。君は時としてロマンチシストのごとく振舞ひ、時としてリアリストのごとく語る。忽焉として神變怪異なボーの幻想界へ沒入するかと思へば、忽焉として白日昭々たるチエホフの現實界へ浮び上つて來る。君は水陸兩棲の怪魔河童の世界を描いたが、文人として君自身が河童ではないか。「手巾」、「魔術」、「お律と子等」、「アグニの神」、「庭」、「馬の脚」等、等が、すべて同一人の手になつたとすれば、文人の特色を或一語に集約して索引たらしめることに馴れてゐる批評家なるものは、君の殘した作品を前にして、たゞ呆然たるの外はあるまい。

同樣に、君を指して人道主義の作家であるとするの不合理は、君を指して惡魔主義の作家であるとするの不合理と同じだ。若し氣が向けば、君はエピキュラスの園をも彷徨するし、

ボードレエルの窓にも靠れる。時にはメリメの馬車をも驅るし、モーパッサンの椅子にさへ腰を掛ける。樹下、石上、ところとして君の壇場たらざるはない。

君が多少ともリアリストらしい態度を以て現れる場合は、君は必ず例の懷疑主義の眼鏡をかけることを忘れない。この眼鏡を忘れないところに、君獨特の世界が開かれるのだ。

君の筆端に上ると、長谷川教授も、大石内藏之助も、瀧澤馬琴も、堅固な信念の地盤から投げ出されて、轉瞬の間に突如として眼界を遮る懷疑の雲に蔽はれるのだ。好んで巫術を弄する妖婆（ウイツチ）のごとく、作者としての君が、それを眺めて、「俺の手腕はどんなもんだい。」と言はんばかりにニヤ〳〵と得意の冷笑を泛べてゐる御面相は、決して愉快なものではない。好人物の禪智內供や、醜男の五位のやうな取るに足らん雜輩まで翻弄して、悲喜の境涯に困迷させるものは、矢張君の懷疑主義だ。二人の懷疑家「袈裟の盛遠」とは命がけで愛慾の焰を弄び、「疑惑」の主人公は懷疑の雲に鎖されて自己の本心を尋ねあぐんでゐる。「枯野抄」や、「將軍」のやうな作品になると、メフィストフェレスの意地悪い、惡辣な光を帶びた眼付が僕の眼前にチラついて、虛心坦懷に藝術を樂しむ氣分を奪ひ去つて終ふのだ。

懐疑主義の眼鏡に映る人生は、決して壮大雄麗な人生ではない。節の穴から見た或風景のごとく、自分の視野に包攝された一事一物の微は落ちなく看取するが、自分の視野を逸した殘餘の風景は、それが如何に豪宕雄偉を極めてゐようと、彼の全然關知するところでない。彼は人生の或一角を巧にスケッチすることは出來るが、人生の或全體を力強く描き出すことは出來ない。――君の推服するモンテーヌが、古雅愛すべき小論文の一聯を殘したごとく、君は典麗愛すべき短篇小說の一聯を殘したのだ。短篇小說は、君の「藝術」を盛るに、恰度適はしい形式だつたと言へないこともあるまい。

併し、君をして終に短篇作家たらしめた他の一半の罪は、君の恵まれない肉體の上にもあつたやうだ。君は餘りに瘠弱い體格と、餘りに纖鋭な神經とを有つてゐた。

試みに、大厦高屋幾十百を連ねる「人間喜劇」の大建築を志したバルザックを拉し來つて、君の傍らに立たせよう。さすれば、君は彼に於て羨むべき多くのものを發見するだらうが、その尤なるものは、必ずや山のごとき體格と、嵐のごとき神經とでなければならない。遺作百十篇の中に、君はすくなくとも四五篇の未完小說を遺してゐるが、それも主として君の體

力不足がなす業だらう。鳳凰堂の建築家が、ピラミットの建築家を驚嘆するやうな心持が、始終君の氣分の何處かに潜んでゐたに相違ない。君は好んで古今の大作を話題とした。時としては、たゞ大作たるの故を以て、浮誇採るに足りないものさへ愛した。君は如何に屢々熱情を以て「ジャン・クリストフ」の壯大な結構と、英雄的な人道主義に就て嘆美したゞらう。君は曾て言つた。「何と言つてもね。君。八犬傳は日本第一の大傳奇だからな。」

ことゝに至ると、君の聰明も、君の懷疑主義も、頗る當てにならなかつたと言つていい。

五　君の技巧と文章

「作品の内容とは、必然に形式と一つになつた内容だ。」

これは君の言葉である。

文藝の本質を二元的に觀ることの誤れるは、君が多々辯ずるまでもない。併し、技倆未だ至らざる文人は、その表現せんとするものを、表現の過程に於て、屢々生氣なき死物たらし

めることが多いものだ。「折角の材料を臺なしにする。」といふ言葉の意味は、或藝術的境地に對する認識は正確であつても、その藝術的表現に於て失敗したことを意味するのだ。

文人として何れを尊重すべきかと言へば、勿論問題ではない。君の道ふごとく、藝術の本質は表現に始まつて表現に終るかぎり、表現に失敗した文人は、最早藝術に於て失敗したものだ。

文人としての君は、決して技倆の乏しきを憂ふる藝術家ではない。君の認識した藝術的境地は、君獨特の創意が豊かに盛られたものでもなければ、君獨特の世界が陸離として展開されたものでもない。文人としての君が、尚ほ愛すべき幾顆かの明珠を最近の我文學史に寄與した所以は、主として君の卓抜な表現術に負うてゐると言つても過言ではあるまい。僕の既に指摘したごとく、文藝上の體驗主義者にあらざる君は、作品の材料を多く徴臭い古典の中に索め、假にも君の藝術的感興を刺戟するものがあると、稗史、野乘、神話、傳說、史實の嫌ひなく、すべてを採つて自家藥籠中のものとしてゐる。

君に於て特に異とすべきは、それらの徴臭い材料の有する古色を傷けることなくして、こ

れに澄潤たる生氣を注入する手腕だ。君が京都を背景とした王朝時代の倫盜を描く時には、英國の傳奇作者がチャールス王時代の倫敦を横行した Hitgrotu の群を描くよりも、——君の愛句を拜借して言ふと、——遙に「人間らしい紅血を漲らしてゐる。」それと同時に、頽廢期の王朝文明が髣髴として眼前に浮び上つて來る。これは勿論、本鄕座仕入の「新しい觀方」のごとき膚淺な魔法細工の善くするところでない。君の祕方とする回春藥が利き過ぎると、時に「袈裟と盛遠」や、「俊寬」のごとき變なものの出來上ることもあるが、それは先づ例外として觀るべきものだらう。

手際よく纏つてゐる點に於て、君の作品は、君の同時代に獨歩の地位を占めてゐた。「手巾」や「或日の大石內藏之助」のごとき材料を消化して、君以上に整然たる布置結構を示し得る多くの作家があらうとは思へない。一讀して下らないものだと思はれる作品でも、兎に角 Slipslop の難を脫してゐるのは、一つには修辭の美もあるが、矢張構架の美が與つて力があるのだ。併し、君の作品が有する構架の美は、君の好んで口にするがごとき「參差錯落たる美觀」を有つてゐるといふよりも、寧ろ齊正典雅な美觀を有つてゐるといふべきだ。天賦

の氣稟は、君をして飛鳥、奈良の建築家に倣はせるよりも、より多く藤原時代のそれに倣はせたらしい。緩かな曲線、纖巧な木組、美しい均齊、高雅な風致、貴族的な趣味、――それらの特色は、何れも君の作品が具備してゐるところではないか。形式美の誘惑が、動もすると Punctilio の弊に墮する虞れのあることは、君の素より悉知するところだ。晩年の諸作に於いて、君は著しく自由な手腕を揮はんとしてゐるが、それらは未だ奔放自在の域に達せず、依然として初期から中期に至る間の整然たる布置結構の中に、君の作品が備へる妙趣を發見せしめるがごとき、才人君のごときにあつては、特に遺憾とすべきだ。

君の作品に備はる最後の、そして最大の美は、君の文章が有する美だ。君が縱橫に驅使する語彙の豐富な點に至つては、君の先輩たる鷗外、漱石の大を以てするも、君の同輩たる谷崎、北原兩氏の手腕を以てするも、未だ君の牙城に薄るをえないかも知れない。古羅馬の美食家が、食膳萬丈、山海の奇珍を陳ねて饗宴を盛んにするごとく、君は和、漢、洋の語彙を傾けて辭を修め、言葉の鍊金學者たる天分を遺憾なく發揮してゐる。

殊に、君は不思議な Relish の才を有つてゐる。君のエリキデールに觸れると、如何に陳

腐な言葉でも、皆新鮮な光を帯びて輝いて來る。君は決して未熟な、洗練されない言葉を用ゐない。同一の事物を表現する時にも、「くぐつ」といふ言葉の適切な場合と、「淫賣」といふ言葉の適切な場合と、「忍薬子」といふ言葉の適切な場合とを別ち、それ〴〵の場合に、それ〴〵適切な言葉を用ひんと努めてゐる。飾文の弊極まつて、君の名文も時に「縫潰し」の煩に陥ることはあるが、不思議にロココの悪趣味に墮してゐない。屢々嫌味を以て目せられる君の古玩癖や、琴棋書畫趣味も、この點に於ては、君の文章に一抹蒼凉の氣を點じ、以て無用の華美に陥ることを制禦してゐるやうだ。

古代の支那人は、「彫琢」といふ言葉とともに、「績文」といふ言葉を用ゐてゐる。前者は文を彫るのだが、後者は文を績ぐのだ。前者は屢々斧鑿の痕を貽し、後者は屢放逸の弊に墮する。多くの Purist とともに前者の側に立つてゐる君が、先人とともに弊を同じふしてゐないことは、僕の最も欣ぶところだ。文章家としての君は、優に大正以後の文壇に於て覇を稱するに足るだらう。君の文を貶して衒耀浮誇唾棄すべしと唱へる輩は、先づ顧みて自己が不文の才を恥ぢ、須らく君の文によつて餘師を見出すべきだ。君の修辭術に於ける Archaism

を見よ。初期キリシタン文學の古體を模して、殆んど堂に入るの慨があるではないか。しかもまた、この Archaism によつて、君の捉へた題材が、より適切な、より效果ある表現をえてゐることも事實だ。假に「奉教人の死」が、、坦夷明白な現代文によつて書かれてゐるとすれば、作品の內容が醞釀する藝術的雰圍氣に於て、兩者の間には著しい懸隔が生ずるに相違ない。その文體の晦澁古拙な形式の中に、僕等は初期キリシタン時代の陰暗朦朧たる氣分を感じ、そこに描かれた美しい殉教の時代を呼吸することが出來るのだ。——レニエの巷談綺語や、耨牛の「況後錄」を以て閑餘の弄文と評するのはいい。併し、君の得意とする Archaism は、斷じて閑餘の弄文ではない。

才人芥川よ。僕は君の有する多くのものに頭を低げたが、君を以て天與の蘊蓄はなはだ豐かな文人だとは思はない。君は聰明な頭と、多くの知識とを有つてゐた。君はまた、巧緻な技巧と、美しい文章とを有つてゐた。天賦稀薄、わづかに辭を陳ねて文苑の一隅に席を占めるものの多い中にあると、君の才は優に黃龍を駕禦して晝騰するに足るだらう。併し、君が文人としての內面的素質は、決して惠まれたりといふべきではない。僕をして率直に言はしめよ。

モンテーヌに對して用ひたプリュンチエールの用語例を借りると、僕は君を以て「大剽竊家」だと斷言するも憚らない。「君が君の書齋に於て愛する作家と交游した結果」は、あまりにも多く君の作品の上に大きな影を投げてゐるではないか。惡辣な探偵眼を光らすまでもなく、君の「藏品」の中から、僕が鷗外の上衣や、アナトール・フランスの靴や、漱石の帽子を探し出すことは、眞に一擧手一投足の勞にすぎないのだ。「Mensura Zoili」や「不思議な島」を讀むものは、そこに小鷗外の超然高擧する風姿を偲び、「河童」の世界に遊ぶものは、アナトール・フランスと手を携へて「ペンギン島」に迷ひ込んだ思ひがするだらう。若しそれ、漱石的口吻、漱石的氣分、漱石的趣味に至つては、隨時隨所に遍滿して、一々指摘するの煩に堪へない。

野人禮に嫻はざる僕は、生前この一事を進言して君の震怒を買ひ、爾後終に君と信を交ふるの欣びを失つた。自ら任ずることの高い君のことだ。僕の言を耳にすれば、「餘計なお世話だ。」とでも言つて空嘯くかも知れない。併し、君は既に幽冥界の人間だ。今後幾久しきに亙つて、君の遺作が絕えず批評家と稱するものの俎上に上せられ、無殘にも鉛刀幾百割されよ

うと、君は最早何等の抗議をも提出する機會を有たないのだ。僕は君が默して僕の言に聽くところあるを信じたい。

君は曾て言つた。「輿論は常に私刑である。」と。批評は勿論、君の大いに嫌惡した私刑の尤なるものだらう。併し、好んでギロチンの柄を把るものは、同時に薔薇の冠を捧げるものだ。微笑とともに、薔薇の冠を受取るものが、ギロチンの前にのみ澁面を作るといふことはすくなくとも「蟲がよすぎる」と言ふべきだ。人一倍功利の觀念に聰い君と雖も、素より「鄙吝」の名を忌むに相違ない。僕が進んで率直言をなす所以だ。

六　君の碑銘

君は曾て某氏の死を悼む文を作り、偶々「急焉玉碎す。」といふ句をえて、內心大いに得意だつたらしい。偶言讖をなす。君こそ「急焉玉碎」した第一人ではないか。すくなくとも荏苒全しなかつたことだけは事實だ。君は君に與へられた仕事は、十二分と言つてもいい程

度に成し遂げた。あれ以上の仕事をすることは、君の任でもあるまいし、何よりも先づ君の體力が許すまい。

君が死を急いだことによつて、日本の文壇が尚ほ多くの傑作を有つべき機會を失したゝらうといふのも、多分杞憂にすぎないとすれば、君一家の骨肉の親に對する深甚な同情は別として、僕は殊更に君の死を悲歎する氣持にはなれない。強ひて僕を悲しませるものがあるとすれば、日本の大學が、君の死によつて何れかは得らるべき好個の良教授を喪つたといふことだ。僕の持論によると、君の肩書としては、翰林學士、國子司業、いづれも君が嫌がるほど不適當だとは思はない。幾十年の後、日本の文科大學が、白髪の老教授芥川博士をえたとせば、當時の學生は、毫もテーヌの講座に列する欣びをえたフランスの學生に垂涎する必要はないはずだ。

死後三百年を待たずして、君の全集は大いに賣れたさうだ。併し、失望するな。君の全集が大いに賣れたわけは、君の懐疑主義が大いに世の時好に投じたからでもなければ、君の燦爛たる文辭が大いに世俗の好尚を煽り立てたからでもない。今の世に歓迎されるなどといふこ

とは、君の自尊心が甘んじて承認することを許すまい。僕は確言する。君の全集が大いに賣れたわけは、君の聲名と、君の不可解な死とに壓倒された愚昧な民衆が、或は單なる好奇心から、或は單に君を識るといふチッポケな虚榮心から、たゝわけもなく財嚢を傾けたといふにすぎない。君が一般の讀書階級などからは迚も手の屆かない世界に棲んでゐることは、今に於ても尚ほ事實だといふことを。——僕は時々「文豪芥川……」の文字に出會すことがある。蹙行文學であると、誰れかれの差別なく「文豪」にしなければ承知しない日本のことだ。英、米、獨、佛、露の張三李四が、相率ひて「文豪」である以上、君が「文豪」であつたところで何の不思議もない。

君は大手を振つて、「紅毛人」達の獨占する靈界の文場を訪ね、聽するところなく當然の座席を要求するがいい。さすれば、君のそれよりも一段高い座席には、君に緣の深い夏目先生や、アナトール・フランスや、森鷗外氏などが坐つてゐて、「あゝ、あれは芥川だね。存外早く來たものだ。」と言ひながら、君の方へ好意に充ちた微笑を送るに相違ない。こゝに至ると、娑婆で酷く君を苦しめた懷疑主義などは、最早「犬にでも食はれて終へ！」だ。

僕の告別の辭も、意外に長くなつた。偖て、何と言つて最後の言葉を結んだものだらう。君の碑銘として、僕が羅馬教徒のごとく R. I. P. の三字を大書して、君の靈が靜かに眠らんことを禱つたところで、生前あれほどコンヴエンションを厭つた君の意を迎へる所以ではあるまい。僕は句を西諺に借つて君の碑銘を撰び、生前懷疑主義の戰士だつた君の冥福を禱ることゝせう。

「在天の靈よ。願はくば去勢猫のごとくに憂鬱なる勿れ。」

○

おゝ神よ。御身は勞力の價を支拂ふことに於いて、あらゆる善きものを我々に賞り渡すのである。

○

我々の肉體は天に所屬し、天は精靈に所屬する。

○

心靈は肉體の腐敗に依つて決して惡化されはしない。けれども、肉體の中に在つて、恰度オルガンの響を起す風のやうな役目をする。若し、そのオルガンの中でパイプが一本破損してゐたならば　風はそのパイプの中で到底善い結果を生むわけにはゆかない。

——「ダ・ピンチの言葉」より

アンナ・カレニナの悲劇

一　『アンナ・カレニナ』の意義

トルストイが、『アンナ・カレニナ』に於いて描いた悲劇は、果して何を意味するであらうか。ある批評家が云つてゐるやうに、『バルザックのあらゆる偉大な小説や、シエークスピアのあらゆる偉大な戯曲と同じやうに、アンナ・カレニナは特に情熱の悲劇である。』と云ひ切つて差間へがないであらうか。

――こゝにアンナと名付ける一人の女性がゐた。彼女は彼女の夫であるアレクセーイに對して、何等の愛情をも感じてゐなかつた。そこにヴロンスキーと稱する男が現れて來た。彼と彼女との間には直に戀愛が成立した。アンナは夫を棄てて家を出た。しかし、彼女と、彼女の愛人との戀愛生活は永續しなかつた。彼女は遂に自殺した。

單なる筋書だけを辿ると、アンナ・カレニナの悲劇は、ありふれた姦通悲劇である。そしてこの不倫なる事實、この悲慘なる結末が、あらゆる地上の掟を破壞し、あらゆる因襲道德

を踏み躙つて顧みない炎々たる情熱の火から起つたといふことも否定しがたい。——フランチエスカ・ダ・リミニの悲劇の秘密を釋くべき鍵が、アンナ・カレニナのそれを釋くべき鍵と同一であるとする主張も、あながち誤つてゐるとは斷定せられないだらう。

忠實なる讀者にとつては、アンナ・カレニナの悲劇を以て、單なる情熱の悲劇であるとする見解が、甚しく物足りないものであるに相違ない。あらゆる戀愛は情熱から出發する。情熱のないところには戀愛はありえない。何等かの意味に於いて、戀愛を取扱はうとする以上は、必ずや情熱の力を閑却するわけにはゆかない。況んや姦通のやうな特異の戀愛干係を描き出す時には、作者は特に熾烈な情熱の炎を借りようとする。從つて、アンナ・カレニナの悲劇が情熱の悲劇であるといふことは、戰爭の慘禍が反感の慘禍であるといふことと同じやうに、分り切つたことを鹿爪らしく云つただけのことである。

アンナ・カレニナの悲劇を正しく理解しようと思へば、先づアンナが如何なる性格の所有者であつたか、如何なる境遇に置かれてゐたか、如何なる事情の許に自殺したか。——それらの事實に就いて、出來るだけ微細に考へて見る必要がある。さうすると、問題は自ら解答

を見出すであらう。

二　ヘレンの美とアスパシアの才

『アンナ・カレニナ』の中に出て來る主要な人物は、一人として生きてゐないものはない。ヴロンスキーにしても、キッティにしても、レヸーンにしても、オブロンスキーにしても、すべての人物が皆活躍浮動の域に達してゐる。しかし、作者が特に力を入れて描き出さうとした女主人公（ヒロイン）アンナほど、讀者に對して強烈な實在感と、はつきりした人格意識とを注入するものはない。思ひ切つて云ふと、アンナ・カレニナは、近代の小説に現れてゐる女性の中に於いて、最も偉大なる創造である。

アンナの美しさに對する紹介は、作者の巧みな筆によつて執拗と云ひたいまでに繰返されてゐる。女性の美を評價し、女性の美を鑑賞するために必要な語彙のすべてが彼女の一身に凝結してゐるのではないかと思はれるほど、作者はアンナの美しさに淫してゐる。彼女を一

見したもののすべてが、彼女の美に征服された。彼女の非倫な行爲に對する道德的反感などは、彼女の美の前には一溜りなく擊退された。氣むづかしい道德家のレーギンまでが、初めて彼女を見た瞬間に於いて、彼女の美に壓倒された。

作者は又、アンナの聰明さ、怜悧さ、敎養の深さに就いて述べてゐる。如何なる場合にも、彼女は會話の中心人物たるべき資格を供へ、すばやい判斷と、正しい理解と、チヤーミングな話振とを以て、政治を論じ、敎育を語り、伊太利の繪畫を鑑賞し、ゾラやドウデエの文學を批判する。彼女の才氣が火華のやうに放射するところには、あらゆるものの光彩がかき消されて、唯だ彼女のみが寶石のやうな光を放つ。

『何といふ驚嘆すべき女だらう。』

彼女に接した多くの人物の口を通じて、作者は常にかく云はせてゐる。

一言にして云ふと、作者は、アンナ・カレニナと名付ける一女性の稟賦の裡に、惜氣もなくヘレンの美と、アスパシアの才とを與へてゐる。この點に於いて、彼女が、あらゆる男性の愛を受くべき資格の完全なる所有者であつたことは云ふまでもない。しかし作者によつて

餘りに豊かに恵まれたこの美と才とは、果して如何なる「性格」の内に盛られてゐたか。――それに就いて、われわれは考へて見なければならない。

三　アンナの性格

アンナの性格は、極めて復雑である。一見多くの矛盾や撞着があるやうに思はれるが、それでゐて微妙な統一が出来上つてゐる點からすると、神の心のまゝに作られた自然の孩兒であるといふ感じが強い。動もすると、概念の傀儡のやうに見られ易いイブセンやストリンドベルクなどの女性に比較して、アンナの方が著しく生々としてゐるやうに見える理由は、全く此點にあるのではあるまいか。

アンナの性格を一貫する最も際立つた素質は天眞といふことである。彼女の性格には、いささかも虚僞の陰影が加はつてゐない。あまりに單純に、あまりに率直に、あまりに生地のまゝの自己をさらけ出すために、彼女は屢々不必要な誤解の結果が、自分に對して如何に酬

いて來るかといふことなどは考へようともしない。矯飾と虚僞とに充ちた世界の裡に生活して、彼女のやうな自然さを保持してゐることは至難であるが、彼女は何等の困難をも感じてゐないらしい。

小鳥が樂しげに囀り、小兒が愉快げに戯れると同じやうに、彼女が常に快活であるのは、彼女の天眞が流露するからである。彼女は、自分の周圍を正當に批判し得るだけの眼と頭とを持つてゐるが、好んで暗黑を見、好んで罪惡を考へるといふやうなことはしない。彼女の温いハートに觸れると、あらゆるものが微笑し、あらゆるものが歡呼する。呪ひと挑戰とを豫備して彼女に對するものも、一たび彼女の虚心な態度に接しると、直ちに彼女の同情者になつて終ふ。

『あの人は變りませんね、いつもチヤーミングな顔をして。どうしてまああんなにお綺麗なのでせう！　でもあの人にはどこかお氣毒な處がありますわね！　隨分お氣毒なところがありますわね！』

アンナの爲めに自分の戀人を奪はれたキツチーさへ、どうしても彼女を惡み通すことは出

來なかつた。

アンナの性格の中に何か不自然らしいものがあるとすれば、それは彼女のコクェツトな態度である。モスコーの停車場で、ヴロンスキーが初めて彼女に逢つた時に、彼は、彼女の表情の中に特に人を惹きつけるやうな甘つたるい何物かの存在するのを見たが、後にレギーンが初めて彼女に逢つた時に、彼女の態度の中に矢張同じものを發見した。それは巧まずして彼女自身から流れ出たものであるといふよりも、むしろ彼女自身が故意に作り出したものであるといふ方が正しい。

幸か不幸か、アンナは強烈な自意識を持つてゐた。何時いかなる處に於いても、彼女は自分といふものを意識せずして動くことは出來なかつた。天眞そのものとも云つていいほど自然であつた彼女の性格は、この自意識を彌が上にも燃え昂らせるのに好都合であつた。彼女には自己僞瞞がないと同時に、自己抑制もなかつた。彼女の在るところには、いつも彼女の『自己』が無遠慮に放射された。ある意味に於いて、それはプライドとなり、征服慾となり、傲慢となり、時にはコクェツトな態度とさへなつた。ヴロンスキーも、レギーンも、この強

烈な自意識の標的となつたのだと考へれば、大した間違ひはあるまい。

『あの人の御主人を私に惚れさせて終ふことが出來たのだ。……私にそんな氣さへあれば。いや實際そんな氣があつたのだ。』

アンナが、レギーンの妻であるキツチーに投げかけたこれ等の言葉ほど、彼女のプライドや、征服慾や、傲慢や、コクェットな態度を痛快に自白したものはない。比類稀れな美貌と才氣とを所有した女性が、その美貌と才氣とを武器として總ての男性を征服しようとし、且つ總ての男性を征服し得るものだと信じてゐるのは、必ずしも不當なことではない。しかし如何に聰明である彼女も、男女關係にあつては、征服するといふことが、動もすると、征服されるといふことになるのを知らなかつた。天眞そのものとも云つていゝ彼女の世界には、かゝる單純なパラドツクスさへも通用しなかつたのである。

最後に私は、多くの戀愛悲劇の女主人公と同じやうに、アンナも矢張彼女の胸裡に情熱の坩堝を持つてゐたといふことを書き添えて置きたい。斷えず其坩堝の中に沸騰してゐた彼女の情熱は、彼女をして恒に何物かを愛させずには置かなかつた。母としての彼女が、如何に

彼女の子供を愛したか。若し、彼女が自分の子供を愛したやうに、自分を夫を愛することが出來たならば、アンナ・カレニナの悲劇は、遂に讀者の眼前に展開されずして終つたであらう。

問題は、當然彼女の境遇といふことに移つてゆかなければならない。

四　アンナの境遇

作者の說明に據ると、アンナと、彼女の夫であるアレクセーイとの間には、非常に年齡の隔りがあつた。從つて、彼女が初めてヴロンスキーを知つた時は、彼女自身は心身の爛熟した女盛りであつたが、彼女の夫は、すでに氣力の銷盡しようとする頽齡期に近づいてゐた。彼女の身內に充ち溢れてゐた旺んな生活力は、斷えず適當なはけ口を求めてゐても、その要望を滿たすべき何物もなかつた。最初の遭遇に於いて、ヴロンスキーが彼女の眼の中や微笑の裡に認めた何物かの『過剩』は、取りも直さずこの旺んな生活力が、彼女の身外に汎濫してゐたものに外ならない。アンナとアレクセーイとの關係に齟齬の這入り易い第一の原因は

玆にあつたが、眞に二人が相愛してゐたならば、この第一の原因を排除するぐらゐのことは、さまで困難ではなかつたであらう。

アンナの夫であるアレクセーイは、善良な紳士であつた。社會の尊敬と羨望とを一身に集めた政治家として、彼は恪勤と、克己と、コンゼンショナルな道德と、官僚的な常識と、廉直と、名譽心と、平俗な趣味との世界に生きてゐた。彼は正直な人間であつた。彼は寬大な人間であつた。教養ある一個の紳士として觀察したならば、何人も彼を惡むことは出來まい。彼を惡んだ唯一人の人間であつたアンナさへも云つた。

『矢張あの人はいい人ね。正直で、親切で、あんな階級では、なんと云つてもすぐれた人だわ。』

彼女の理性が、時にかく囁くにも係らず、彼女は、何故アレクセーイを惡まねばならなかつたか。——用意された多くの答へを並べ立てる前に、私は先づアレクセーイが人間らしいハートを持つてゐなかつたといふことを特筆しなければならない。

アンナの嚴酷な眼から見ると、アレクセーイは、單に名譽心の機械であるに過ぎなかつた。

なるほど彼は廉直で、正直で、寛大ではあつたが、それらの美徳も、栄達の雲梯を登るための手段以外の何物でありえたらう。常に『功名』といふ牢獄の中に監禁されてゐた彼は、最早人間らしい心持を以て喜ぶことも出來なければ、人間らしい心持を以て悲しむことも出來なかつた。彼の頭は理性によつて支配されてゐたにしても、彼の心は感情から見棄てられてゐた。彼はアンナを愛した。しかし、彼のアンナに對する愛は、彼の名譽心を犧牲にすべき必要とともに死滅したかも知れない。

『全體、この人は愛することなどが出來るだらうか。この人は愛といふものの此世に存在することを聞かなかつたら、さうした言葉を一生涯口にしなかつたに相違ない。』

自分の妻に對して奴僕のやうな禮儀と、親切と、讓歩と、忍耐とを以て接してゐる夫が、自分の妻からかやうな殘酷な批評を受けるといふことは何たる悲慘であらう。アンナは、自分の名譽心のために、自分の妻の不貞を罰することすら出來ない彼女の夫を見た。アンナは又、自分のコンゼンションのために、自分の妻を誘惑した男に決闘を挑むことすら出來ない彼女の夫を見た。競馬會の日、彼女が彼女の情夫であるヴロンスキーに對する感情を、衆人

稠座の中で無遠慮にさらけ出してゐる時、それを熟知してゐる彼女の夫は、例のごとく權勢のある人々の中を泳ぎ廻つて、心にもないお世辭やお愛嬌を振り蒔いてゐた。彼が、彼女の眼に『卑劣な、いやな人間』としか映らなかつたとしても、別に怪しむべき理由はない。『私は嘘を付くことは嫌ひだ。私は虚僞には堪えられない。それだのにあの人は毎日嘘ばかり食つて生きてゐる。』

アンナがどうしてアレクセーイを愛することが出來よう。アレクセーイの最も高く評價してゐるものは、アンナの最も輕蔑してゐるものであり、アレクセーイの最も力強く肯定してゐるものは、アンナの最も力強く否定してゐるものであつた。『心』の世界にあつては、アレクセーイよりも、アンナの方が遙かに高い地位を占めてゐた。アンナの日常を支配してゐた感情や、氣分や、感覺や、趣味の世界は、アレクセーイなどの覗いて見ることも出來ないものであつた。悲しいことには、アレクセーイには、この二人の『心』の世界の間に存する距離に對しての正しい認識がなかつた。彼は、アンナを以て唯だ美しい女だとしか考へてゐなかつた。彼は、アンナが如何なる『夢』を擁いてゐる女であるか、如何なる『幻』を弄めて

ゐる女であるかを知らなかつた。――一言にして云ふと、アンナは藝術家であつたが、アレクセーイは實際家であつた。實際家のテーブルの上には、『夢』や『幻』を解釋すべき辭書は置かれてゐない。

ヘレンの美と、アスパシアの才とを具へた若きサツフオの情熱に對して、この平俗な、この常識的な、より美しい世界、より高い世界に對する何等の要求をも持たない、老ひたる一官吏の乾涸びた心が何の役目をなしえようぞ。二人の關係に罅隙の這入り易い第二の原因は玆にあつた。

五　悲劇への發程

多くの悲劇は、半ばは運命の惡戲によつて發生する。運命の惡戲さへなかつたならば、アンナとアレクセーイとの不自然なる結合も、終に破裂に至らずして終つたかも知れない。多くの善良な讀者は、遂に破滅の深淵に飛び込んだアンナの慘ましい姿を見て、『あゝヴロンス

キーさへ居なかつたら』と考へるであらう。

『結婚』の名によつて、アレクセーイとの間を堅く縛り付けてゐた鐵鎖を斷ち切つて、アンナが些の躊躇もなくヴロンスキーの抱擁の中に投じた理由は、最早くど〳〵しく說明する必要はあるまい。アレクセーイに比較すると、肉體的にも、精神的にも、ヴロンスキーは、遙に卓れた資格の多くを持つてゐた。すくなくとも彼は眞にアンナを愛することが出來た。アンナを愛するがためには、大切な名譽をも犧牲にしうるだけの眞實があつた、彼はアレクセーイの決鬪の双をも覺悟してゐた。況んや、自分の榮達の如きは、アンナの前には何等の價値をも持つてゐなかつた。

悲劇の第一步は、アンナがヴロンスキーの抱擁の中に身を投じたことによつて始まつた。彼女は、彼女の夫を裏切るとともに、社會の因襲道德に挑戰し、彼女の子を棄てるとともに、母性の愛に叛逆した。眞實に生きようとする彼女にとつては、自己の挑戰に對する社會の復讐は猶は忍びえたにしても、自己の叛逆に對する母性の執拗な哀訴には堪へられなかつた。彼女が、彼女の愛子に逢はんがためにどれだけの苦悶と焦慮とを繰返したか。伊太利への觀

光の族、ヴロンスキーの田舎の領地に於ける靜かなる生活、——恣ひまゝに戀愛の幸福な意識の中にのみ溺れてゐた瞬間た於いても、彼女の心持の一隅には、棄て去つた子供に對する愛着の念が燃え上つて、斷へず彼女を苦しめてゐた。思ひ切つた行爲によつて、彼女は愉かに一つのものをえた。しかし、その一つのものをうる代償として、彼女は、他の一つのものを棄てねばならなかつた。彼女をより幸福にしたものは、果して彼女が新しくえたものであつたらうか。それとも亦、彼女が棄て去つた古いものではなかつたであらうか。アンナ・カレニナの悲劇は、その點に就いて、非常に意味深い暗示を提供してゐる。

ヴロンスキーに逢ふまでのアンナは、明かに子供によつて生きてゐた。ヴロンスキーに逢ひさへしなかつたならば、彼女は多分子供によつて生涯をも生きえたであらう。彼女の立場から云ふと、夫のために子供を奪はれたといふことは、何物にも增して苛辣な刑罰であつたに相違ない。いよ〳〵子供が失はれて終うたとすれば、彼女の手に殘るものは唯一つのヴロンスキーのみである。『萬一、このヴロンスキーを失うたならば……』——さう考へて見ただけでも、彼女は戰慄せざるをえなかつた。

悲劇の第二歩は、アンナが自己の背水的な地位を自覺することによつて始まつた。彼女は彼女の掌裡からヴロンスキーを逃さないために、あらゆる手段を選ばなかつた。彼女は、自分の容色を維持するために苦慮した。そして避妊をすら辭せなかつた。しかし、二人の生活が長くなればなるほど、二人の間には氣まづいことが起りがちであつた。自分の仕事のためにヴロンスキーが他行しようとすると、それは斷えず男の全部を占領して居らうといふ彼女の意圖に反した。二人の間にはいつも醜い爭ひが起つた。その爭ひの結果は、男の心を冷かにするばかりであつた。ヴロンスキーが出かけて行つたあとで、『自由』に對する自分の權利を主張するやうな彼の眼付を思ひ浮べると、彼女は立つても座つて居られなかつた。

『あの眼付は、私に對する情愛が冷めかかつて來たことを意味するのだ。』

彼女は最後の苦肉策として、法律の鎖を以て男を堅く自分に結び付けることを考へた。それにはアレクセーイとの離婚が必要であつた。その離婚を承諾させるために、彼女は男とともに莫斯科に出た。しかし、期待した莫斯科は果して微笑を以て彼女を迎へたであらうか。

莫斯科に於けるアンナの最後の生活は、この大作に於いて最も生彩ある部分である。自分

を待ち設けてゐる悲劇を眼前にしながら、彼女は如何に花々しく活躍したことであらう。彼女の美しさも、彼女の才氣も、彼女の自然さも、彼女の魅惑的な態度も、この部分に於いて最も生々と描き出されてゐる。レギーンとの會見の場面のごときは、作者自身が此哀れな女主人を熱愛する餘りに、彼女のために態々作り出してやつた『晴れの舞臺』ではないかと思はれるほど、讀者に對して忘れがたい印象を與へる。しかし、地上に於ける彼女の美しさや、愛らしさは、最早間もなく消え去るべき運命にあつた。——アレクセーイは、彼女の離婚の要求に對して、斷乎たる拒絶を以て答へたのである。

六　悲劇への到着

アンナとヴロンスキーとの間に起つた最後の決裂は、果して何物によつて起つたのであらうか。眞にヴロンスキーがアンナを愛さなくなつたからであらうか。

公平な第三者から見ると、ヴロンスキーに對して擁いてゐるアンナの猜疑や、危惧や、不

安の念は、主として彼女自身が勝手に空想からでつち上げたものである。全人格的に所有し盡さうとする彼女の專制の手から、彼が逃れようくとするのは、必ずしも彼の愛が稀薄になつたからではない。彼から云ふと、アンナに對する愛には變りがないにしても、最初に彼女を愛した時のやうな狂熱を以て、四六時中彼女の胸に顏を埋めてゐるわけにはゆかない。彼には彼自身の生活があつた。時には、アンナとの戀愛から解放されて、彼の自由が樂しみたかつた。しかし、さうした態度は、アンナの眼には愛情の稀薄とか、愛情の對象の變化とか云つたもののやうにしか感じられなかつた。彼女は烈しい嫉妬によつて胸を燃した。その烈しい嫉妬に觸れると、ヴロンスキーは、益々不愉快になるばかりであつた。

『自分の方が悪いのだ。私は物事に激しやすい。私は極端に嫉妬深いのだ。』

感情の嵐が靜まつて、冷かな理性が甦つて來ると、アンナもかやうに獨語することがないではなかつた。しかし、彼女は自意識の強い女であつた。彼女の心の中には飽くなき『傲慢』が潜んでゐた。打ちしほれた彼女の如何にも賴りなさそうな姿を見ると、例の『傲慢』がむくくと頭を擡げて、直ちに猛烈な勢ひを以て反撥して來た。——彼女のプライドは、一分

間と雖も、劣敗者としての自分、悲慘な立場にある自分を想像するに堪へられなかつた。

二人の關係が段々惡化してゆくに連れて、アンナには彼女の過去の行爲を悔ひる心持が起つたであらうか。否々、彼女はいささかも過去を顧みて悔恨の念を感するといふやうなことはなかつた。過去の行爲を悔るといふことは、彼女がアレクセーイの前に跪いて哀を乞ふことであつた。それは彼女の眞實を愛する心持が許さない。從つて、彼女は過去を唯だ過去として認めた。自分の失うたかけ換へのない名譽も、今に至つては最早塵灰に等しいものとして觀じた。彼女の希求、彼女の願望、彼女の努力、彼女の苦悶が、一に懸つてヴロンスキーの愛にあつたといふことは、自己の生活を肯定する彼女の心持が、如何に强かつたかといふことを示すものに外ならない。

『あの人が、若し私を愛して居らないのに、たゞ義務として親愛な態度を執つてくれたところで、私の眞に望んでゐるものがなかつたなら仕方がない。それは憎惡よりも千萬倍も惡いぢやないか！　それは生きながらの地獄ぢやないか！』

アレクセーイの前に跪いて哀みを乞ふことを潔しとしないアンナは、ヴロンスキーの手に

抱かれて憐れまれることも潔しとしなかつた。從つて、ヴロンスキーの態度を有耶無耶に承認するといふことは、ヴロンスキーに對して彼女を奴隷の地位に置くことであつた。虛僞に基づいた平和よりも、彼女は眞實に從うた破壞を選んだ。彼女の熾烈なる自我は火のごとく燃え昇つた。そして焦慮と苦悶とに昏倒しさうになつた彼女を鞭つて、次第〳〵に最後の斷崖へと追ひやつた。

『さうだ。いつそ一思ひに死ぬことだ！』

悲劇は終に來た。そして彼女のいたいけな生命とともに、彼女の屈辱も、彼女の情熱も、彼女の罪惡も、彼女の自我も、彼女の美も、彼女の才も、すべては皆消え去つた。

七　悲劇の眞因

こゝに於いて、私は考へて見たい。——トルストイが『アンナ・カレニナ』に於いて描いた悲劇は、果して何を意味するであらうか。

何人も直ちに心付くことは、愛情なき結婚が、此悲劇を惹き起す端緒を作つたといふことである。なるほど、アレクセーイとアンナとの間には、特に愛情と名付くべきものはなかつた。そしてその爲めにアンナがヴロンスキーの許に走つたといふことも事實である。しかし、愛情なき結婚といふことは、この悲劇の一つの動機を作つたかも知れないが、この悲劇の直接な原因を作つたものではない。アンナが自殺したのは、明かに自己の罪惡に對する悔悟からではなかつた。自己の罪惡に對する悔悟でない限りは、この悲劇に對する重大な責めを、過去の結婚生活に於ける破綻に歸するわけにはゆかぬ。この意味に於いて、この大作を構想した作者の意圖が、愛情なき結婚に對する警告又は抗議に盡きるなどと考へたならば、それは非常な誤解であると云つていい。

最も明白なことは、アンナとヴロンスキーとの戀愛生活が順當に持續さへしてゆけば、この悲劇は決して起らなかつたに相違ないといふことである。さうすると、この悲劇に對して最も重大な責めを負ふべきものは、二人の戀愛生活に介入して、その順當な持續を障碍したものであると云はなければならない。それは何であつたらうか。私は斷乎としてアンナ自身

であつたと云ひ切るより外はない。

既に述べたやうに、アンナが意を決してヴロンスキーの抱擁の中に投じた時、彼女は自分の愛する子供を棄てねばならなかつた。自分の愛する子供を棄てるといふことは、今後のアンナにとつては、ヴロンスキーによつて生きるより外に道がなくなつたといふことを意味してゐた。彼に對する彼女の危惧や、猜疑や、憤懣の念は、彼女がこの背水的な地位を自覺することによつて始まつた。たとへ彼を失つたところで、彼女には猶ほ子供が殘されてゐるといふ考へさへあつたならば、彼女はさまで驚きはしなかつたであらう。しかし、彼女は、彼女の生命を托するものが、唯一人のヴロンスキーしかないと考へるとともに、彼女の平靜を失ひ、彼女の理知を失うた。――悲劇の第一原因が『母性』の愛に對する彼女の叛逆にあつたことは云ふまでもない。

事實を云ふと、アンナとヴロンスキーとの戀愛生活は、彼女が考へてゐるほど危險に瀕したものではなかつた。ヴロンスキーの態度の中に幾分の冷却はあつたにしても、それは戀愛生活が經過すべき當然の段階に達したことを意味するまでで、彼等の間に於ける眞の生活は

むしろこれから後に始まつたかも知れない。それを態々退引ならぬ境地にまで追ひつめたものは、彼女自身の不必要な猜疑や、危惧や、憤懣の念であつた。彼女は一途にヴロンスキーの不信を主張し、不信を誇張し、不信を怒つた。しかし、彼女は唯だ一つでも眞に確實なものを見たであらうか。否々、彼女が脅え、彼女が恐れ、彼女が吠え付いたものは、すべて單なる『影』であるに過ぎなかつた。

無殘に踏みにぢつた『母性』の愛に呪はれて、事情は益々惡化した。しかし、運命に對する忍從の心さへあつたならば、彼女はまだまだ救はれたに相違ない。悲しいことには、彼女を導くものは飽くを知らない『自我』であつた。生死を托する斷崖の上にあつても、彼女は誇らしげに濶歩しようとした。しかも彼女の腰はふらつき、彼女の足は顫えてゐた。彼女は猶ほ屈しなかつた。愈々眼がまひ、氣が顚倒して一步も進みえなくなつた時、彼女は救助に向つて絶叫する代りに、身を躍らして斷崖の下に投じた。——悲劇の第二原因が、飽くなき『自我』に對する彼女の執着にあつたことも疑ふ餘地がない。

この意味に於いて、アンナ・カレニナの悲劇は、一面には『母』の悲劇であり、一面には

『我』の悲劇である。一たび『母』となつたものが、子に對する愛を棄て去ることの如何に至難であるか、また、『我』に盲ひたものが、幸福な戀愛に沒頭することの如何に不可能であるか、トルストイの大作『アンナ・カレニナ』は、それに就いて切實な暗示と教訓とを與へてゐる。

八　『アンナ・カレニナ』の教訓

アンナが鐵道自殺をしてから後、ヴロンスキーの生活は破壞された。彼は最早生の支柱を見出すことが出來なかつた。彼は慘ましい自己の殘骸を處する方法に窮して、自らセルギヤの義勇軍に身を投じた。戰地に向つて急行する汽車の旅で、彼は偶々出會はした或る知人に云つた。

『左樣ですね。一個の武器としてなら、私はまだ何かの役に立つかも知れません。しかし、人間としての私は、最早、……一個の廢墟に過ぎないのです。』

アンナは、自分の死が、慥かにヴロンスキーに對する痛烈な復讐を意味するであらうといふことを考へてゐた。それが、死に急いだ彼女にとつての唯一の慰めであつた。豫想は果して適中した。そしてヴロンスキーは滅びた。身を以て生の痛苦を嘗めなければならなくなつた點から云ふと、彼の方が、彼女よりも寧ろ深刻な悲劇に逢着したと云つていゝかも知れない。この儼乎たる事實の背後には、不倫なる戀愛は、決して幸福な結果を齎すものでないといふ、作者自身の鋭利なる批判が潜んでゐるのではあるまいか。

その許しがたい罪惡にも拘らず、多くの讀者は、多分アンナを愛するであらう。そしてアンナの悲慘な最後に同情するであらう。自然に生き、眞實を熱愛したといふことは、何物にも增して雄辯に彼女の罪惡を辯護する。彼女の僞らざる生活、彼女の曇りなき生活の前に立つては、如何なる人間と雖も、自分の方が、彼女よりもより正しいと主張し得るものはあるまい。アンナは、明かに因襲道德に對する挑戰者であつた。それとゝもに眞實に對する擁護者であつた。そこには無謀な、しかし、勇敢な戰ひが續けられた。その結果として、前者としての彼女は慘めな敗北を遂げたが、後者としての彼女は花々しい捷利をえた。

『復讐は我れにあり。われ報ひん。』

この大作の巻頭に掲げた作者の言葉は、ひとりアンナのヴロンスキーに對する意圖のみを表白するものではあるまいと思ふ。

グスターヴ・フローベルと『祖國』

一　『聖アントワンヌの誘惑』

グスターヴ・フローベルが『聖アントワンヌの誘惑』を書き始めた頃の佛蘭西は、現今の佛蘭西よりも、より以上悲慘な、より以上窮迫な狀態に置かれてゐた。

ラインを渡つて潮のごとく佛蘭西に侵入したモルトケの軍隊は、ワイセンブルグ、メッツ、セダンなどの戰ひに連捷して、明日にもヴエルサイユの宮苑に三鞭の杯を擧げようとする勢ひを示してゐた。——いふまでもなく、全佛蘭西の國土は動亂の渦中にあつて、戰敗の悲哀と苦痛とに包まれてゐたのである。

この時偉大なる『マダム・ボヴリー』の作者は、老母と共にルアンの町に近いクロアツセの自邸にゐた。そして『聖アントワンヌの誘惑』の稿を起してゐた。本當に『血を以て書く』ことしか出來なかつた彼は、『ペリクレス時代のギリシア人が、明日の糧があるかないかをも知らずに藝術に沒頭した。』やうな心持で一字一句にも滲み入るやうな勞苦を積みながら、一

意尊心自分の仕事に從ひたいと思つた。

しかし、彼の書齋の窓から遠見することの出來る美しいセエヌの下流一帶は、勝ち誇つたプロシアの軍隊に依つて占領せられ、ペンを握つて考想に耽つてゐる彼の耳には、日々大砲の響きが襲うて來た。鳥の聲と、木の葉の色と、太陽の光とに抑じんで、折角愉快な仕事を續けてゐた彼は、この無氣味な闖入者のために、幾度不愉快な沈默を强制せられたか分らない。ペンを擱き、頭を擧げて深い冥想に落ちた彼の眼前には、踏み躙られた田園や、燒き拂はれた村落や、飢餓に泣く老幼や、壓制に苦しむ婦女の慘ましい活畫圖が浮び出て、極めて感じ易い彼の心を掻き毟つた。殊に、近き世の光榮に醉うてゐた佛蘭西が、今將にプロシアの脚下に跪かうとしてゐる有樣を見ると、その堪へ難い屈辱を憤ほる念が燃え上つた。

『拱手してプロシア人の侵入を傍觀してゐるよりも、寧ろモスコーに倣つて巴里を焦土に歸せしめた方がいゝ。』——

彼の激昂した心が叫んだ。

間もなく第三の帝政が倒れて、新しい共和政府が樹立せられた。しかし、プロシア軍は尚

らに進撃を續けて終に巴里を包圍した。孤立無援の地に在つて、刻々飢餓に迫りつつある『藝術のメツカ』を想像した、彼は、恰も現世の亡滅を思ふやうな心持で、暗い悲哀に囚はれないわけにゆかなかつた。彼は考へた。

『人々は皆物質の奴隷や、サーベルの崇拜者となつて、ラテン民族は苦痛の下に喘ぎ、佛蘭西は、スペインやイタリアの運命を學ぶといふやうな悲しむべき世紀が、驅て我々を訪れて來るに相違ない。何といふ慘めな崩壞であらう、何といふ淺ましい敗亡であらう。これほど猛烈な打擊を受けては、到底我々の再起は不可能だ。』

巴里には多くの友人があつた。それらの友人の身の上を思ふことも、彼にとつてはかなりの苦痛であつた。『再び巴里を見ることの出來る日に於ては、友人といふ友人は恐らく死んでゐるか、それとも姿を消してゐるに相違ない。』——かく考へて來ると、彼は自分のみが獨り曼然として勞作に從事してゐるといふことが、何だか非常な罪惡でもあるかのやうな氣持がした。そして文學などといふものは單なる虛榮であつて、何等の役にも立たないものであるまいかと考へた。一生を藝術の殿堂に奉仕して、長い年月の間聊かの悔ひもなく靜かな勞作を

續けて來た彼は、この時既に五十の坂を越してゐた。しかも五十の坂を越したこの時に於いて、始めて彼は躬自ら自分の仕事を疑ふやうな氣持になつたのである。彼は『聖アントワンヌの誘惑』の筆を中斷した。

しかし、彼は落付くことが出來なかつた。幾日となく惱ましい焦慮の日が續いた。彼は何處にか逃げたいと思つた。軍人のゐない、喇叭の音のしない、人殺しの話の聞えないやうなところへ逃げてゆきたいと思つた。そこで彼は地上に生れた一個の人間として、何等の拘束も受けない、自由な、靜かな、平和と、安泰とに充ちた生活を想像した。

慘憺たる防戰の後、巴里は終に降服した。戰捷者の强制に依つて、驚くべく屈辱的な媾和條約が結ばれた。そして彼の所謂『ブールジョアの共和政府』が出來、彼の所謂『政治上の實證主義』の日が始まつた。——クロアツセの故棲に在つて、眼前に展開する走馬燈のやうな世態の推移を觀たが、しかし、戰後の佛蘭西は、戰時の佛蘭西と等しく、矢張彼の眼に不快なものとして映るに過ぎなかつたのである。

現實の醜さから逃避するがためには、過去の夢に隱よりに方法はないと考へた彼は、

曾て中斷してゐた筆を執つて、再び『聖アントワンヌの誘惑』の稿を續けた。勞作の幾ケ月が過ぎた。稿は何遍となく更新された。必要な參考書を求めるために態々巴里にも出かければ、また、ホムの神に就いて正確な知識を得るために、態々ペルシアの宗教をも調べた。かうした忽忙な生活の裡に、突如として彼は老母の死を迎へた。

悲しみの幾日かを經過すると、無意味な大砲の響に代つて、鳥の聲と、木の葉の色と、太陽の光とが、久し振りに彼の世界に歸つて來た。——彼はかなり愉快な心持を以て、遂に『聖アントワンヌの誘惑』の稿を終へることが出來た。

二　祖國に對する感情

『マダム・ボヴリー』や『サランボオ』とともに、『聖アントワンヌの誘惑』が彼の藝術的生涯を飾る寶玉の一つであるといふこと、またこの作が確かに近代文學史上に於ける "most splendid phantasmagaria" の一つであるといふことに就いては、玆に更めて絮說す

るまでもあるまい。

私は『聖アントワンヌの誘惑』を熱愛する。ある意味に於いては『マダム・ボヴリー』以上に、また、ある意味に於いては『サランボオ』以上に。――しかし、私がこの作品から受ける藝術的感應は、多くの場合、私がこの作品から受ける聯想的興味に依つて排迫され勝ちである。その聯想的興味とは外ではない。私の粗笨なる叙述が、今讀者諸君に傳へたところの事實である。

『藝術のための藝術』といふプリンシプルを奉ずることに於いて、世にフローベルほど熱烈なる信仰を持つてゐた人はすくない。彼にとつては藝術以外に何の價値あるものもなかつた。多くの詩人藝術家が好んで神聖視する戀愛すらも、彼は勿論藝術のためには犧牲にせらるべきものだと考へた。彼に從ふと、あらゆるものが荒廢であり、且つ、あらゆるものが亡滅である中に、たゞ一つ永遠の生命を保證されてゐるものは藝術であつた。

この意味に於いて、彼は自ら『女性が自分の生活中に這入つて來たことは一度もない。』と云つたほど淋しい生活をした。六十年の長い生涯を送つたクロアツセの自邸には、彼の友人

として老いたる母と、親切なる姪と、香氣の高いシガーとがあるだけで、それ以上に彼の甘美な情緒に媚びる何物もなかつた。殊に、彼は俗惡な散文的な近代の文明を呪ふとともに、また、ブールジョアの跋扈した、徒らに喧騒な巴里の生活を嫌つた。そして只管古代の燦爛たる文化を戀ひた。ペリクレスの支配したギリシアや、シーザーの支配したローマの昔を思ふ時、彼は如何に熱い心を以て追慕の情趣に涵つたことであらう。彼は云つた。

『今日の人間が自分に與へるところの不愉快な感情は、自分をして漸次過去の人間に親しませるやうにする。』

同時に、彼は彼が佛蘭西人であるといふことに依つて、たゞ一回と雖も特殊な感情を湧き立たせられたことはなかつた。彼が佛蘭西の國土に生れたといふことと、また、彼の血管に佛蘭西人の血液が流れてゐるといふことゝは、彼の内的生活に對して、全く何等の關りもない存在を持つてゐる二つの事實であるに過ぎなかつた。

かうした心持と、かうした生活との中に在つて、彼は『マダム・ボヴリー』を書き、『サランボオ』を書き、さらに『感情教育』を書いた。しかし、愈々最後の大作『聖アントワンヌ

の誘惑』に筆を着けようとする時に至つて、彼はもう昔日の彼であるわけに行かなかつた。彼の平靜は破れた。彼の確信は動搖した。これまで彼の思ひもそめなかつた『祖國』といふ感情が、突然彼の意識面に強い力を以て頭を擡げ始めたからである。

生れてから初めて經驗するやうな惑亂が起つた。彼は泣いた。彼は悶へた。彼は叫んだ。しかし、彼は彼の祖國と、彼の祖國の國民とをどうすることも出來なかつた。たゞ涙に濕うた眼を瞬きながら、彼は日々自分の眼前に展開される慘劇を傍觀してゐるより外はなかつた。

藝術に奉仕する心持は、『祖國』に奉仕する心持に席を讓つた。彼はペンを棄てないではゐられなくなつた。

驟て颱風は一過した。後には慘憺たる敗跡のみが殘つた。『祖國』の前途に就いて思念する彼は、さらに深い憂愁を以て當來の運命を揣摩した。しかし、彼は矢張絶望の人であつた。

――一旦ペンを棄てた彼は、以前とは全く異つた心持を以て、再びペンを執るより外はなかつた。

今にして考へて見ると、當時の彼が經驗した如上の事實は、彼の生涯の歴史に於て、最も意味深い、同時に、最も興味の多い頁を領するものではあるまいか。すくなくとも五十年に亙る長日月の間、『祖國』といふものを全く視野の外に置いて、——否、ある意味に於ては積極的に否定してさへ生きてゐた彼が、突然勃發した事變のために刺戟せられて、忽ち熱烈なる『祖國』の愛護者として生れ變るに至つたといふことは、そこに必ずや多くの有意義なる問題を包藏してゐるに相違ない。

常にリアインされた、典雅な藝術的感情に依つてのみ包まれてゐた彼の世界には、聊かたりとも低俗な人間的感情の介入することが許されなかつた。この意味に於いて、彼は『祖國』に對する觀念のごときをも輕蔑した。自分の生れた國土に對する特別な愛着や、自分の生れた國土の人民に對する特別の同情などは、すべて淺薄幼稚なるセンチメンタリズムの所産に過ぎないと考へたからである。——彼が彼自身を一個の佛蘭西人として意識することの出來なかつた根本的な理由も、畢竟この一事に存してゐたのであつた。

然るに現實に於ける彼は果してどうであつたらう。矛盾もいい。撞着もいい。たゞ彼の場

合にあつては、それらのものが餘りに大きくはなかつたであらうか。玆に於いて私の問題は更に一歩を進めて行くのである。

三　藝術家の心

フローベルは、好んで『科學的』といふ言葉を用ひた。事象を取扱ふ場合に於いて、あくまで客觀的精神を把持し、聊かも自家の主觀を交へないといふ意味である。

なるほど『マダム・ボヴリー』を讀んで見ると、女主人公が段々暗黑の淵に沈んで行く經過を描くことに於いて、作者は何等の躊躇もしてゐない。時には殘酷だと思はれるほどの冷靜を以て、一つの生靈を運命の翻弄に委ね去つて顧みないやうなところもある。この點に於いて見ると、彼の客觀的精神はかなり徹底したものだと云つていい。しかし、人間の死骸を解剖して病因の所在を探究する醫師の態度を以て『科學的』であるとする意味に於いて、この女主人公の破滅に至る經過を描き出した彼の態度を以て、果して『科學的』であるとする

ことが出來ようか。いさゝか疑ひなきをえない。

すくなくとも私が『マダム・ボヴリー』を讀んで受ける實感から云ふと、この作者が女主人公を取扱ふ態度と、前記の醫師が死骸を取扱ふ態度との間には、かなり大きい差違が存してゐるやうな氣持がする。あくまで客觀的精神を把持し、いさゝかも自家の主觀を交へないといふ意味に於いて、私は後者の態度が明かに『科學的』であるといふことは保證するが、しかし、前と同じ意味に於いて、私は前者の態度もまた明かに『科學的』であるといふことは保證しがたい。何となれば、後者が女主人公を取扱ふ態度の中には、到底蔽ひ盡すことの出來ない後者の女主人公に對する同情が潜んでゐるからである。

『マダム・ボヴリー』を讀むと、私はいつも紙背に隱れてゐる作者の眼、——涙を一杯に溜め、且つ、深い愛を湛へた瞳は專念に物を凝視してゐながら、その瞳の奥には一種のデスペレートな光を包んだやうな眼を想像する。何といふ暖かい同情であらう。何といふ儚かな憐愍であらう。『それが自然の運命だ。どうすることも出來ない。』と呟きながら、猶は、最後の破滅にまで顚落して行きつつある女の姿を凝視して、限りなき哀憐の情を注いでゐる作者

の態度を見ると、私は自然に頭の垂れ低るやうな崇高い感じに打たれないわけにゆかない。しかも作者としてのフローベルは、これによつて毫もその客觀的精神の把持を妨げられてはゐないのである。

事象をあるがまゝのすがたに觀て、何等の私念をも交へないといふ點に於ては、疑ひもなく彼は自然主義者であつたが、しかし、あるがまゝの事象に對して、何等の人間的感情をも抱かないといふ點に於ては、彼は決して自然主義者でなかつた。彼は實人生の種々相をさながらに描き出す鋭い眼の所有者であるとともに、また實人生の種々相を同情に依つて理解しうる暖かい心の所有者でもあつた。從つて、時に彼が恐ろしく冷酷な人間に見えたり、時に彼が恐ろしく辛辣な人間に見えたりすることがあるのは、全く彼の鋭い眼が光つてゐるからであつて、敏感なる讀者は、その鋭い眼の光つてゐる奥に、必ずや涙に濕うた瞳の輝くのを發見しうるに相違ない。そして作者の素質に具はる人間的感情の意外に潤澤で、且つ意外に博大であることを感知するであらう。

若し、以上の事實を理解することが出來たならば、フローベルが普佛戰爭の勃發に依つて

突然愛國者としての自分を見出したといふことも、また何等の矛盾撞着にも値しないわけである。『祖國』に對する觀念を以て、彼がすべて淺薄幼稚なるセンチメンタリズムの所産に過ぎないと考へたのは、あくまで客觀的精神を把持し、いさゝかも自家の主觀を交へないといふ彼の『科學的』態度に基くものである。現前の事實に對する彼が、一變して自家の所信を裏切る人となつたのは、彼の素質に具はる潤澤にして博大なる人間的感情に因るものに外ならない。從つて、彼は日一と日亡滅の淵に近づきつつある『祖國』の運命を凝視する時に於いても、かの可憐なる一婦人の運命を凝視した場合と等しく、『それが自然の運命だ。どうすることも出來ない。』と呟きながら、慘ましい現實を現實として諦認しうるだけの覺悟があつた。『澤山の言葉がないではない。佛國の再起は可能であるとか、絶望するなかれとか、寧ろ喜ぶべき懲罰であるとか。または自分等が餘りに不道德であつたとか。しかし、それらの言葉は皆嘘だ。これほどの打擊を受けては、到底佛蘭西の再起は望まれない。』と云ひ切つた彼の心持の裡には、如何に透明な客觀的精神と、如何に力强い人間的感情とが渦巻いてゐることであらう。かうした心持の裡から、彼の生涯の藝術が孵み育てられたのである。

私は思ふ。獨りフローベルばかりに限らない。彼が卓越した藝術家であつたならば、彼は必ずやフローベルに等しい心持の所有者であつたに相違ないと。

假令藝術として提供された樣式と傾向とは異つてゐるにしても、かつてソフオクレスに依つて表現され、かつてミケランゼロに依つて表現され、かつてゲエテに依つて表現され、かつてストリンドベルヒに依つて表現され、かつてトルストイに依つて表現されたものは、等しく皆透明な客觀的精神と、力强い人間的感情との調和から生れたものである。この點に於いて見ると、彼等は明かに共通した心持の所有者であつた。

未だかつて私は唯單に透明な客觀的精神から生れた優秀な藝術を見たこともなければ、また唯單に力强い人間的感情から生れた優秀な藝術を見たこともない。透明な客觀的精神のあるところには、必ず力强い人間的感情があり、力强い人間的感情のあるところには、必ず透明な客觀的精神があつてこそ、眞當に卓越して『藝術家の心』がありえよう。

グスターヴ・フローベルの生涯と作品とは、私にその生きた事實を提供して呉れるのである。

佐藤春夫論

はしがき

文壇の消息子が報ずるところに據ると、昨年の文壇はすくなくとも二人の新らしい作家を文壇の表面に送り出した。その一人は舊新思潮同人中の一人たる菊池寛君で、今一人は舊星座同人中の一人たる佐藤春夫君だといふのである。最近の文壇に於いて、兩君の名聲が甚だ高いといふことは文壇時事に迂い近頃の私すらも承知してゐるところであるが、兩君が文壇への初見參に於いて果して如何なる業績を示してゐるか、果して如何なる傾向や特長を示してゐるかといふことに就いては、かくいふ私すらも甚だ漠然たる考へしか持つてゐなかつた。その後に至つて、菊地君の作品の三四を讀んで作家としての同君に對する幾分の意見や感想も纏まつたわけであるが、どうしたわけか、佐藤君の作品に眼を觸れる機會は乏しくて、同君の評判は日を趁うて昌んであるに關らず、私自身は不相變作家としての同君に對して何等の定見をも持つに至らなかつた。

然るに此度本誌の編輯者から作家としての佐藤君に對して何か書いて呉れといふ依頼なので、これを絶好の機會として、私は初めて氏の作品を讀んで見た。尤も私が匆忙の間に眼を透した氏の作品は、氏の短篇集たる『病める薔薇』、『お絹とその兄弟』とに收められた十四五篇の作品に過ぎないのではあるが、これらの諸作は、皆氏をして今日の盛名あらしめた代表的作物であるらしいから、これらの諸作によつて、作家としての氏の特質や、傾向や、技倆やを秤量して一向差閊へはあるまいと思ふ。この意味に於いて、以下私の述べようとするところは、上述の二つの短篇集に基いて立論したものに過ぎないものであることを斷つて置きたい。

さらに今一つ斷つて置きたいことは、作家としての佐藤君を論じようとすると、私の頭にはすぐ人としての佐藤君が浮んで來るが、私は作家としての佐藤君を論ずる場合には、出來るだけ人としての佐藤君を忘れてゐたいと云ふことである。嚴密に云ふと、氏の作品と、氏の人とを切離して二元的に考へるといふことは、恐らく安當な考へ方ではあるまい。しかし、私自身の便利から云ふと、氏の作品を觀想するときに氏の人を捨象するといふことは、作家

としての佐藤君が、動もすると、人としての佐藤君に依つてディスターブされることを防ぐ上に於いて都合がいゝばかりでなく、氏の人が有する猥雑なる属性を一洗して、出來るだけ純粋に、出來るだけ本質的に、出來るだけいゝ意味に氏の氣質なり人柄なりを浮き上らせる上に於いても、極めて適當な方法ではあるまいかと思ふ。

これだけのことを云つて置いて、愈々本論に入ることにする。

一　谷崎君の推輓

すくなくとも文壇だけの範圍内に於いて見ると、新しい權威の成立つところには、概ね古い權威の保證があるといふことは、幾分の眞理を含んだ言葉であるらしい。佐藤君の文壇への初見參が、奇才谷崎潤一郎君の推輓に依るところが多かつたといふことは、佐藤君の大いに感謝して然るべきことであらう。

佐藤君の第一短篇集ともいふべき『病める薔薇』の冒頭に於いて、谷崎君は氏の藝術的天

分の豐富なるを說き、且つ、氏の藝術的特質に對する簡明なる批判を與へてゐる。

谷崎君は云ふ。——

「佐藤君の藝術の眞價に就いては、予は從來幾度か筆に口に賞讃の辭を惜しまなかつた。予は予と同君との交際があまり親密であるのを顧慮して、幾分か控へ目にして居たのではあるが、それでも猶且同君を褒めずには居られなかつた。さうして同君の如き稀なる天分を有する作家が、長く文壇から認められずに居たのを私かに慨いてゐた一人であつた。」

今日までの事實に徵すると、谷崎君の推擧はかなり信用していいものである。同君は徹骨徹髓の藝術家ではあるが、同君の饒かな稟賦の裡には、如何にも藝術家らしい直覺力が動いてゐて、自己の氣稟に、乃至、自己の藝術的雰圍氣に近い或る特性に觸接して、いち早くこれを感知する不可思議な天分を備へてゐる。この不可思議な天分に依つて、或る特種なものに對する同君の發見は、概ね迅速に、且つ、概ね正確に行はれるのを常とする。

この意味に於いて、谷崎君の佐藤君に對する推擧は、作家としての佐藤君の能力に就いてかなり有力な保證である。しかし、私達は果して谷崎君の保證通りに作家としての佐藤君を

信ずることが出來るかどうか、また、谷崎君の保證以外に作家としての佐藤君から何物をも見出すことは出來ないものであるかどうか。この二つの點に對する吟味は、當然本論文の主要なる內容を形作るものであらねばならないのである。

私は先づ、佐藤君の作品の主なるものを個々に檢覈することに依つて、此最後の論結に到達しようと思ふ。而して、此最後の論結に到達するまでの過程に於いては、全く谷崎君に依つて與へられた此貴重なる暗示から解放されることに依つて……。

二　『病める薔薇』

裝幀の大體に於いて高雅なる、しかし、その何處にか幾分の臭味を有することを否むわけにはゆかない短篇集『病める薔薇』の劈頭には、一九一五年十二月の作として『西班牙犬の家』と題する小品がある。作者は此小品に傍註して「夢見心地になることの好きな人々の爲めの短篇」といふ言葉を揭げてゐる。何といふ愉快(?)な、何といふ氣を負うた稚氣ぞ！

論評の第一歩に於て、私は特に作家としての佐藤君が有する此稚氣を特筆して置きたい。『西班牙犬の家』と題する小品は、書物にして纔か十六頁を出でない作物ではあるが、形に於いてばかりでなく、心持に於いても手際よく纏まつたものである。態々巻頭に置いてある點に於いて忖度せられるやうに、此作品は作者も心窃かに得意とするものであるらしい。一匹の愛犬を伴れた男が、斷えず湧き上つて來る空想の中に涵りながら、「正午に間もない春の日ざしが、楡や樫や栗や白樺などの芽生したばかりの爽かな葉の透間から、煙のやうにまた匂のやうに流れ込んだ」雜木林の中に分け入り、不圖「入口に近い窓の日向に眞黒な西班牙犬が居る」一軒の草屋根の家を見付けて、其家の中に這入ると、室内には何人もゐなくて、唯だ不斷に水の湧き出る石彫の水盤と、二三の椅子と、卓と、卓の上に置時計と、白く燃えつくした煙草が一本と、外に塵まみれになつた本が五六十冊机上に積上げてあるばかりであつた。そこで犬を連れた男は此部屋の中でさまざまな空想を擅にした揚句、室外に出て今一度家の内部を見ると、「例の眞黒な西班牙犬はのつそりと起き上つて」大机の方に歩きながら、「あゝ今日は妙な奴に驚かされた」と人聲で云つたやうな氣がしたかと思ふと、一瞬の間に、「五十

恰好の眼鏡をかけた黒服の中老人になり、大机の前の椅子によりかゝつたまゝ、悠然と口には未だ火をつけぬ煙草をくわへて、あの大形の本の一冊を開いて頁をくつてゐるのであつた。」といふのである。纖細なる表現と、行き屆いた注意とを要する此種の作品に對して、私の餘りに簡單な、餘りに大まかな紹介は原作の俤を髣髴することだも不可能であるかも知れないが、併し、此簡單な、此大まかな紹介を以てしても、猶ほ且つ此作品の内容を構成する取材が果してどんな性質のものであるか、此作品を貫く全體の氣分が果してどんな種類のものであるかは、恐らく推測するに難くはあるまい。外國の作家の例に徵すると、此種の取材は別に異とするに當らないが、あらゆる空想的な作品の殆んど地を拂つて空しい我國の文壇にあつては、慥かに一つの異例とするに充分であらうと思ふ。

『西班牙犬の家』は、僅かに十六頁の小品であるのに反して、『病める薔薇』は殆んど百三十頁に垂んとする長篇である。此の作品は一朝にして作家としての佐藤君を有名ならしめたものであるが、氏の作としては成るほど力の籠もつたものであらう。全篇を一貫する何等の構想もなく、主人たる一人の男の生活を中心として、その周圍を取捲く自然と人生とに對する心

持を、極めて自由な筆致と、極めて放恣な形式とを以て描き出した點から見ると、此作は特に主觀的に色彩の濃厚なものと云つていい。從つて、此作品の中に描かれてゐる夫婦二人の淋しい生活も、一つの挿話に因緣づけられた廢園も、廣い平野の一角に巢食つた土民の荒寥たる部落も、その部落の生活を支配する自然も、すべてはその存在に於いて何等の意義もなく、皆主人公たる一人の男の生活に依存して、初めて何等かの意義を裏付けられてゐるのである。しかも全篇に漲る一種の氣分は、それが假令或る程度の誇張と、或る程度の假構との上に成立つてゐるにしても、兎に角作者獨特の實感から生れたものであつて、毫も拵へものの感じがしない。この點に於いて、最も新らしい形式の隨筆とも見るべき此作品は、作者の心の生活に對するかなり忠實な記錄と云つてよからう。現に『病める薔薇』と稱する題名にしても、それが如何なる意味に於いて作者自身を象徵してゐるかは自ら明白なことであつて敢て疑惑を挾む餘地はあるまいと思ふ。

力作といふ點に於いては、作者が態々 "a fairy tale" と斷つてゐる『李太白』も、亦『病める薔薇』と等しき地位を要求するものである。この作はある程度まで李白その人の傳記を

經とし、その他の點はすべて作者自身の空想を緯として織上げた神仙譚といふべきものであつて、全篇に亘る華麗なる文字の驅使と、全篇を貫く放恣なる空想の疊積とは、すくなくとも外形に於いて小膽なる讀者の眼を眩するに足るものがある。殊に、水中に落ちた李白が魚になる點や、魚になつた李白が安期生から自分の詩を聞かされる點や、魚の李白がやがて天界に昇つて星になる點などは、作者の大いに自負する點であらうと思ふが、慥かに或程度の奇想たるを失はない。

三　『お絹とその兄弟』

既に短評を與へた以上三篇の外、私は少なくとも今二三篇の作品に就いて何等から言葉を加へて置く必要がある。

私は先にき作者の『李太白』を評して奇想であると云つた。しかし、單に奇想であるといふ意味からすると、例の『指紋』の如きは其尤なものであらう。あるオピアム・イーターの經

驗した怪奇なる事實を興味中心的に仕組んで、これを作者獨特の藝術感に依つて塗り潰したところは、兎に角一種の手腕には相違ない。すこし露骨な言ひ方をすると、此作品に依つて佐藤君は君の有する善惡兩面の特性を殘りなく羅列して見せて呉れたやうなところがある。君の文字に對する敏感、君の官能描寫に對する惑溺、君の傳奇を偏愛する性癖、君のペダンテリーに對する誘惑、君の幻想を喜ぶ傾向、君の風變りな趣味性、——さう云つたやうなものが隨所に隱見して、すくなくとも作家としての君に對する好個の索引たる役目を勤めてゐる。從つて、此作品は作家としての君が有する長所をも遺憾なく發揮してゐるとともに、また、作家としての君が有する短所をも殘りなく曝露してゐる點に於いて、かくいふ私にとつては、かなりの興味に値するものである。しかし、此作品に對する藝術的評價は、如上の事實とは自ら別個の問題として取扱はるべきものであつて、此作品の有ゆる藝術的價値の焦點が果して作者の得意とする奇異なる構想(それは嘗て作者自身の暗に告白したところである)の上に置かるべきであるか否かといふことは、此際私の輕々に論斷し難いところである。

佐藤君の第二短篇集『お絹とその兄弟』の冒頭には、問題の短篇が載つてゐる。嘗て『病

める薔薇』に取入れた同じ自然を背景として、茲では或一人の女の波瀾に富んだ生涯を半ば自叙的に、半ば客觀的に描いたものである。氏の作品にしては珍らしいほど現實味の強いものであつて、その少女時代の薄倖な生活を叙するあたりには、かなり色濃く塗られた實感の跡がないでもない。しかし、此作品に就いて作者の成功した點は、女主人公お絹とその兄弟との人間を浮彫にして、彼等の個性を眼に見るやうに活躍せしめるといふところにはなく、むしろ反つてお絹とその兄弟との生涯を作者自身が如何に觀るか、且つ、如何に感ずるかといふ創作的な動機の上にあるのである。從つて、此作品が特にリアリスチツクな傾向を色濃く帶びてゐるに關らず、此作品の持つてゐる實際上の面白味が、反つて其さわり情調の上に存するといふことは、作家として佐藤君を觀る上に於いて、非常に意味の深いことだと思ふ。

『お絹とその兄弟』に次いで載せられてゐる『青白い熱情』といふ作品は、作品としてはかなり瑕瑾の多いものではあるが、佐藤君の藝術的な傾向なり、佐藤君の藝術的な特性なりがはつきり現れてゐる點に於いて、矢張或程度まで私の興味を刺戟するものである。題材の上から見ると、此作品は『西班犬の家』などと等しく、現實の世界と、幻想の世界との限界を

撤して、二つの世界を何等の差別もない現實(廣い意味に於いての)として認めようとする作者の心持を具象的に描き出したものである。劈頭にボオの詩『アナベル・リー』を引いてゐる點や、此作品の主人公が有する一種風變りな熱情を形容して、特に「青白い」といふ言葉を冠らせてゐる點などを見ても、作者自身の藝術的氣稟の一般を想像することは出來るが、此作品の主題そのものほど、明白に作家としての彼自身を說明してゐるものはない。殊に、此作者が此作品の主人公の經驗した幻想を態々第三者たる說明者自身にもさながらの實在として認めさせようとした(それが藝術的に果して成功してゐるかどうかは別個の問題として)點に於いて、私は更に一段の感興を覺えないわけにゆかない。巧妙なる叙述と、豐富なる技巧と、作者自身の中に生きてゐる烈しい情熱の力とによつて、作者の意圖(現實の世界と幻想の世界との融合)を遺憾なく遂行する點にかなり大きな缺陷を示してゐる此作品は、かうした意味に於て、特に私の注意を惹いたのである。

此短評の最後に於いて、私は今一言を加へて置く。

以上六篇の中の藝術的に最も佐藤君の天分を保證するものは『病める薔薇』と、『お絹とそ

の兄弟』との二篇であつて、これに次ぐものは『李太白』と、『西班牙犬の家』と、『指紋』との三篇であらう。外に『或る父と子』と題する小品は慥かに佳作を以て許すべきものではあるが、特に取上げてかれこれいふほどのものではない。作家としての佐藤君の特徴と、佐藤君の傾向と、佐藤君の手腕とは、上述の諸篇に於いて、既に餘蘊なく發揮されてゐるからである。

四　ロマンチシスト

玆で初めて私は私の批評を綜合的な方面に進めて行く機會に到着した。

かつてロマンチシズムの問題が文壇の一部に取扱はれた當時、何人であつたか、現在の文壇に於ける代表的なロマンチシストとして谷崎潤一郎君や芥川龍之介君の名を擧げてゐたものがある。なるほど谷崎君の素質にはロマンチツクな分子がかなり多量に潜んでゐるのを認めるが、同君の作品全體が必ずしもロマンチシズムの所産ではない。更に芥川君の作品のご

ときは果して何處にロマンチシズムの匂ひがあるのか、私には一向分らない。強ひてイズムの名を以て同君の作風を蔽ふと、同君は恐らくリアリストの種類に屬すべきものであらう。

此點に於いて、我文壇に於ける最も鮮かな色彩を帶びたロマンチシストを求めると、何人を措いても、私は先づ佐藤春夫君の名を擧げたい。

本論の劈頭に於いて既に特記して置いたやうに、佐藤君は態々「夢見心地になることの好きな人々の爲めの短篇」と傍註した小品を書いた作家である。實際、現在の我文壇にあつて氏のやうに夢見心地を好み、氏のやうに空想を愛し、且つ、氏のやうに幻想を喜ぶ作家はすくなからう。『西班牙犬の家』既に然り。その他『病める薔薇』でも、『李太白』でも、『ある女の幻想』でも、『指紋』でも、『青白い熱情』でも、氏の作品の重なるものの中に在つて、たゞ一篇でも氏の空想的な傾向を現さないものがあらうか。殊に、氏の作品を讀んで見ると、氏は空想と現實との間に何等の限界（勿論主觀的な意味に於いて）をも認めず、常に空想の上に實感を築いて、聊かも現實と抵觸を感じてゐない。その點に於いての氏は、立派にロマンチシストとしての要格を具備してゐると云つていいのである。

かうした佐藤君の傾向を最も具體的に現はした作品は『李太白』である。今日の言葉を借りて私が評すると、支那の大詩人たる李白は、寧ろ象徴派の特質を帶びた詩人であるが、氏によつて取扱はれた彼は、紛れもないロマンチシストとして、其藝術的傾向を、其生涯に依つて象徴的に描き出されてゐる。從つて、謫仙人たる李白が再び天界に歸つて星となるといふ考想は、考想そのものが假令たわいのない神仙譚であるにしても、佐藤君の心持から云ふと現に、慥かに一つの生きた實感であるに相違ない。『病める薔薇』の主人公が經驗した幻想の中には、幻想が實在か、實在が幻想か、二つの間に何の區別も付かないやうな事實が幾度となく描き出されてゐるではないか。『ある女の幻想』のごとき作品に至つては、この事實に對する露骨な表現が、現に讀者の不快を挑發する位である。

"Alles, was Sehnsucht weckt, das eintoenige Treiben des Alltags zu fliehen, ist romantisch". と。作品の中に現れてゐる佐藤君の心持から云つても、此言葉が如何に多くの眞實を示してゐることぞ！　氏の心持は常に何かを求めて喘いでゐる。と云つて、氏もまた時に單調を欲しないではないが、其欲する單調の中にあつてすら、氏は斷えず何かを見出し

て、そこに氏の全生命を埋めようとする。――心ある讀者は、『病める薔薇』を讀んで、其中に描かれてゐる馬追ひの精細なる記述を忘れるものではあるまい。

「藝術家の空想がいかに自然を離れてゐようとも、それが作家の頭の中に生きて動いてゐる力である限り、空想も亦自然界の現象と同じく眞實の一つではないか。」といふ「今日の文壇の或る一部」に對する谷崎君の抗辯は、私も全然同意を表するところである。此意味に於いて、作家としての佐藤君の領域を偶々ロマンチシズムの世界に發見するといふことは、かくいふ私にとつては一つの喜びでこそあれ、決して悲しみでもなければ、また、憾みでもない。要は氏のロマンチシズムが氏の內生に於いて如何に燃燒するか、氏の經驗に依つて如何に眞實化せられるかといふところにあるのである。

五　佐藤君と月光

作家としての佐藤君が繪をかくことは人の知るところであらう。巧拙を外にして、佐藤君

の繪はかなり特異な傾向を持つたものであるが、忠實なる觀客は、あの特異な傾向を持つた繪の中に在つて、猶ほ氏が氏の藝術感を繪畫として表現する場合に、甚しく力の弱いことを發見するに相違ない。一言にして云ふと、佐藤君の繪は痺弱である。何處にか痛痛しいやうな神經と、何處にか疲廢したやうな官能とが渦卷いて、氏の作品の中に怪しい節奏を響かしてゐる。しかし、さらに忠實なる觀客は、其怪しい節奏の中から恐らくは氏の獨特の敏感さと、氏獨特の氣稟とを發見して、氏の繪畫に微かながらも一つの世界を承認するであらう。

私が作家としての佐藤君に對して云はうとするところも、要するに畫家としての佐藤君に就いて云つたところを特に强調しようとするに過ぎない。

『病める薔薇』を見よ。『指紋』を見よ。『青白い熱情』を見よ。どの點から見ても佐藤君の作品が痺弱であることは、何等疑ふべき餘地ない。しかも其痺弱さは一面に於いて神經質を意味し、且つ、一面に於いて官能的であることを意味してゐると同時に、其事實の背後には、氏獨特の敏感と、氏獨特の氣稟とが滲み出てゐる。從つて、佐藤君の作品から與へられる印象は必ずしも强いものではないが、多くの場合極めて纖細たるを失はない。從つて、多量の

空想と、多量の空想との交錯を蔽ふに「神經衰弱者の妄想」とも呼ばるべき性質の暗鬱なる色調の流れてゐる佐藤君の作品は、讀者たる私にとつて、いつも月の光を思ひ起させる。その色の蒼白い點に於いて、その光の神經的に顫ひ戰く點に於いて、その情趣の靜かなる點に於いて、且つ、その力の痺弱い點に於いて。——

佐藤君が如何に月光を愛するか！　如何に月光の與へる景象と情調とを愛するか！　氏の作品の如何なるものを見ても、殆んど月光に對する描寫を發見しなかつたことはない。作者に依つて天才の名を許されてゐる『指紋』の主人公の如きは、其遺稿に於いて月光に對する讃美と憑溺との心持を書き殘してゐるではないか。彼は云ふ。「一體月といふものは飽くことの出來ないものである。見て居れば見て居るほど反つてよくなる。一度、月をしみじみ味はうた事のある人ならば、誰しも月の戀人になるのは當りまへのことである。」と。佐藤君の作品が讀者たる私にとつていつも月光を思ひ起させると云つたからとて、氏自身にあまり異存があらうとは思はない。

果して然らば、動もすると月光を思ひ起させるやうな佐藤君の作品から、烈日のやうな強

さを求めるのは誤りである。氏の情熱は、氏自身の銘打つごとく「青白い情熱」である。氏の官能は氏自身が暗に告白するやうに「疲れやすい官能」である。從つて、氏の作品には力強い何ものもあるのではない。しかし、力強い何ものもない代りに、氏の作品の秀れたものに至つては、氏獨自の氣稟に彩られた世界を展示して、或程度まで私達を怪しき夢幻の中に誘ひ込むだけの魅惑を持つてゐる。『指紋』を讀んで、謂ゆるオピアム・イーターの疲廢した心理を刻つてゆく作者の筆を見、更に『病める薔薇』を讀んで、その主人公の心が自然の景物に觸れて顫動する微かな波動を捉へてゆく作者の描寫に接すると、何人と雖もかうした私の觀方に贊同するに相違ない。

從つて、製作の動機が充足せず、作者の感興が未だ緊張しない時の佐藤君の作品に至つては、徒らに抽象的な文字の羅列と、徒らに神經質な描寫の連續とに終つて、殆んど通讀するに堪へられないほど退屈なものもないではない。私は此種の失敗した作品として、『歩きながら』と、『青白い熱情』との二篇を擧げたい。『病める薔薇』や、『指紋』や、『李太白』のごとき氏の代表作に至つても、かうした危惧から全然救はれてゐるやうには思へないのである。

六　佐藤君の文章

最後に私は作家としての佐藤君の技巧を一瞥したい。佐藤君は修辭家である。佐藤君は斷えず如何にして美しい文章を書かうかと思つてゐるらしい。氏の作品を讀むと私は何を感するよりも前に、先づ氏の文章に對する苦心を看取する。しかし、氏の文章に對する極端なる彫琢は、氏と同じ傾向を有する過去の作家の多くが屢々經驗したやうに、動もすると、氏をして文章のための文章を書かせるやうな危險に近づかしめてゐる。『李太白』を讀んだ時、私は特に此感じを深うした。

佐藤君の文章が有するリズムは、すくなくとも佐藤君の文章に特有なリズムである。此リズムは讀者の胸に響いて、かなり快い共鳴を呼び起す。氏の作品が多くの場合抒情詩(『病める薔薇』)若しくは叙事詩(『李太白』)たるの觀を以て讀者の眼に映する所以は、もとより其取材の性質に依るのではあるが、亦以て氏の文章が有する氏獨自のリズムに因るところもすく

なくはあるまい。

佐藤君の描寫もまた佐藤君特有のものである。一言にして評すると、氏の描寫は細微にして纖麗である。事物の細微に蝕ひ入つて、一々ピンセツトを以て刳り出すやうな氏の描寫を見ると、作家としての氏が有する强味は全く此點にありとさへ思ふ。『病める薔薇』に於いて描かれた植物や昆蟲の生活が、此作品の持つべき藝術的價値をして如何に大ならしめてゐるかを見、天界の夜の神秘と莊嚴とを寫した『李太白』の末節が、此作品の負ふべき藝術的評價をして如何に重からしめてゐるかを思へ。

あまり長くなり過ぎた此批評の末尾に於いて、私は再び谷崎君の推擧（レコンメンデーション）を思ひ起して見たい。

谷崎君は作家としての佐藤君の天分の豐富なるを褒め、殆んど無條件的に佐藤君が作家としての地位を容認した。

既に述べたところに於いて知られるであらうやうに、大體に於いて私も谷崎君の云ふとこ

ろを認めるに吝かでない。しかし、谷崎君の云ふところにして若し佐藤君の現在を既に完成したものとして認めるの意であるならば、私には聊か異見がある。何となれば、佐藤君の作品が私に與へるところの印象は、其かなり多いところの特徴を以てするに關らず、猶且つ私に對して何となく未完成の感じを與へるからである。佐藤君の作品の或物には態々「未定稿」と斷つたものがあるが、私をして罪なき詭辯を弄させるならば、作家としての佐藤君自身が未だ「未定稿」であるのではあるまいか。悉しい理由を述べ立てる餘裕はない。私はたださう信ずるのだと言つて置く。

『病める薔薇』の主人公は云ふ。——

「薔薇ならば花開かん。」

私の眼に映じた佐藤君は咲くことは咲いたが、未だ半開の域を出でない。今後の氏が果して爛熳と咲き誇るか否かは、一に氏の天分に依つて決するより外はないのである。

社會改良家としてのラスキン

一　聖ジオージ協會

英京倫敦に於いて發刊せられる一小雜誌『フオース・クラヴィゼラ』(Fors Clavigera) の發行者は、千八百七十一年の五月一日、「聖ジオージ協會」(St. George's Guild) の設立と稱する極めて珍奇なる企圖を發表した。

設立の趣意書に據ると、同協會の目的とするところは、「宗教なきところに文明のあらざること、人生の繁榮は地上の勞働に存すること、及び、眞正の幸福は正直と誠實とに依つて生れることを實證するために」「英國一隅」に模範的自治の王國を建設するといふことである。

協會設立の發起人たる該雜誌の發行者は更に言葉を續けて云つた。

『我々は祖國の一小地方に美と、平和と、富とを持來さんことを望む。我々には機關車も要らなければ、鐵道も要らない。……我等は生命の不安を抱いて一時間に四十哩を走るよりも、我等の荷物を運ぶためには、牛馬の背か、我等自身の背か、若しくは舟車の力に手頼れ

ばいい。そこの庭には花と野菜とが實り、田圃には豐かな五穀が稔る。音樂もあれば詩歌もある。……我々は自ら學習した技藝の力によつて、古の希臘人のやうに美しい壺を作るやうに試み、藝術と想像とを向上せしめて、一切の叡智の光が我々を蔽ふやうにしたい。此目的のために我々は若干の土地を購ひ、出來るだけ多くの同志を糾合して、最も典雅な人間を作るための協會を設立しなければならぬ。』

此珍奇なる企圖のために、發起人自身は七萬圓の出資を豫約した。その他は此目的に賛同する地主や、小作人や、勞働者等の應分の出資に待つといふのである。

間もなく此協會は設立された。地主の中にも賛同者があつた。多數の小作人や勞働者も參加した。世の慈善家と呼ばれるものの中にあつても、土地や金錢の寄附に依つて熱心に此事業を助けるものもすくなくなかつた。

協會の本據は、西部ヨーク洲の南境、シエツフイールド市の附近に選定された。發起人自身が協會の主長（マスター）となつたのは云ふまでもない。發起人の弟子ヘンリー・スワンといふ男は協會の主事として此事業の實際的經營に從ひ、土地や金錢の寄附者は會友（コンパニオン）として會務を翼賛

し、小作人や勞働者等は保持者（リテーナー）として協會の事業に從事した。かくて主要なる人物等は相集まつて一つの政府を組織し、そこに於いて協會や金錢の政務を掌り、協會員の製作に係る製作品の檢査を行ひ、これが價格を定め、さらに粗製濫造の品があれば容赦なく破棄することにした。――會員は各自の服裝の上に種別の記章を附けて一見協會員たることを示す方便とし、十歲以上のものには飮酒することが許された。

協會に加入するためには、次ぎに揭げるやうな八個條の敎義に署名しなければならなかつた。

一、予は天地の創造者、可見不可見の一切の物の創造者たる生ける全能の神を信ず。予は神の法の仁慈なると、神の事業の善良なるとを信ず。故に予は生くる限り神を愛し、神の法に遵ひ、神の事業を見るべし。

二、予は人性の崇高なること、能力の偉大なること、慈悲心に富めること、及び愛の悅樂に滿つることを信ず、故に予は予自らの如く隣人を愛し、其の能はざる時に於いても猶能ふが如く努むべし。

三、予は日日の糧をえんがために、神より與へられたる能力と機會とを以て働くべし。予がなさんと欲することは、予の全力を以て成すべし。

四、予は自己の利益と快樂とのために人に欺かれ、又人を欺き、又は人に傷けられ、又人を傷け、又は人に盜まれ、又人のものを盜むが如き原因を作らざるべし。

五、予は無益なる殺生をなさず。美しきものを破壞せず。すべて溫き心を以て生物に對し、すべて地上の自然美を保護すべし。

六、他人との競爭のためにあらずして、他人を援け、他人を愉快ならしめ、他人の名譽を擧げ、同時に、予自身の悅樂と平和とをえんがために、予は予の靈肉を義務と幸福との最高位にまで高めんことを期す。

七、神の法則と一致する限りに於いて、予は國法及び王命に服すべし。然らざる時は反抗すれども、之れをなすには熟慮を以てし、決して惡意陰險なる手段に出ることなし。

八、予は此協會に屬する限り、前者と全く同一の意味に於いて協會長の命令に服すべし。

當時、「聖ジョージ協會」の組織には主なる三つの目的があつた。その第一は新鮮な空氣と

清洌な水と、肥沃な土地とを保證された農業の實現である。その第二は「蒸汽力や機械力の恩惠を蒙らずして天賦の腕を以てする」手工、彫刻、紡績、リンネンの手製などのやうな家内工業の奬勵である。而して最も重要な第三の目的は、理想的な圖書館、學校、博物館などの完備する美的敎育の完成といふことであつた。

驚くべき理想家の頭に依つて計畫された此事業は、今日では最早過去の歷史的事實となつた。しかし、此驚くべき理想家の傳記者に依つて「彼が親から讓られた莫大の財産は、殆んど此事業のために浪費された。」と云はしめた此歷史的事實は、今日に於いても猶ほシエツフイールド市の管理の下に保存されてゐる當時の博物館とともに、恰も永久に絕えない理想家の夢を掻亂さうとするかのやうに、我々の記憶の中に澄淸として生き殘つてゐるのである。

二　ラスキンとトルストイ

卓越した藝術批評家としてのジョン・ラスキンをのみ知るものにとつては、特に、十九世紀が産出した最大の自然註釋者、最大の美の觀念の創造者としての彼をのみ知るものにとつては、晩年に於ける彼が純然たる社會改良家として現はれたといふことは、慥かに一つの唐突に値するに相違ない。——此意味に於いて、ラスキンの生涯は、トルストイの生涯が我々におけると全く等しい謎をかけるものである。

しかし、トルストイの場合にあつては、新らしい生活は、古い生活の否定に依つて生れる更新であるかのやうに思はれた。すくなくとも彼自身はさうであると主張した。彼が勇敢に彼自身の前半生を否定し、前半生の殆んどすべてを支配する藝術を棄てて顧みなかつたといふことは、全くかうした心持から起つたことに相違ない。ラスキンの場合にあつては違ふ。彼の新らしい生活は、古い生活の否定に依つて生れるものではなくて、單に古い生活の發展に依つて築き上げられたものに過ぎなかつた。從つて、彼の場合には、決して藝術の放棄はなかつた。否、單に藝術の放棄がなかつたばかりではない。彼は藝術を生活に密接せしめて、そこに美と自然とに依つて醇化された眞の生命を見出さうとした。

トルストイがコーカサスの山間、テリーク河畔の森の中で遭遇した懐疑の裡には、すでに蔽ふべからざる人間への反逆があつた。彼はあらゆる人間の努力を否定して、人間を鳥獣の領域に赴かしめることが唯一の幸福であるとさへ考へた。從つて、彼の自然に同化しようとする熱望は、いはゞ神の復讐を恐怖するものの遁逃を意味するものに外ならなかつた。

彼は云ふ。——

『自分は唯鳥獣と等しい幸福を受ければいい。然るに自分が今まで何か異常な幸福でもえられるかのやうに考へてゐたといふことは、何といふ愚かなことであらう。』

しかし、私は幼年の頃ローヂヤースの『伊太利』に依つて孵まれた夢を後年に於いて現實にしたラスキンが、眼前に「曙のアルプス」を仰ぎ、眼前に「ヴェニスの石」を凝視した時、果して何を考へたかといふことを忘れるわけにはゆかない。

「少年の心に動いた神の觀念は、唯一の最も遍在的なるものなるが故に、我々の信じ得る唯一のものである。」

「ヴェニスのゴシツク建築を見よ。そこには家庭の純潔なる信仰と、國民の崇高なる道義

とが潜んでゐるではないか。」

少年の心に動いた神の觀念を主張し、人間の信仰と道義との力を信じ得るものが「人間の恥辱と後悔と」をのみ説くものにとつて、何といふ甚しい反襯を形作ることぞ！トルストイとラスキンとの間に横はる一つの大きな溝渠は、全く此點に存するものと云つてもいい。

トルストイが古來の思想家に依つて與へられたあらゆる美の觀念を否認して、美に關する客觀的定義は絶えて存することなしと云ひ、從つて、眞の藝術の意義は單に正邪善惡といふ道義的觀念に關聯するところにのみ存在すると云つた時に、ラスキンは最も大膽に美に依つて統御せられる精神生活の價値を説き、藝術に依つて高められざる心には、決して眞の愛の生れないことを主張した。從つて、彼のいはゆる「神の法則」は、藝術と想像とを向上せしめて、「一切の叡智の光が我々を蔽ふ」ところに存在するのであつて、あらゆる美と眞との母胎を破却したところにあるのではない。云ふまでもなく、此心から初めてかの「聖ジオージ協會」の使命を高調する第五の教義が生れたのである。

ある批評家は、トルストイを以て追放者であると云つた。彼が憤怒と絶望とを以てけたた

ましく天國の門を亂打した時に、ラスキンは何といふ快活と微笑とを以て樂園の扉を開いたことであらう。前者の苦悶に充ちた顏を見よ。そこには迷へるものを救濟すべき何等かの光明があるか。何等かの安泰があるか。地上に存在する總ての罪と不幸との根源を芟り除つて、あらゆる生靈を神の光の中に包まうとする說教者としての彼の態度の裡には、我々の愛を喚び起すべき何等かの魅力があるか。——玆に至ると、私の心は自ら後者の靜かな、晴やかな平和に充ちた心持に惹き付けられなければ熄まない。

道を說くものとして現れたラスキンも、時には罵聲叱咤したことはあつた。しかし、如何なる場合と雖も、彼は決して怒らなかつた。彼の「愛の宗教」は鞭韃に依つて說かれるべく餘りに美くし過ぎた。從つて、我々の前に立つた彼は、いつも秋霜烈日の審判者としてではなく、我々を高き美の敎化にまで導くべき指導者としてであつた。彼は敎師であつた。彼は豫言者ではなかつた。彼は先づ建設を志した。彼は決して破壞を急がうとはしなかつた。恐らくは彼が四回の失戀の主因であつたらうと思はれる彼の風貌を見よ。彼と同時代の或雜誌のいはゆる「……力と品位とに於いて幾分缺けるところのあるやうな鷲狀の鼻や、廣い額の

ためにかくれた眼」が如何に温い和やかな心を藏してゐるかを見よ。

偶然の暗示とでもいふのであらう。永い間の藝術的陶醉の後に訪れたトルストイとラスキンとの心の覺醒は、共に彼等が老境に入らうとする時代の初めに於いて起つた。しかし、その前半生に於いて、兩者の間に著しい相違のあつたことを見逃してならない。斷えず前途の嵐を豫想させ、斷えず現在の安靜を脅かさうとする前者の藝術に包まれた不安が、後者の場合にあつては、常に靜かな海のやうな博大と平和とに充たされてゐたではないか。

かういふ運命の上の對蹠者としての地位は、終に最後まで此二人の巨人の境遇を支配したらしい。トルストイが老年の閑居に安んずることが出來なくて、わざ〳〵家をさまよひ出て慘ましい曠野の死を遂げたのに對して、ラスキンのコニンストン湖畔に於ける晩年の幽棲は、如何にも意味深い對照をなしてゐるではないか。小つぼけな田舍驛の驛長官舍で『世の中の多くの不幸者』を心にかけながら死んだ前者の死が我々の胸を打つからと云つて、我々は窓を隔てて美しい自然と隣した多くの名畫に飾られた古風な部屋で、最後の一言をも發する事なく、極めて靜かな息を引き取つた後者の幸福な死に無關心であるといふわけにはゆかない。

同じく八十年にあまる巨人の意味深い生涯である。單にその最後を結ぶ一幕の場面に依つて、直ちに全劇の價値を決定することの出來ないのは云ふまでもない。

三　ラスキンの經濟思想

社會改良家としてのラスキンの事業は、千八百五十四年に於ける職工學校の設立に始まる。此の學校は彼が教育を受けることの出來ない勞働者に高尚な教育を與へるために企てたものであつて、當時の名流ラボツク、ヒユース、モーリスなどの援助の下に成功したものである。彼は更にロセチや、ハントや、バーン・ジョーンスなどとともに繪畫の教育に從事して、世間に普ねく美的教化を布かうとした。彼の言論は、彼の實行に遲れて現はれたのである。

千八百六十年、彼の高名なる友人サツカレーの編輯する雜誌『コルンヒル』(Cornhill Magazine)誌上に、彼は始めて社會問題に關する四篇の論文を發表した。此論文の最初の三篇は痛く世人の反擊を蒙つた。そのために編輯者たるサツカレーは、第

四篇の揭載とともに續稿を謝絕するの止むなきに至つた。ラスキンは更に友人フロードの經營する雜誌『フレーザー』誌上に『經濟學』と題する彼獨特の經濟論を發表し、當時英國を風靡してゐたリカルドや、後に至つて、マルサスの自由主義の經濟說に對して痛棒を與へた。これらの論文は二冊の小冊子に纏められて再び世に布かれた。一を『此最終の者に』(Unto this Last) と云ひ、一を『ムネラ・プルヴェリス』(Munera Pulveris) と名付けてゐる。

『此最終の者に』の序文に就いて、彼が「これらの論文は發表の當時大部分の讀者から非常な批難を蒙つたものである。」と告白したやうに、上述の二書に依つて、彼は彼の「富」と「價値」とに對する思想が、明かに當時の英國人の大多數の思想と全く背馳するものであることを實證した。

彼は云ふ。——

「價値があるといふことは、人生を利するといふことである。眞に價値あるといふこと、或は利するものといふことは、その全力を以て人生に貢獻するものである。」

「不健全な慾望の偶發的對象たらずして、正しい慾望の恒常的對象たるものゝみが富であ

る。」

彼は人生に貢獻するといふことを以て、人生の道德的發展に貢獻することといふ意味に解し、正しい慾望の恒常的對象といふことを以て、人生の道德的發展に資する恒常的對象といふことの意味に解した。從つて、彼にあつては人間の道德的完成を離れて「價値」もなければ「富」もない。ミルが敎へたやうに、人生の生活に役立つ幾多の財が蓄積せられようと、彼にとつては毫も富の蓄積を意味しない。彼が「所有」の觀念を冷笑して好謔を弄し、「近頃カリホルニアの船が沈沒した時、一船客が二百磅の金を持つて海底に沒したとすれば、彼の沒した時、彼は金を所有してゐたか、それとも亦金が彼を所有してゐたか。」と喝破したのは全くかうした意味に基いてゐるのである。

殆んど經濟學に對する何等の素養もないラスキンの大膽不敵なる抗辯は、前にも云つたやうに世間の大反擊を招いたが、多人數の中には遒がに彼の見識に服するものもあつた。中にも彼の「友にして指導者」（此言葉は『ムネラ・プルヴエリス』の献本の辭に於いて、彼自身が使用したものである。）たるトマス・カーライルの熱心なる賞讃は、十分彼を欣ばしたに相

違ない。

ある意味に於いて、ラスキンは慥かにカーライルの忠實なる弟子であつた。殊に、ラスキンが勞働を尊重すること、貧民を愛することは、全くカーライルの精神から受け繼いだ財産でなくて何であらう。正統派の經濟學說を痛罵して闇黑の科學であると喝破したカーライルの情熱は、沸々としてラスキンの主張の中に流れてゐるではないか。

自家の言說の發表に就いて幾多の蹉跌を經驗した彼は、千八百七十一年一月一日、ジョージ・アレンを發行者として一小雜誌『フオース・クラヴィゼラ』を創刊した。これは彼が一職工に與へる書簡の形式を擬して編輯したもので、一部の賣價は僅かに七片（ペンス）に過ぎなかつた。自費を以て發刊された此雜誌は、初めから何の廣告らしいこともしなかつたが、かなりの賣行を示した。かくて實に十三年の長い間續刊された此雜誌は、號を累ねること殆んど百に垂んとした。

玆に於いて彼は何の心置きもなく英國の勞働者に對して、道德や、宗敎や、藝術に就いての忌憚なき意見を發表した。內容は隨分人を動かすところがあつたらしい。彼の傳記者に據る

と、此雜誌の或書簡を讀んだカーライルは筆者に書を與へて、『恰度今私が讀み終つたところの此雜誌の書簡第五は、たとへがたいものである。私にとつては神にも比すべき慰籍で、私の兩眼に涙を催ふさしめるものである！』とさへ云つたさうである。いはゆる「聖ジオージ協會」の設立は、此雜誌の創刊から間もなく發表された計畫であつた。

此意味に於いて、同協會の設立は、社會改良家としてのラスキンの思想的總決算を示すものであり、兼ねて彼の公的生活に於ける最高潮を意味するものであると云つていい。

四　ラスキンと現代

玆に於いて、我々は最後の一つの疑問に逢着する。それは外ではない。ラスキンは現代に對して果して如何なる意義を持つてゐるかといふことである。

既に述べたやうに、社會改良家としてのラスキンの思想的結晶とも見るべきものは、「聖ジオージ協會」が標榜する八箇條の教義に存してゐる。我々が此八箇條の教義を仔細に檢覈す

るといふことは、取りも直さず、ラスキンの現代に對する意義を闡明することであるに相違ない。

第一と第二との教義に於いて、私は先づ純然たる基督教的道徳の宣傳を發見することが出來る。しかも其基督教的道徳は、人性に對する多大の信頼と、生活を肯定する強烈な意志とから出發するものである。その本領が極めて鮮かな樂天主義の中にあることは云ふまでもない。此意味に於いて、第四に於ける實踐上の道徳觀念は、一方に於いては基督教道徳の敷衍であり、一方に於いては共同生活を支配する社會的道徳の軌範と見ることが出來やう、從つて、かうした意味に於ける社會的道義の發展があらゆる自由競爭を否定して、さらに第六に於ける相互扶助の思想を生むといふことは、極めて自然なことと云つていい。

第三の教義に就いて發見するものは勞働主義の宣言である。しかし、茲に於いて發見する勞働主義は、いささかも經濟上の教説と關聯しない點に於いて、いはゆる資本に對立すべき何等の意味をも持たない。第五の教義は明かに美的教化の主張と見るべきものである。「殺すなかれ。」といふ道徳律も、此場合にあつては全く美の保存を意味するものに外ならないから

である。

第七の教義に於いては、人爲法に對する自然法（人の掟に對する神の掟）の優先を明言するとともに、すべての強力に依る反抗の否認が明かにせられてゐる。第八の教義は單なる宣誓である。更めて語を加へる必要はあるまい。

以上の教義を總括することに依つて、私はラスキンの社會改良が、全く宗教と、勞働と、藝術との程よき調和の上に築かれようとすることを發見する。如何なる意味に於いても、彼は勞働を以て經濟上の敎說に從屬せしめなかつた。彼の解する人間の幸福は唯だ個人の內面生活の向上を意味するに過ぎなかつた。從つて、彼は人性の道德的發展を外にしては、此世に何等の改善もないと信じた。

彼の主張する美的敎化は、取りも直さず、人間性の道德的發展を醇化せしめる所以に外ならなかつた。彼の夢想する地上の天國は、資本の虎と勞働の蛇とが烈しく嚙み合ふ荒涼たる沙漠ではなかつた。彼は美に對する敎化なき所には何等の幸福もないと信じた。「古の希臘人のやうに美しい壺を作る。」ことは、彼にあつては至上の道德的發展を意味するものであつた。

彼は云ふ。――

『最も善良なる教育は、到底利益を生むものではない。何れの國民にしても、未だ嘗て偉大なる藝術や、偉大なる知力によつて麵麭をえたものはない。』

如上の意味に於いて、彼は革命に依る改善を夢想だにしなかつた。彼にとつて、革命は單に非常な道徳的墮落を意味するばかりでなく、同時に怖ろしき美の破壞を意味するものであつた。

要するに、ラスキンが現代に對して教へるところは、一にも精神、二にも精神に依る救濟である。彼は烈しく正統派の富の觀念を否定し、あくまで價値の道徳的意義を高調した。而し、彼は財を富者の手から奪うて、直ちに貧者の手に與へようとはしなかつた。彼は「所有」の觀念を以て正しいものと考へなかつた。從つて、彼にとつては單に「所有」を移轉するといふことが、眼前の社會を改良すべき唯一の手段だとは思はれなかつたに相違ない。

すべての精神的根據に立たない思想は、それが如何に時代に適切であらうと、結局は亡ぶべき運命を持つてゐる。從つて、救濟は單に物質に依つてのみなさるべきものではない。物

質に依つてのみなされた救濟は、間もなく精神の飢渇に依つて失はれるに相違ないからである。

徒らに物質の偏重せられる時代よ。汝はラスキンに依つて果して何を聞かうとするのであるか。

○

古代の模倣は現代の模倣よりも望むべきことである。

○

人生に於いては美は滅びるが、藝術にあつては美は滅びない。

○

感覺は地上のものであるが、理性は感覺から離れて瞑想の中に在る。

○

涙は心から來るものである。決して頭からは來ない。

○

眼は何故に眼覺めた後に想像するよりも、はつきりと、夢の中に於て事物を見ることが出來るのであらうか。

——「ダ・ビンチの言葉」より

國木田獨歩一人、作品

一　私と獨歩

……

眦を決して天外をのぞめば、
をち方の高峰の雲の朝日影。
「嗚呼山林に自由存す」
われ此句を吟じて血のわくを覺ゆ。

懐かしきかな、わが故郷は何處ぞや、
彼處にわれは山林の兒なりき。
顧みれば千里江山、
自由の郷は雲底に沒せんとす。

國木田獨歩一人、作品

私は今でも時々此詩を思ひ出す。此詩を思ひ出すとゝもに、夢中になつて此詩を愛誦した時代のことを思ひ出す。――すべては遠き昔である。私の筆は遠き昔の回想から初められなければならない。

私が初めて國木田獨歩の作品に接したのは、もう十二三年も以前の事であつた。その頃私は中國のとある山間の中學に在學してゐた。中學の所在地は、五萬石の舊城下で、四方は高い山に圍まれ、中央には一條の溪流が流れてゐた。中學は町の北境に聳える城山の麓にあつた。山上には當時も猶ほ朽廢した古城の天主や、隋礎や、樓門や、櫓などの類が、慘めな殘骸を横へて、思ふがまゝに繁つた蔦蔓や、雜草の中に埋れてゐた。そして廢墟の周りには、松や、檜や、樅のやうな喬木が空の碧を遮ぎつて聳え、かつて斧鉞を入れたことのない處女林のやうな俤を殘してゐた。

私の甘い追想が過去の幻影を趁うて走る時、私のフオイランチンヌの夢はいつも此山に飛んで行く。青い木の葉、美しい草花、降りそゝぐ日の光、鳥の聲、雲の色、古城の影、――私は私の少年生活を彩るべき自然の恩寵に於いて、決して『流謫前』の著者を羨むべきでは

なかつた。

忘れもしない。私が初めて『抒情詩』に依つて獨歩の詩を讀んだのは此古城のほとりであつた。恐らくは夏の初め頃であつたと思ふ。空の鮮かに晴れ渡つた日曜日の或る朝、獨り寄宿舍を拔け出した私は、此山に登つて、快き半日を馬場趾の草場に過した。その時私は初めて獨歩の詩を讀んで、如何に有頂天な感激に囚れたことであらう。中にも『山林に自由存す』や、『獨座』などの諸篇は、幾度讀み返し、幾幾默誦したか分らない。

夜ふけて燈前獨り坐す、
哀思悠々堪ふべからず、
眼底涙あり、落つるに任す、
天外雲あり、われを招く。

今讀んで見ると、「夜半燈前十年事。一時和雨到心頭。」と云つた樣な全然漢詩のコンヴェンションを脫しない咏嘆に過ぎないものが、何故にかうまで私の心を捕へたものか、甚だ不思議だといふ外はない。而し、當時に於ける私の心持の中には、たしかに此種の詩境と相響鳴

して、その粗鬆なリズムの裡に、全く少年の感激を捧げる様な何物かゞあつたに相違ない。

一度彼に捕へられた私は、容易に彼の魅力から逃れることが出來なかつた。やがて『武藏野』を讀んだ。『運命』を讀んだ。『獨歩集』を讀んだ。『獨歩集』を讀んで、『牛肉と馬鈴薯』や、『少年の悲哀』や、『女難』や、『第三者』などを耽讀するに及んで、私の彼に對する傾倒は極度に達した。

實際、私は幾度赤表紙の素朴な小冊子を携へて城山に登つたか分らない。それは爽かな微風が快よく樹々の青葉を渡る初夏の朝もあつた。またそれは夕づく日が淋しく廢墟を輝らす晩秋の日の午後もあつた。いつも私は時の移るのを忘れて彼の書物に讀み入つた。彼は私に對して自然を如何に見るべきかを敎へた。また、彼は私に對して運命と、運命に役せられる人生の淋しさとを敎へた。彼の作物の中に漲つてゐる情熱や、煩悶や、懷疑やは、人生に對して盲目的な感傷に陷りやすい當年の私を刺戟して、私の內的生活の色合や調子の上にまで著しい影響を及ぼした。

今にして考へると、私が全く彼の魅力から救はれたのは最早六七年前のことである。しか

し、今日の私と雖も、その思想か、氣分か、趣味か、性癖かの上には、必ずや何等かの意味に於ける彼の影響が生き殘つてゐるに相違ないと思つてゐる。

明治四十一年の初夏、私は五日ばかりを瀬戸內海のある村で暮した。北に防風林のやうな小さい小松林を背負ひ、南に單調な砂丘の幾條りを隔てゝ青い海を控へた淋しい漁村であつた。そこの友人の家で、私は偶々獨歩の死を報じた新聞紙を手にした。何事にも直ぐ涙を誘はれ易い當時の私は、ぢつと黑框の中に閉ぢ込められてゐる彼の顏を凝視してゐると、自ら胸を壓して籠み上げて來る大きな塊を感じた。私は唯獨り海岸の方に出て行つた。空はよく霽れてゐた。よく霽れた空の下には穩かな海の波頭が白く光つてゐた。私は默然として砂丘の上に腰を卸した。グルな波の音以外には、四邊の靜けさを破る何物もなかつた。

私の頭の中は愛する作家の死に依つて一杯になつてゐた。私は何時までも彼と、彼の生涯とに就いて考へた。

卒直に云ふと、彼の死に依つて、私は私自身のアドレッセンスが永久に去つたやうな淋しさを感じたのである。

二　果して自然主義者か

獨歩の得意時代は極めて短かゝつた。しかも彼の特徴は短篇作家たるにあつた。彼の遺作として今日に殘るものが非常にすくないといふことは、必ずしも不可思議な事實ではない。

今日までの定評に徴すると、彼はいはゆる自然主義の作家であつたといふことになつてゐる。彼が自然主義前期の文壇を支配した作風に飽き足らず、獨り文壇の一隅に蟄居して、彼獨特の藝術的領域を截り拓いたといふ事實は認めないわけにゆかない。しかし、彼の作風そのものは果して自然主義であつたらうか。この點に對して、私はいさゝか疑ひを抱いてゐるものである。

正岡子規と等しく、彼は非常な紅葉嫌ひであつたさうである。紅葉のことゝなると、何事に限らず、頭から罵倒して懸つたさうである。彼の藝術的信條から云ふと、彼の藝術的氣稟から云ふと、彼と紅葉との間には、慥かに相距ること參商のごときものがあつたに相違ない。

彼の擯けるところは戯作者氣質であつた。彼の輕蔑するところは遊戯分子であつた。中に何のスピリットも動いてゐない、白粉と胡粉とで塗り塗した娼婦のやうな藝術は、到底彼の堪へうるところではなかつた。しかし、これだけの事實を以て、直ちに彼を自然主義者であると決めて懸ることの如何に不合理であるかは、更めて云ふまでもあるまい。

彼は慥かに趣味の眼を以て世相を見る作家ではなかつた。色相の世界に執して、いはゆる人情の機微を描く作家でもなかつた。彼には自然と人生とに對する誠實なる觀照と、眞摯なる理解とがあつた。彼は運命の悲哀を自己の體驗に於いて見出した。彼の藝術は徹頭徹尾實感の上に築かれてゐた。しかし、この事實を以てしても、猶ほ且つ私は彼をいはゆる自然主義者の中に數へこむことの不安と不滿足とを感じないわけにゆかない。

人生や藝術に對する自然主義のセオリー、それを私は玆に絮說してゐる餘裕はない。たゞ率直に私自身の觀るところを云ふと、彼の人生に對する根本的態度の上には、いはゆる自然科學者の無私念があつたとは思はれない。與へられた事象に對して、これを純粹の客觀の裡に包攝しうるだけの冷靜があつたとも思はれない。彼の作品を見よ。彼の主觀が如何に無遠

慮な差出口をしてゐるか。彼の精神の上に泡立つた彼の情感が、如何に横暴な干渉振りを發揮してゐるか。德田秋聲氏が自然主義者であり、正宗白鳥氏が自然主義者（實際、此二人の作家は、自然主義のセオリーが生みえた最も典型的のものである。）であると同じ意味に於いて、彼の何處に果して自然主義者としての徵證がありうるか！

然らば何故に當時の文壇は彼を呼んで自然主義者だと云つたのであらう。何分永井荷風氏に對してすら自然主義者の烙印を捺して憚らなかつた當時の文壇であるからと云つて終へばそれまでゞはあるが、私には聊か合理的な解釋が見出されないでもない。

何人でも直ぐ心付くであらうやうに、多くの場合彼の作品は自己曝露——と云つて惡ければ自己告白と更めてもいゝ。——の形式を執つてゐた。加ふるに彼の描寫は簡潔で、素朴で且つ、露骨であつた。この種の特徵は、彼の作品をして、勢ひリアリスチックな強味を增さしめた。『酒中日記』や、『號外』や、『運命論者』や、『窮死』や、『正直者』などの諸作に於いては、特にさうした傾向が著しく現はれてゐる。此事實に瞠目した當時の文壇は、リアリズムとナチユラリズムとに對する正當な分離をするだけの能力を持つてゐなかつた當時の文壇は、

早急にも彼の作品を以て直ちに自然主義の範疇に屬するものと認めて疑はなかつたものらしい。いつ如何なる時代に在つても、常に此種の錯誤は行はれるのであるが、いはゆる自然主義の專權時代に於いては、それが特に甚しくはなかつたのであらうか。

玆に於いて、私自身の勝手な斷案を下すと、彼はロマンチシズムとリアリズムとの褒合に依つて生れた雜種兒であるといふの外はない。若し、彼が當時の自然主義に對して何等かの內的關係を持つてゐたとすると、それは彼が情緒に就かずして知意に就き、空想に泥まずして事實に走り、作爲に赴かずして實感に赴いた點にあると思ふ。

この點に於いて、若し、彼を自然主義の先驅者であると云はうとするものがあれば、それは私の敢て異議を挾まうとする處でない。

三　彼の作品

『獨歩全集』上下兩卷、包藏するところ果して幾十篇であるかは知らないが、その多くは短

くて數頁、長くも五十頁を出でない短篇ばかりである。純粹に短篇作家として大をなしたものは、わが文壇彼を除く以外には、唯だ一人の樋口一葉を見出すばかりである。

彼の作品中にあつて特に注目すべきものは、彼の無名時代に書かれたものが多い。中にも『獨歩集』に收められてゐる諸篇のごときは、彼の特色を最も著しく漲らしてゐるものばかりであるが、その製作時期は、殆んど三十五、六年前後に屬してゐる。私から云ふと、彼の最終期に屬する作品、『竹の木戸』や、『二老人』や、『沙漠の雨』などは、自然主義の惡影響(?)を受けたもので、むしろ彼の製作に於けるデケデンスを意味するものだと思うてゐる。

彼の作品が最初に世間の視聽を峙たしめた動機は、其特色ある自然描寫にあつたらしい。彼が『武藏野』に於いて描いた佐伯附近や武藏野の風物、『空知川の岸邊』に於いて描いた荒寥たる北海道の自然、——さうしたものは、必ずや當年の讀書子をして扑舞せしめるところがあつたに相違ない。

野を散歩す。日暖かにして小春の季節なり。櫨紅葉は半ば散りて半ば枝に殘りたる、風吹くごとに閃き飛ぶ。海近き河口に至る。潮退て洲あらはれ、鳥の群飛廻る。水門を下

す童子あり。灘村に舟を渡さんと舷に腰かけて潮の來るを待つらん若者あり。背低き檀堤の上に樹ちて、濱風に吹かれ、紅の葉毎に光を放つ。野末杳に百舌鳥のあわただしく鳴くが聞ゆ。

これは明治二十六年の十一月三日、即ち、彼が佐伯時代に於ける日記の一節を抄錄したものであるが、この不器用な描寫の中にも、猶ほ且つ十分彼が後年に於ける、圓熟した自然描寫の俤を偲ぶことは出來よう。殊に、彼が『武藏野』の中に描いた武相平原の光景、——遠くに見える山々の蜒り、波濤のやうに起伏する丘陵、名も知らぬ祠を祀つた雜木林、大都會の場末に於ける淋しいなりはひ、落葉を叩いて降る時雨、風の音、日の光などに對する敏感な綿密な描寫は、今日ツルゲエネフや、トルストイなどの描寫を見た眼には兎に角、當年に於ける幼稚な讀書子の眼に對しては、慥かにフレッシュな印象を與へたはずである。しかも彼は唯だ丹念に自然を寫す寫眞師たるに留まらずして、自然の中に靈感を見出しうる詩人であつた。この事實は、彼の作品をして一層光輝あらしめる所以であつたと思ふ。

全體の傾向から云ふと、彼の作品の多くは一つの問題を捕へてゐた。例へば『正直者』の

中に描かれた本能力、『牛肉と馬鈴薯』の中に描かれた理想と現實との背馳、『夫婦』の中に描かれた戀愛と夫婦關係との矛盾、『運命論者』の中に描かれた人生と運命との關係、『惡魔』の中に描かれた信仰上の苦悶と云つたやうな風である。幾分粗慥の嫌ひはあるが、幾分いい加減の嫌ひはあるが、當時の自然主義者などが捕へた問題に比較すると、彼の捕へた問題は慥かに深いところもあつたし、また慥かにインテレクチュアルな強味もあつた。殊に、さうした問題を取扱ふ態度に於いて、彼と自然主義者との間に存する非常な相違は、彼は單に問題の提出者たるに留まらずして、同時に、問題の解決者たらうともした點である。此點に於いて、彼は自然主義者のいはゆる『無解決なる人生』などといふことを信じない種類の人間であつたらしい。

私個人の趣味から云ふと、彼の書いた問題中心の作品の中にあつて、最も私の心を惹くものは『牛肉と馬鈴薯』といふよりも、むしろ『夫婦』と題する短篇である。この短篇に於いて、彼の取扱つた問題は、彼の人生に對する觀照の鋭さを示してゐるとともに、彼の人生に對する見方の偏狹ならざるを示してゐる。この作品に比較すると、前者はあまりに無效果な

辯證に走り過ぎ、且つ、あまりに作爲に過ぎた描想を弄んでゐる。『第三者』と題する作もいい。あの作には人生の最もシリアスな問題に覿面して、極めて深い洞察を示したところがある。

彼の作品の中には、私が私だけで、「少年物」と呼んでゐる四五の作がある。『少年の悲しみ』、『馬上の友』、『春の鳥』、『女難』、『畫の悲しみ』などがそれである。これらの作品は。さして一般の注意を惹かないやうではあるが、私から云ふと、慥かに彼の全作中に於いてかなり高い位地を占むべきものであると思ふ。彼は少年の悲哀と、憧憬と、夢とを描く點に於いて、特殊の天分を持つてゐたらしい。『少年の悲しみ』にしても、『女難』の前半にしても、『馬上の友』にしても、あれを讀んでゐると、私自身はいつか淡い、夢のやうな甘さを持つたリリックの世界に包まれて、いつともなしに滲み出る涙を經驗しなかつたことはない。殊に、『女難』の前半がいい。私は幾度城山の馬場跡の草場に仰臥して、あの融け入るやうな悲哀と、情趣との世界に身を委ねたことがあるか分らない。

技巧家としての彼は坦夷明白である。描寫はきはめて簡潔で、且つ、素朴である。文章も

キビ〳〵してゐる。對話にも無駄がない。しかも、一言か一句かにして、よく全景の印象を髣髴しうる不可思議の才能を備へてゐた。しかし、作品全體から云ふと、彼の作品のことごとくが、必ずしも完成したものではなかつた。何處にか、纏まりのつかない未熟なところがあつた。それが反つて、作品に一種のフレッシュネスを與へるやうな場合もないではなかつたが、多くの場合は、矢張藝術品としての渾然さを害してゐた。この點から見ると、『巡査』と題する作の如きは、彼の作品中にあつて稀れに見る佳作であるといつていい。非常に評判のいい『酒中日記』のごときは、破綻百出、殆んど拾收すべからざる底のものである。

四　彼の生涯

余は遂に文學者たるべき運命なるが如し。余は此狹き日本に生れたり。されど余は此日本を極愛するなり。此日本人を極愛するなり。余は日本人の文學者たるべし。

余が文學者の理想は極めて高しと雖も、願ふ處は此高き理想を追ふに驀榮の念を以てせ

ざらんことを。農夫が農を爲すの念を以て從事せんことを。決して百代の師、千古の豫言者てふ如きことに由りて自負せざらんことを。余は此天職の極めて高貴なる所以を知る。されど若し一點だも虛榮の念を以て此高貴を追ふが如き時は、一農民の忠實に其土を耕す方、千倍萬倍高貴なることを記憶せざるべからず。

——（獨步遺文）——

驕傲と謙虛との愛すべき混淆。——

多くの卓越した先蹤が皆さうであつたやうに、獨步は最も謙虛であらうとする心を、最も驕傲なる精神に包んでゐた。彼は常に此二つのものの破綻を示してゐた。しかし、彼の自然に順なる性情は、彼の欲求に甘へて彼の本性を冒すことを許さなかつた。彼には素直な隨順があつた。此素直な隨順に依つて、彼は斷えず自己を培ふことを忘れなかつた。

彼は常に自己の天職を說いた。自己の天職に對する正しい自覺は、彼をして「選ばれたる人間」たらしめた。そこには避けがたい矜持があつた。矜持を陋とする自卑があつた。此自卑と矜持との間を彷徨して、彼は斷えずアムビシアスな幻を描いた。

余にして基督を信じえば一地方の山民を相手にして、直ちに救靈の事業に着手すべし。これに比する時は、其他の事業は殆んど數ふるに足らざる也。

――（獨歩遺文）――

彼は學窓から教會に走つた。教會から戀愛に走つた。戀愛から山林に走つた。山林から藝術に走つた。藝術から――やつと踏み止まつた。彼は、玆で始めて自分の居るべきところを發見した。遁逃から遁逃を以てした彼の生涯は、モチーヴから云ふと、一つの薄志弱行を物語るものかも知れないが、結果から見ると、むしろ可能性への盲進、――理想の追及を意味するものに外ならなかつた。私と雖も牛肉より馬鈴薯を選んだ彼が再び牛肉に歸つた點に於いて、明かにアイデイアリストとしての彼が滅んだことは認める。しかし、彼の棄てたものが馬鈴薯の山林であつて、彼の拾つたものが牛肉の藝術であることを思ふと、彼のアイデイアそのものは少しも滅んではゐないと云はなければならない。此點から云ふと、彼は最後まで高らかな聲を以て山林の自由を歌ふ夢想兒に外ならなかつた。彼にとつては、彼の眼の前に今まで燦爛と輝いてゐた光が一つ消え、さらにまた一つ消えて行かうと、根本から彼の幻

影を叩き壞す何物もなかつたからである。

思ふに、彼が最も手きびしく現實の反噬を蒙つたものは戀愛であつたらう。しかし、戀愛の破産者としての彼は、遂に戀愛に對するニヒリストたりえたか。異性と異性との靈肉の抱愛に對する燃ゆるごとき情熱、――『欺かざるの記』に於ける彼の戀愛的陶醉、『西印度洋の噴火山よ、戀愛を否定する道學者を燒き盡せ！』と云つた彼の戀愛的昂奮、『第三者』や、『歸去來』に於ける彼の戀愛的感情――は、彼をして如何に苛酷な現實に覿面せしめることがあらうと、到底彼の性情の根本から拔き去ることは出來ない。或は獨り戀愛に於いてばかりではなかつたかも知れない。一度教會を逃げ出してから最後まで祈ることの出來なかつたと云はれてゐる彼の晩年は、夢寐の間に於いて、屢々彼を若き日の傳道的夢想にまで導き入れることはなかつたか。恰も死の床に於ける芭蕉の幻想が冬の枯野をかけめぐつたやうに、彼の死の床に於ける幻想は北方の山林に迷ひ込むやうなことはなかつたか。

吁、ワイの流れ、林間の逍遙子よ、

如何に屢々我が心汝に振向きたるよ。

彼は幾度の顧眄に顧眄を累ねて、遂に彼の鄕土から離れることが出來なかつた。彼に於いて、私は如何に完全なるアイディアリストの模型を見ることであらう。彼に對しては最後まで現實が凱歌を奏することが出來なかつた。しかし、彼の曇らしえられざる眼は、現實に對して全然眼を蔽ひ去ることも出來なかつた。若し、彼に對するリアリストの名を許し得るならば、彼のリアリズムは、彼のアイディアリズムに對する分裂を意味してゐた。その分裂は遂に結合しえられない分裂、——遂に調停しえられない分裂である。此意味に於いて、彼の『惡魔』に描かれたる題目は、同時に、彼の內的生活に課せられたる題目であつたに相違ない。斷えずアンチポールを往返して、遂に安定すべき精神的避難港を見出しえなかつた點から云ふと、彼の生涯は、私にとつて、かすかながらも一のデュアリズムの悲劇を示唆するものと云つてもいいのである。

五　彼の心境

ゆめと見る〳〵はかなくも、
なほ驚かぬ此のこゝろ、
吹けや北風此の夢を、
うてやいかづち此の心。
をののき立ちて天地の、
くすしき様をそのまゝに、
驚きさめて見む時よ、
その時あれともがくなり。

——(鷺　　昊)——

彼は眼のあたり奇蹟を見なければ信仰に入ることの出來なかつた人間の一人である。彼はどうかして實在の不可思議を痛感したいと考へた。しかもどうしても痛感しえられない矛盾を感じてゐた。彼は理知の曇らされない眼を以て、斷えず信仰のエクスタシーに入らうとした。彼はこの解決しがたい惱みを『牛肉と馬鈴薯』に於いても懇へた。『欺かざるの記』

にかいても窺へた。『悪魔』に於いても窺へた。『病床錄』に於いても窺へた。かれの生涯を貫く愛すべきセンチメンタリズムは、愛すべき懷疑主義は、主として源をここに發してゐた。卒直に云ふと、かれの前半生に於ける遁逃の秘鑰を開くべき鍵は、まつたくこの愛すべきセンチメンタリズムと、この愛すべき懷疑主義との手に握られてゐると云つていいかも知れない。

再び云ふ。彼は愛すべき懷疑家であつた。秀でた、しかし、薄志を思はせるやうな眉、女にもしたいやうな優しい額、いささかの曇りもない、斷えず何物かに憧れてゐるやうな怜悧に輝いた眼、眞直ぐに通つた鼻筋、すこし大きな引締つた口。——恰も南方の空のやうに明るい輪廓の正しい顏が包んでゐる懷疑主義！

思ふに彼は今熱した口調を以て戀愛を論じてゐたかと思ふと、最早いつの間にか懸命に神の實在を論じてゐるといつたやうな人間であつたであらう。彼はすべてにアツピールすることの出來る複雜なサイドを持つてゐたとともに、すべてに沒頭することの出來ない浮氣な一面をも持つてゐた。かれの愛すべき懷疑主義は、この拔くべからざる性情を保證して、かれ

にアイディアリストとしての誠實と同時に、アイディアリストとしての薄志とを兼ね與へた。從つて、石鹸の泡のやうに湧き立つ彼の情熱は、また、石鹸の泡のやうに消え去るの外はなかつた。彼は此事實を反省して運命の罪に歸した。

運命！　此言葉ほど彼を強く打つたものはなかつた。彼の常套語たるエターニチーも、死も、戀愛も、彼に從ふと、要するに運命の掌上に翻弄される傀儡たるに過ぎなかつた。此意味に於いて見ると、彼は嘗て棄てた神の代りに運命を信じたと云つてもいい。運命を信ずる時に於いてのみ、かれの至純——慥かに至純と云ふべきである。——な情感は、かれの藝術を詩化した。從つて、かれから詩人の嗟嘆を聞くときは、我々はいつも運命の前に跪いた殊勝な彼の姿を見出すのである。

藝術家としての彼は、決して批難さるべき態度の所有者ではなかつた。否、彼の藝術的な自覺——それは聽て彼の藝術家としての氣稟を作り上げたものであるが、——の裡には、日本の作家としては類ひ稀れなほどの敬虔な念慮と、一途な精進とのあつたことを否むわけにゆかない。此意味に於いて、彼には、彼のいはゆる高き理想を追ふに虛榮の念を以て」しな

いだけの用意はあつた。たゞ彼の浮氣は、彼の情熱に依つて煽動され易い浮氣は、彼をして純潔な藝術上の清教徒たらしむべく、餘りにアンビシアスたらしめ、且つ、餘りにエクセントリツクたらしめた形跡がないでもない。しかし、一方から云ふと、これは彼自身の素質の罪であるといふよりも、寧ろ時代の罪であるといふ方が妥當であるかも知れない。

いふまでもなく彼は自然主義の大潮流に乘じて文壇に泳ぎ出た一人である。彼は一朝にして名を成した。彼に隨喜するものは、彼を呼んで或は『自然主義の先驅者』であると云ひ、或は『自覺せざる自然主義者』であると云ひ、或は『新興文藝の第一人者』であると云つた。彼は自己の周圍に餘りに多くの渇仰者と、あまりに多くの讃美者とを持つた。しかも時代は自然主義の專橫に委ねられてゐた。かくては彼と雖も多少の浮足は免れまい。知らず識らず時代の渦卷に捲き込まれて彼は、その晩年に至つて幾分時代に强制せられた作物を書くやうになつた。

しかし、文壇の消息子は傳へた。

『俺は何も自然主義者だといふわけではない。』

果して獨歩がかやうに呟いたとあれば、彼の聰明は全然蔽ひ去られたわけではあるまい。一つのイヅムに押し込められて終ふと同時に、彼の自我は全く滅びるに相違ないからである。

六　彼の占むべき地位

獨歩逝きてよりすでに十三年。月日の移るとともに時代も動いて行つた。一時は平家の全盛を思はした自然主義の覇業も倒れて、今では文壇もかなりに進歩した。文藝史家の冷靜と公平とを持して、もうそろ〳〵明治文壇の總勘定をなすべき時機であるかも知れない。

その活動時期が純粹に明治年間に限られた作家の中にあつて、幾分でも後世に殘るであらうと考へられる作家を數へて見ると、私は其數のあまりに尠いのに驚かないわけにゆかない。嚴密に云ふと、有名なる尾崎紅葉のごときも、單なるピューリストとしての以外に、果してどれだけの意味があらう。幸田露伴氏のアイデアリズムのごときも、その古典的な味ひ以外に果して何を求むべきであるか。小栗風葉氏は如何、小杉天外氏は如何、山田美妙齋は

如何、德富蘆花氏は如何、川上眉山は如何、泉鏡花氏は如何。——かく考へて來ると、太倉の粟陳々相依るもまた若何せんといふの外はない。かくのごとく荒寥を極めた明治文學の中にあつて、私が偶々二葉亭四迷、樋口一葉及び國木田獨歩の三異才を發見するといふことは、すくなくともシムーンの吹きすさぶ沙漠にオアシスを見出しただけの感激には値する。

短篇作家としての一葉と獨歩、長篇作家としての二葉亭。——この三人の全業績を指して私は必ずしも偉大だとは云はない。しかし、彼等は決してジアーナリズムを以て興り、且つジアーナリズムを以て滅びるやうな凡庸作家ではなかつた。二葉亭の『その面影』や、『平凡』にしても、一葉の『たけくらべ』や、『十三夜』や、『濁江』にしても、『獨歩集』や、『運命』の中に收められた獨歩の作品とともに、何等かの意味に於いて、必ず永久に彼等の存在を主張しうるに相違ない。しかもこれらの作家が相率ゐて多産の作家でなかつたといふことは、特に注目すべき事實ではないかと思ふ。

彼の同時代の諸作家に比較すると、彼の文壇生活は必ずしも幸福ではなかつた。彼が初めて處女作『源爺』を書いたのは明治三十年の四月であるが、彼が眞に文壇の大家として認め

られたのは明治三十九年の三月、短篇集『運命』を出版してから以後のことである。此間に於ける約八九年といふものは、殆んど世間から認められない無名作家に近いものとして、嘗て一度も文壇の中心舞臺に乘り出す機會を持たなかつた。現に、彼の作品中最も注目すべき佳作たる『巡査』や、『牛肉と馬鈴薯』（共に明治三十四年？）のごときも、製作の當時は發表の機關に困じた結果、これを大阪に送つて雜誌『小天地』に掲載したほどである。しかも當時に於ける『巡査』の稿料僅かに三圓に過ぎなかつたと云ふ事實を聞くと、現代の文藝に從事するの士は、まだ〳〵多幸だと云はなければなるまい。殊に、最近の狀勢に徵すると、今後の文壇は益々民主化しようとする傾向がある。果して欣ぶべきことであらうか。

兎に角獨歩は過渡時代の文壇が生んだ異才に相違ない。彼の作品が果して一葉や二葉亭の作物以上に後世に生き殘るかどうかは保證しがたいが、今後と雖も、或時代の或讀者の間には、時々思ひ出したやうに讀み返される場合があるであらう。彼の作品の持つてゐる作爲や、技巧や、思想や、アイディアは滅びることがあるにしても、彼の情熱は滅びない。若し彼の作品に「不朽」の二字を刻しうるならば、全く此點に於いてであると思ふ。

嘗て彼は云つた。

渠の行末を思へば心痛の至りに堪へず、渠の特質は渠自身を呪ふが如く見ゆ。渠には野心あり。天才あり。されど足なきの野心、翼なきの天才なり。進む能はず、飛ぶ能はざるなり。常に其心を喰ひつゝ僅に其心の生命を繋ぎ居れり。我儘にして高慢なり。而して蟄せる怠惰の慢性病に罹り居れり。……

――(略　雨)――

わざとらしき、しかし、全然虚偽の感情から出たものでない自嘲の中に潜んでゐる抜くべからざる自信。――彼の苦悶時代に於ける内面生活の一端を曝露した此告白を見た眼を以て、彼の極めて短い文壇生活が成就しえた業績を顧ると、彼もまた十分安んじて可なるものがあらう。

私から云ふと、すくなくとも彼は明治文壇に於ける一個のヒーローであつた。

アッシジに於けるゲエテ

一　女神ミネルヴの祠堂

一七八六年十月二十五日の午後のことである。マドンナ・デル・アンゼロで、今まで乗つてゐた馬車を棄て、吹きすさぶ強風の中を徒歩でアッシジの町を指して登つてゆく一人の旅人があつた。――快よく晴れた空に鮮かなラインを描いて、弓手には聖フランシスを祀つたバビロニア式の伽藍が見えた。

『あんなところへゆくと、頭が例の陸軍大尉のやうになるかも知れない。』

冷かな心持でかう呟いた旅人は、かの名高い尊者の祠に禮拜すべく、わづかに一投足の勞をも執らうとしなかつた。例の陸軍大尉といふのは、この旅人がボロニアからジレドまでの行を共にした法王廳の士官で、盛んに伊太利の坊主を罵倒し、口を極めて北國人のありがたい自由を賞讃した男のことである。

ある美少年に案内されて、旅人は間もなくマリア・デラ・ミネルヴの前に來た。山の中腹の

恰度二つの丘陵が相接する美しい斜面のあたりに、女神ミネルヴを祀つた壯麗な殿堂が立つてゐる。アウグスツス時代に造られた古代の建物が未だ完全に保存されてゐるのであるが、兼ねてから此建物の存在を教へられてゐた旅人は、ローマ府への途中を態々アツシジに立寄つて、この貴い古代の紀念物を一見しようとしたのであつた。

ここに費された幾分間乃至幾時間が旅人に果してどんな感興を齎らしたか、その間の消息は筆者の不完全な通信を待つまでもなく、旅人自身の我々に殘した記錄が極めて雄辯に物語つてゐる。

旅人は云つた。——

『小さい町に應はしい小さい殿堂ではあるが、非常に完全で、何處へ出しても恥しくないほど美しく出來てゐる。……自分はキドルフとバラヂオとを讀んで、市街の建設、殿堂や公共的建物の位置をどうしたらいいかといふ議論を見てから以來、かうした種類の事物に對して大なる尊敬を拂ふやうになつたが、この點に於いても古人は求めずして偉大であつた。……殿堂は公園の中央に建つてゐないで、ローマの方から登つて來るものに手近く頗る綺麗に見

えるやうになつてゐる。若し圖に取るならば、單に殿堂ばかりでなく、その美しい位置をも寫すべきである。』

さらに旅人は云つた。——

『正面を見て自分は飽くことを知らなかつた。ここにも亦藝術家は非凡な天才を發揮して正確に順序を踏んでゐる。圓柱はコリント式で、その距離は二モーデルを少し越えてゐる。柱脚と其下の柱盤は柱趾の上に立つてゐるやうに見えるが、實を云ふと、其底は五回中斷され、五個所ながら圓柱の間に五つの階段を上つたところの表面に初めて圓柱が立つて、その表面から殿堂内へ入るやうに成つてゐるのである。』

さらにまた旅人は云つた。——

『受賣りといふものが如何に賴母しくないかといふことを、自分は今度もつく〴〵感ぜざるを得なかつた。パラヂオの本にも無論此殿堂の圖を出してはあるが、彼は親しく此殿堂を見なかつたらしい。何故かといふと、彼の圖では柱趾は全く表面上に位置して、その結果圓柱は過度に高くなり、實際に於いては平靜で、優雅で、眼と心とに滿足を與へる此美觀はピラ

ミツド式の忌むべき怪物になつてゐるからである。――この建物の觀賞によつて自分の腦裏に生じたところのものは、到底言葉で云ひ表すことは出來ないが、その齎らす效果は永久である。』

再び聖フランシスの物悲しげな伽藍を横に見て心靜かに坂を下つた旅人は、一方は山に沿ひ、今一方は豊かに開けた谿谷に續くフオリニョへの道を進んで、最も美しい、最も愉快なローマ府への旅を急いだ。その背後には『愛すべき女神ミネルヴが如何にも親切げに自分を贈めてゐた。』と書き殘してゐる旅人は、初めて聖地アッシジの土を踏みながら、遂にグラン・コエントーを訪ねなかつたのである。

この旅人は果して誰れであらうか。

私の眼前には一幅の繪畫が浮かんで來る。ある中年の男が純白な外袍を着けて、戸外に倒れた一基のオベリスクに腰を懸けながら、背景の奥深く見える廢阯に眺め入る圖である。この繪畫に就いて、前記の旅人はかう記してゐる。

『チツシュバイン氏が取懸つた自分の大きな肖像畫は、既に布地を抜け出してゐる。氏は敏腕

な彫刻家に頼んで、小さな粘土のモデルを作らせたのであるが、そのモデルに外套を着せてあるのが如何にもうまく出來てゐる。』

百五十年に近い今日まで、自分等の前に殘されてゐる此意味深い繪畫は、その一隅に題して云ふ。

『カンパニア・デ・ローマに於けるゲエテ』！

二　ゲエテの卓越性

ゲエテ自らが『南方への逃避』と呼んだ一七八六年の九月から一七八八年の六月に至る二十一ケ月間の伊太利旅行が、單に彼の生涯に於いてばかりでなく、獨逸文學史の上に於て如何に重大な意味を持つてゐるか、それに就いては私が玆で改めて說明する必要はなからう。『自分は羅馬に脚を踏み込んだ日から第二の誕生日を數へ、本當の復活の誕生日を數へるのである。』と云ひ、且つ、『この伊太利旅行は自分の一生中に於いて最も重要な年であつた。』と

云つた彼自身の述懐は、ある意味に於いて世界的意義を持つてゐると云つてもいいかも知れない。

特殊な舞臺を背景として、そこには偉大なる天才が活躍を肆まゝにした好例があつたのである。

日數に積ると、僅かに七百日を出でない短時日ではあるが、その短時日の間に於いて彼の發揮した能力の質量は、世界の文化に寄與することのすくない國家が、數千年の間に於いて客觀性の謂ひに外ならぬと喝破したが、それらの國家の唯だ一つでもが當時のゲエテに依つて示された程の偉大なる客觀性を持つたことがあるか。徒らに無能と怠惰とを示すに過ぎない歴史を背負うて、殆んど人類の、幸福と進化と向上とに對する何等の貢獻をも持つてゐない國家は、三十八才のゲエテの前に跪いて須らく愧死すべきであらう。

この旅行の始めに於いて、ゲエテは自らの決心を語つて云つた。

『自分が再び現世界に興味を感じ、自分の觀察精神を實驗し、且つ、自分の學問と知識とが

どれほど役に立つか。自分の眼が果して明かで清く燦いてゐるか。自分は急場に臨んでどれだけのことを理解する能力を持つてゐるか。また、自分の心に出來て刻まれてゐる襞は果して再び延ばすことが出來るかどうか。それを試驗して見ることが當面の問題である。』

かうした試驗問題に對して、何人かよくゲエテほど秀拔な答案を書き得たものがあるか。彼が遠く書を故國に飛ばして戀人シャーロッテに與へ、『自分のために謎となるべき存在は一つもない。萬物は自分と語つて皆眞相を露呈する。』と云つたのは、決して誇大な自己讃美ではなかつた。

多くのことをいふ必要はない。シャルニックからロヱレドに至るまでのチロル山間に於ける三日の旅に於て、彼獨特のアルグスの眼が、如何に驚くべき靈能を發揮してゐるかを見よ。ある時の彼は卓れた氣象學者であつた。ある時の彼は卓れた植物學者であつた。ある時の彼は卓れた動物學者であつた。ある時の彼は卓れた地質學者であつた。ある時の彼は卓れた鑛物學者であつた。またある時の彼は風俗習慣に對する精緻な觀察と、地方的特色に對する周到な研究とに依つて卓れた地理學者でさへあつたではないか。アドリア海岸に於いて發見し

た羊の頭骨から、總ての頭骨は背柱の變態であるといふ眞理を發見した彼が、同時に、ボロニアに於いて見たラフアエルの名畫から、戯曲『イフイゲニー』の機緣を得た彼であることを思ふと、彼の批評家とともに、私は「彼の腦裏をば何といふ新らしい神話が通り過ぎることか！」といふ嘆を等しうしないわけにゆかない。

人類の歷史の上に存する一つの奇蹟として、我々は彼の素晴らしい卓越性を容認することに馴れてゐる。しかし、彼自身の眞賦の上に供はる偉大なる感受力、偉大なる洞察力、偉大なる順應力、及びそれらの諸力を統合整理して、一つの深遂なる宇宙觀を形成するところの偉大なる綜合力を驅使して、各賦性の遺憾なき活動を試みさせるところの動因は何であらうか。能力は天賦であるにしても、能力の發動をして餘蘊なからしめるところの根源は何であらうか。

茲に於いて、私は初めてアッシジに於けるゲエテを思ひ浮べるのである。

敢て問ふ。私の拙劣なる記述に於いて、炯眼な讀者諸君は、此疑問の解決に對する何等かの暗示を得ることはなかつたかと。

三　精神の自由

私は年々伊太利を訪れる幾十萬の旅客があるかは知らない。しかし、足苟くもアッシジの地を踏む基督教國民ならば、必ずや一度は聖者フランシスの伽藍に詣でて、その崇高い威靈の前に祈念を捧げないものはあるまいと思ふ。——然るにゲエテの場合にあつてはどうだつたらう。

『あんなところへゆくと、頭が例の陸軍大尉のやうになるかも知れない。』

女神ミネルヴの前に跪いて心からの讃嘆を惜しまなかつた彼は、その往復の二途に於いて、聖者フランシスの伽藍に冷かな流眄を與へたに過ぎない人間ではなかつたか。

『何たる冒瀆ぞ！』

小さく堅まつた、ある愚直な心はかう叫ぶかも知れない。

『何たる悲しむべき對比ぞ！』

眼の先しか見えない、ある鹿爪らしい顔はかう呟くかも知れない。

一面の意味から云ふと、なるほど冒瀆でもあらう。なるほど悲しむべき對比でもあらう。しかし、それは單に冒瀆であり、且つ、單に悲しむべき對比である以外に、何等の事實をも物語らないものであらうか。一個の異教徒として、且つ、基督教主義に對する希臘主義を體現する一個の代表者として以外に何等の意味をも示唆しないものであらうか。私は明かに『否！』と答へざるをえない。

羅馬に滯在中のゲエテは、耶蘇降誕祭の夜、寺院の儀式を見ようと思つて、彼方此方をうろつき廻つたことがあつた。その時彼はペテロ寺院で法王と僧徒との全團體を見た。法王は半ば玉座の前で、半ば玉座から下に向つて聖式を行うてゐた。式は此種類のものに於ける最も壯觀なもので、あらゆる華麗と威嚴とを極めてゐた。

『自分は新教徒のヂオゲネス主義の中に年を經てゐるので、この壯嚴な儀式を見ても何等うるところがなく、反つて失ふところが多い。自分は此宗教的世界征服者に向つて、自分の敬虔な祖先が云つたやうに、顧はくば吾ために高等な藝術と純正な人道との太陽を遮ぎるなか

れと云ひたい。』

後に此時の感想を述べて、大膽な彼はかう云つてゐる。

何たる精神の自由ぞ！冒瀆もいい。悲しむべき對比もいい。この精神の自由があつてこそ、彼の素張らしい卓越性は初めて意義を持つたのではないか。彼自身の稟賦の上に供はる偉大なる感受力、偉大なる洞察力、及び、それらの諸力を統合整理して一つの深遠なる宇宙觀を形成するところの偉大なる綜合力が、初めて實際の用をなしたのではないか。この意味に於いて、我々はゲエテの有する能力の前に頭を低げるよりも前に、先づゲエテの有する精神の自由の前に跪かねばならない。何故といふに、若しも精神の自由にして缺けてゐたならば、奇蹟を以て許さるべき彼の偉大なる天才すらも、恐らくは「無用なる能力」と化し終つてゐただらうからである。

何物にも拘泥するところなく、何物にも囚はれるところなく、恰も大空を翱翔するやうな自由を以て、あらゆるものに興味を持ち、あらゆるものに愛を感じ、且つ、あらゆるものを理解することの出來たゲエテの廣大無邊なる精神。——それを思ふ時、私は泌々彼に與へら

れた天寵の豊かさを思はないわけにゆかない。

一七八七年二月二十七日、彼はナポリに於いて書いた。

『今日は飽くまで飲み、飽くまで食つて、最善の風景と事物とを觀賞して時を過した。誰も氣の向いたまゝ語り、述べ、描くべきである。』

自由なる精神から、始めて朗かな聲が出るのである。

四　デエモニッシュ

そのゲエテを論ずる文章に於いて、聰明な露西亞の批評家は、ゲエテの眼を說明して次ぎのやうなことを云つてゐる。

『この永遠に若い眼の中には、實にデエモニッシュな或物が橫はつてゐる。それはこの眼の所有者自身が常に用ひた言葉である。デエモニッシュとは、邪教徒に於いては「神のごとき」の意味であり、基督教徒に於いては「惡魔の如き」の意味であるが、兩者の場合に於いて、

共に超人的な意味を示してゐる。』

彼は私のために一つの有益なる註解を與へて呉れた。それは外でもない。私が謂ふところの自由なる精神とは、取りも直さず、彼が謂ふところのデエモニッシュに外ならんといふことである。何故なれば、最も崇高なるもの、最も永遠なるものをのみ望んで、あらゆる地上のもの、あらゆる現前なるものを棄て去るといふことは、一面から云ふと、最高度に於ける精神上の自由を意味するものであるとともに、他の一面から云ふと、徹底的に人間的なるものから脱却することを意味するものだからである。

この點から云ふと、アッシジに於けるゲエテは、吾々に對して最も明かに精神上の自由、即デエモニッシュなることを示して呉れたものであり、且つ、極めて興味ある形に於いて、彼が本來の面目を發揮して見せて呉れたものであると云つていい。

彼の名高い傳記作者は、彼とシルレルとの交遊を論じた一節に於いて、當初に於ける兩者の睽離と疎隔とは、前者が既にシュツルム・ウント・ドラング期の粗鬆なる傾向から脱した時、後者は未だ之れを脱してゐなかつた點にあると云つてゐる。前者の『イフイゲニー』と後者

の『群盗』とが殆んど期を同じうして現れた作品でありながら、その間に如何に甚しい傾向の相違があるかといふことを考へると、精神上の自由に於いて、即ち、デエモニッシュである點に於いて、ゲエテが如何にシルレルの上にあつたかといふことは更めて穿鑿するまでもあるまい。かうした事實は、聽て今日に於ける兩者の歷史的評價の上に至大な內因を與へてゐるに相違ないと思ふ。

彼の批評家は云ふ。——

『あらゆる時代の神話に於いて、惡魔といふものが常に重大な役目を演じてゐる。』

心惡きまでに惡魔の放埒な奔馳に身を委したゲエテこそ、何といふ幸福を許されてゐたことだらう。偉大なる精神の自由に對して、私はあくまで敬仰の眼を瞠らなければならない。

井原西鶴の描いた女性

一　女性を描いた作品

考證家の說くところに據ると、井原西鶴の作品として今日まで傳はつてゐるものの中には、西鶴の門流乃至西鶴のエピゴーネンの手になつたものがかなり澤山あるらしい。綿密な穿鑿は兎に角として、我々が不用意の間に讀過して得た印象から云つても、例へば『櫻陰秘事』や『萬の文反古』などのやうに、どうしても彼の作品としては受取りにくいものが少なくない。嚴密な意味の西鶴著作年表を編するやうな立場から觀ると、金箔付きの西鶴物として我々が信憑していいものは、いはゆるボルノグラフイとして知られてゐる五六の作品を除くと、その他には、『日本永代藏』とか、『武道傳來記』とか云つたやうなものを初めとして、約十篇內外のものではあるまいか。既に瀧澤馬琴が云つてゐるやうに、善かれ惡かれ彼は德川中期の文學史上に一時代を劃した大作家であつた。時代の好尙に取殘された多くの群小作家等の中に、彼の聲名を利用して何物かをえようとする卑劣漢があつたとしても、別に怪しむべきこ

とではない。

確實な西鶴の作品の中で、明かに女性を主人公としたものは『一代女』と『五人女』とである。『武道傳來記』や、『武家義理物語』や、『世間胸算用』や、『本朝二十不孝』や、『日本永代藏』などに登載されてゐるエピソードの中にも、稀れには女を主人公としたものもあるが、それは特に女性たるを必要とする意味に於いての女ではなくて、たまたま說話の組立に便するために選ばれた女である。從つて、最も端的に、最も要約的に彼の描いた女を觀ようとすれば、勢ひ前述の二作に據らなければならない。

二　彼の代表作

『一代女』と『五人女』とは、共に貞享三年に上梓されたものである。『一代男』に後ること二年、『二代男』に後ること一年、『三代男』と時を同じうして、所謂ボルノグラフイの最後を飾つた作品であると云へば、これらの作品が、作家としての西鶴の生涯の上に、果して

如何なる地位を占むべきものであるかは、自ら理解されるであらう。貞享三年は、彼が四十五才の時である。談林派の巨星として、俳壇の一角に燦然たる光芒を放つてからは已に十餘ケ年、物語作者として新しい文學的生涯に踏込んでからも最早五ケ年を經過してゐるから、これらの作品は、正しく作家としての彼の爛熟期を記念するものと云つていい。

近松門左衛門の藝術的業績の絶頂を意味するものが世話物にあるといふ多數說に就いては大いに異議を唱へたいが、井原西鶴の文學的貢獻の最大なものがポルノグラフイにあるといふ古來の定論に對しては、聊かも抗辯すべき理由を見出さない。いはゆる好色本を外にしても、西鶴の作品として著名なるものには『日本永代藏』がある。『世間胸算用』がある。『置土產』がある。『懷硯』がある。私と雖も、これらの諸作によつて十分に看取し得る彼の橫溢した才氣や、豐富なレトリツクや、奇警な觀察や、巧緻な着想などを否定しようとは思はない。併し、作家としての彼の全價値を想定すべき多くの特色が、渾一的に、且つ、最も鮮麗に現れてゐる點から云ふと、これらの諸作は、到底かのポルノグラフイに及ばない。單に好色本のみを讀んで全西鶴を語ることは必ずしも不當ではないが、單に『日本永代藏』や、『世

間胸算用』を讀んで、全西鶴を語ることは斷じて不當である。この意味に於いて、西鶴を代表せしむべき何等かの作品を擧げる必要があるならば、私は直ちに前者を擧げるに躊躇しないであらう。

いはゆるポルノグラフイが、果して作家として西鶴を代表するに足るものであるとすれば、『一代女』と、『五人女』とは、いはゆるポルノグラフイを代表するに足る二つの寶玉である。『一代男』も卓れた作品ではあるが、前の二作に比較すると、その文章や結構の上に、未だ整はない點がすくなくない。思ふに、此作は、俳人としての彼が、始めて作家としてのデビューをするために世に問うたものであるだけ、その覺悟に於いては、非常にアムビシアスなものがあつたにしても、その用意に於いてはかなり缺けるところが多かつたに相違ない。貂に續くに狗尾を以てした觀ある『二代男』や『三代男』は、この不用意を遺憾なく曝露したとも云つていい作品であつて、第一作に於いて贏ちえた世俗の喝采が、彼の藝術的自覺を促すべく餘りに沒批判的であつたことを暗示するものである。從つて、爾後に於ける製作の態度に何等の變化もなく推移したならば、作家としての彼は、その出發の第一歩を絶頂として、

段々下り坂になつてゆくより外はなかつたかも知れない。幸にも彼は聰明な男であつた。作家としての自己を培ふべき手段と、作家としての自己を陶冶するだけの反省とを多量に携へてゐる男であつた。『三代男』に次ぐに『一代女』と、『五人女』とを以てしたことは、たしかに彼をして近松に對峙するだけの巨名を博せしめた所以である。

三　『一代女』の梗概

『一代女』は、ある貴族の血を稟けた美貌の女のギタ・セクスアリスを告白體に書いたものである。

彼女は、まだ十歳にもならぬ頃から宮廷に仕へて、あらゆる驕奢と華美との世界の中に育つた。早熟であつたこの美しい一少女を中心として、誘惑の手は八方から伸びた。十三歳の時には、早くもある青侍と戀に落ちた。男は罪を負うて斬られたが、女は赦された。當座の間は、慘ましい初戀の記憶が女を苦しめたが、それも間もなく忘れて終つた。彼女は云ふ。

『これを思ふに、女ほど淺ましく、心の變るものはなし。』

宮廷を追ひ出された後の彼女は、その頃流行した舞曲の師匠に就いて舞姫となつた。初めの内は身持も修まつてゐたが、女は最早男の心を捉へるコケツトリーを解してゐた。間もなく自分の寡人生活のペトロンであつた男と通じた。たまく江戸詰の大名が人を派して國色を覓めた。百七十餘人の候補者の中から選ばれて、女は一躍國主の艶妾となつた、現世の歡樂は、數を盡して女の一身を繞つたが、『殿次第に痩せさせたひ、御風情みにくかりしに、都の女のゆえぞと思ひの外に疑はれて、』親許へ送り返された。彼女は遂に娼婦となつた。島原の廓に全盛を驕つた日も長くはなかつた。——太夫から天神へ、天神からかこひへと沈んでゆく女の流轉を描き出すに至つて、西鶴の『ユヌ・ヴイー』は、初めて生彩を放つて來る。

新町に於ける勤めを終へた後、彼女はお寺小姓といふものに化けて、ある寺院の大黒に住込んだ。そこには、宗教といふ美名の蔭に隱れて、淫蕩の限りを盡す醜惡なる生活があつた。『人燒く煙も鼻に入らず。……白小袖の坊主くさきも、身に添ふ移香の親しくもなりぬ。』と云ふに至つて、彼女のデケーデンスも極まつたと云つていい。間もなく寺を飛び出して女祐筆

となつたが、艶書の代筆を頼みに來た男を口説いて再び身を持ち崩し、その後は處女を裝うて呉服屋の腰元となつたり、江戸に下つてある屋敷の表使となつたりした。ある時の如きはさすがに墮落した自分の身に愛憎をつかし、髪を落して尼になりたいとまで思ひつめたこともあつたが、それは一時の氣紛れに過ぎなかつた。あるひは川口の歌比丘尼、あるひはお屋敷の御梳、あるひは御物師、あるひは仕立屋、あるひは茶の間女、あるひは妾奉公と、生活の樣式はさま〴〵に變化したが、人に迫られて誓紙を書く時にも、『我定る男もなければ、いたづらは神佛も許し給へ。』と臆面なく除外例を要求する女だけあつて、彼女の血管を流れてゐる淫蕩の血は、彼女をして益々淪落の淵に近付かせるばかりであつた。彼女は唯だ運命の導くまゝに流れた。——『一代女』に於ける五、六の兩卷は、この種の女が常に陷るべき最後の頽廢を描いたものに外ならない。

都の茶屋者と成下つてから後の彼女の生活にも、時には下屋敷のお圍者となり、扇屋の御内儀樣となつたやうな好運の見舞つたこともないではなかつたが、さうした生活は長く續かず、風呂屋や西陣の絲繰はまだいゝとして、終には蓮葉女、暗物女、二瀨女、舟饅頭、遣手

奉公などゝいふやうな最下級の醜業生活のみが續いた。『人に惡き事の末の續きしはなし。惣じて憎み出し、此里に住憂く、玉造といふ町盡く店なしの小家がちなる物の淋しく、晝さへ蝙蝠飛ぶ裏貧屋を隱住に世を渡るかくまへもなくて、一つもある衣類を賣絶えて明日の薪に棚板を碎き、夕は素湯は煎大豆齒に載せるより他なし。』といふどん底の境遇に陷つた彼女は、彼女のギタ・セクスアリスの最後を結ぶ悲慘な一頁として、六十五才の皺を紅白紛に塗りかくし、場末の陋巷に馬子日傭人を得意とする淺ましい夜發の勤めを選んだ。併し、嘗ては國主の艷妾と謳はれた身も、今は一人の顧るものもなかつた。彼女は云ふ。『萬木眠れる山となつて、櫻の梢も雪の夕暮とはなりぬ。是は曙の春待つ時節もあるぞかし。人ばかり年を重ねて何の快樂なかりき。殊更我身の上さりとて往時を憶ふに恥かし。せめては後の世の願こそ眞なれ。』

四　『五人女』の梗概

『五人女』は、作者と同時代に巷談塗説を賑はした市井の情事を題材として、五人の女が遭遇した戀愛悲劇を書いたものである。五つのエピソードに分れて、それ〳〵の巻が、一つの纏まつた短篇小説の形を成してゐる。

巻之一に取扱はれたものは、お夏清十郎の情事である。播州の室津に、清十郎といふ美貌の遊蕩兒がゐた。十四歳の秋から遊里に足を踏み込んで耽溺の限りを盡したが、皆川といふ女郎と深くなつて情死を企てた。女は死んだが、男だけは助かつた。故郷にも居たゝまらず、親から預けられた且那寺を逃げ出した彼は、姫路に出かけて但馬屋といふ商家に手代奉公をした。主人の妹のお夏といふ美しい娘が此男に惚れたのが緣で、二人の間には干係が出來た。二人は手に手をとつて上方へ駈落をしようとしたが、運わるく追手のものに捕へられ、男はその日から座敷牢に監禁された。たま〳〵但馬屋の内藏にあつた七百兩といふ小判が見えなくなつたので、男は無實の罪を負うて殺された。女も初めは情人の刑死に就いて何事も知らなかつたが、やがて事實を知るとともに狂ひ出した。『むかひ通るは清十郎ではないか。笠がよく似たすげ笠が。』と唄うて、美しい姿を取亂し、毎日巷をさまよひ歩いて子供のなぶりも

のになつた。百ケ日にあたる時、清十郎塚で自殺をしようとしたが、人に遮られて思ひ留まり、その日から黒髪をおろして尼となつた。お夏が十六歳の夏のことである。

巻之二に取扱はれたものは、樽屋おせんの情事であるが、このエピソードはおせんを中心にして前後の二つに分れ、前の半ばは、おせんが樽屋と結婚するまでの經緯を物語り、後の半ばは、おせんの姦通が夫に知れて自殺するまでの事情を物語つたものである。樽屋の戀に初まり、夫婦池のこさんといふ墮胎を業とする鬼婆のたくみとなり、伊勢詣りの道中に於ける樽屋とおせんと久七との戀の三角干係となり、最後に、京の祇園の辨當屋に於ける樽屋とおせんとの出合となるまでの經過は面白く書かれてゐるが、それは必ずしも重要な意味を持つてゐない。二人が結婚してから後、ある日、おせんは麹屋長左衞門の法事に出かけて手傳つてゐたが、わけもない出來事から、悋氣深い麹屋の女房に疑はれた。『おもへば〳〵惡き心中、とてもぬれたる袂なれば、此うへは是非に及ばず、あの長左衞門殿に情をかけ、あんな女に鼻あかせん。』と思ひ立つたのが戀となり、ある夜男を引入れて密會してゐる現場を夫に見付けられた。女は潔く自殺し、男は刑死した。

巻之三に取扱はれたものは、おさん茂右衛門の情事である。この一篇は、『五人女』中の壓巻であつて、その結構の完美した點から云ふと、恰もマウパツサンの卓れた短篇を見るやうな氣持がする。おさんは京の大經師の妻であつたが、美貌と心がけのいゝのとで評判な女であつた。夫が所用で江戸に下つてゐる留守中に、りんといふ女中が茂右衛門といふ雇人に惚れてゐるのを種に使つて、戯談半分に茂右衛門をからかはふとしたのがあやまちとなり、おさんは心なくして茂右衛門のために節操を破られて終ふ。退引ならぬ羽目に陷つて破れかぶれになつた女は、男をそゝのかして家を出で、世間へは琵琶湖で情死したやうに見せかけ、丹後路に落てのびて切戸の文珠堂のあたりにさゝやかな隱れ家を持つた。併し、毎年丹後から京に出て來る栗商人の口からそれが漏れ、二人の男女は、不義の罪に問はれて粟田口の刑場で斬られた。

巻之四に取扱はれたものは、お七吉三の情死である。この人口に膾炙した物語は、幾たびか色々の作者の筆に上つた。併し、西鶴の手になつたものが、最もリアリスチツクの味ひを持つてゐる。天和の火事があつた時、お七は、母とともに近くの吉祥寺に避難した。そこで

不圖したことから吉三郎といふ青年と戀に落ちたが、火事が治つたので、二人は心ならずも別れた。家に歸つてから後も、男はあの雪の降る夜女の許を忍んで訪ねたこともあつたが、女はまゝならぬ戀を悲しんで、『ある日風の烈しき夕暮に、日外寺へ逃げゆく世間の騒ぎを思ひ出して、又さもあらば吉三郎殿にあひ見る事の種ともなりなん。』と思ひ付き、無謀にも放火の罪を犯した。このことが露れて、お七は死罪に處せられることに決定し、今日は神田、明日は淺草といふ風に曝物として引廻された揚句、鈴が森で十七年の短い生涯を終つた。このことを聞くと男は自殺しようとしたが、人の勸めによつて思ひ止まり、出家となつて亡き女の菩提を弔うた。作者は云ふ。『さても〳〵取集めたる戀や、哀や、無常なり、夢なり、現なり。』

卷之五に取扱はれたものは、おまん源五兵衞の情事である。他の四篇が揃うて悲劇に終るのに反して、この篇だけが喜劇に終るところに對照上の異色はあるが、結構にも無理があり着想も徒らに奇異を衒つてゐるばかりで、他の四篇に對すると、始んど蛇足を加へた觀がある。念友を喪うて悲しみのあまりに出家した源五兵衞といふ男を慕ひ、おまんといふ女が、

若衆に身を扮して口説にゆくといふ筋であるが、あまり馬鹿々々しくて、眞面目には讀んでゐられない。

五　戀愛卽性慾

『一代女』と、『五人女』との文學的鑑賞に就いては、問題外であるから、玆では何も云ふまい。それよりも、私は、この二作に現れた西鶴の女性觀が果してどうであるか、更めて吟味して見よう。

假に性慾と戀愛との間に截然たる區別をつけて考へると、『一代女』の主人公は、戀に生き戀に死んだと云ひたいが、事實は、肉に生き肉に死んだのである。『これを浮世の色勤めのをさめに思切つてぞやめにける。』と云つた位であるから、彼女の生涯が肉の奉仕に終始したことは、彼女自らも認めてゐるものと考へていゝ。十三の年に初めて男を知つてから、六十五の皺くちや婆になるまでに弄んだ男の數が數萬人といふのは誇張としても、彼女は一日た

りとも男なくては生きられぬ女であつたことに疑ひない。彼女は、いつも自分の方から持ちかけて男を誘惑した。『一代女』の全篇、二十四に分れたエピソードの中には、色々の情事が描かれてゐるが、彼女は、いつも例外なしに淫婦の役目を引受けてゐる。彼女が關係した情事には、いささかもロマンティツクな情趣がない。男と女とがよれば、直ちに肉の中に飛び込んで終ふ。彼女自身は戀と呼んでゐるが、事實の上から見ると、戀とは性慾を美化する又の名に過ぎない。彼女は、自分の生活を律する良心も認めなければ、道德も認めない。世間並の義理人情をも踏みにぢつて、何等の不安もなく、本能の目ざすところに驀進する。從つて、如何なる場合にも、情事にまつはる精神的な苦悶乃至精神的な悅樂ともいふべきものは皆無であつて、彼女の生涯を指導する力は、常に性の衝動であり、彼女の生活を意味付けるものは、常に官能の享樂であつた。『可笑しや愚なる世間の人、早子ばかり八人おろせしに』と空嘯く圖太さに至つては、淫婦の面影を眼のあたりに見るやうな氣持がする。

『一代女』の主人公に比較すると、『五人女』の主人公は、それぞれに幾分なりともロマンティツクな情趣を持つてゐる。殊に、お夏とお七との情事は、字義通りに、戀に生き、戀に死

んだ若き女の火のやうな情熱が現れてゐて、またとなく美しい。大膽なおせんの情事には、人間的な意氣地があり、拾鉢なおさんの情事には、運命の悲哀が籠つてゐる。何となく下品な感じのするおまんの情事すら、單に肉ばかりとは云はれまい。この點に於いて、『一代女』の戀と、『五人女』の戀との間には非常の徑庭があると云つていゝ。併し、この徑庭は、前後の兩作を發表する間に於いて、作者たる西鶴の戀愛に對する解釋に變化が起つたことを意味するものとして考へたらいゝであらうか。一見すると、『一代女』の西鶴は、戀愛即性慾の信者であり、『五人女』の西鶴は、戀愛非性慾の信者であるかのやうに考へられるが、私は決して思さうはない。彼は、徹頭徹尾戀愛即性慾の信者として一貫した。前者に於いては、その信條が露骨に現れ、後者に於いては、その信條が美しい假面を被つて現れただけのことで根本的には何の變化もない。お夏やお七やおまんが男に挑む態度、おさんが生命に執着する心持、それらの戀は、一として肉に根を卸さないものはない。作者が、お七の生立を叙して『其年十六迄男の色好でいまに定まる緣もなし。』と云ひ、おさんの述懷を語つて、『するゞ〳〵に何にならうともかまはしやるな。こちや是がすきには身に替ての脇心。』と云つてゐる點か

ら見ても、作者の戀愛に對する考へは分るであらう。いはゆる戀愛神聖教のコーランは、わが西鶴の嘗て一瞥だにしなかつたところであるらしい。

『一代女』と、『五人女』との二作を通じて見た作者の女性觀は、極端と云つていゝまでに物質的であり、本能的であり、享樂的であり、現世的である。彼等のすべては、自己の生活を築きあげる土臺として、いさゝかも精神なるものゝ存在を知らない。假にお七やお夏の戀愛が、索漠たる荒野の中に一點の微光を點じてゐるとしても、それは作者自身の信仰を裏書する憧憬の現れとは見られない。眞實の彼は、いつも仔細顏をして云ふ。『これを思ふに、女ほど淺ましく、心の變るものはなし。』

六　ワイニンゲルの女性觀

美しい戀愛の殿堂を土足のまゝに踏みにぢつたショーペンハウエルに對し、ワイニンゲルは、恰も女性に對する嫌惡の情を哲學的に基礎付けるために、わざ〳〵生れて來たやうな近

代思想家の一人である。

彼に從ふと、女性に於ける最も著しいタイプに母の型と娼婦の型とがある。現實に於けるすべての女は、この二つのタイプの何れかに屬するか、若しくは、この二つのタイプの何れをも具備してゐる。母としての女は、偏へに子供のことを考へるが、娼婦としての女は、ただ男のことを考へる、母としての女にとつて必要なものは、子供を與へて呉れる男であるが、娼婦としての女にとつて必要なものは、性慾の滿足を與へて呉れる男である。母としての女が貧婪で、墮劣で、且つ、貞節であるのは、子を得るといふ目的より外に他の男を顧る必要がないからであつて、娼婦としての女が奢侈で、浮華で、且つ、淫佚なのは、性慾の滿足を得るといふ目的の下に、多くの男によつて與へられる變化ある刺戟を欣ぶからである。母としての女は、子女の育養と、厨房の斡旋とに努めるがために、精神的に何等の要求を持たない凡庸な男に歡迎せられ、娼婦としての女は、洒落で、快活で、インテレクチュアルな才能を發揮するために、自我のあくなき發展を念とする天才的な男に愛せられる。何れの觀方を以てするも、女性は、到底あらゆるプラトー的なるものを理解し、あらゆる崇高な人間的努

力に參與する資格を持つたものとして考へられない。

ワイニンゲルによつて提供された二つのタイプの中で、その母の型に屬するものに就いては姑くこれを措くとしよう。殘るところの娼婦の型に就いてのみ考へると、女性の醜惡なる特質を剔抉することに於いて、私は、未だ嘗て彼が揮うたほどの鋭いメスの力を見たことがない。如何に苦々しい口吻を以て彼が叫んだか。『彼女は、たゞ饗宴や集會を求める。散歩や旅行を求める。海水浴場や保養地を求める。劇場や音樂を求める。そして斷へず新しい化粧具や寶石を求め、外に出て振撒くために金錢を求める。慰安よりも贅澤を、安靜よりも喧騒を求め、子女に圍繞されて安樂椅子に凭れるよりも、美しい肉體をひけらかして凱旋將軍のやうに世界中を練廻ることを求める。』と。彼が書き殘した一字一句を辿る時に、眞に死によつて購ひえた思想の偉大なる寂しさを感じるのは、獨り私ばかりではあるまい。

彼に從ふと、母としての女にとつては、單に目的を達するためにの手段に過ぎない性交が、娼婦としての女にとつては、唯一の究極目的である。唯一の究極目的であるが故に、この種の女の存在は懸つて性慾の上にあるとゝもに、この種の女の存在を支持する總ての本能は、

自己の性慾を滿足せしめるのに都合のいゝ狀態を作り出すことのために協力する。從つて、享樂としての性交を謳歌するが、性交によつて拂ふべき當然の負擔を嫌忌することが甚しい。多くの女の間に行はれる避姙は果して何を意味するか。母たらんとすることの要求が熾烈であり、性交に對する嗜好が稀薄であつたならば、此消極的な殺人の罪から彼等を救ひ出すことも、しかく至難ではあるまい。男性にあつても性慾は存在するが、娼婦としての女にあつては、性慾が女性を支配すると云つてもいゝ。此意味に於いて、先天的にドン・ジユアンたらんとする傾向は、男性よりも、寧ろ女性の方に烈しく現れるのである。

七　ワイニンゲルと西鶴

西鶴の殘した作品を見たものが、ワイニンゲルの思想に接すると、何人でも極端な暗合に驚愕するであらう。西鶴の描いた女性を哲學的に說明したものがワイニンゲルであり、ワイニンゲルの述べた思想を實際的に飜譯したものが西鶴である。最後の結論を受納する態度に

於いて、一方は飽くまで否定的であり、一方はある程度まで肯定的であるとしても、それは兩者の觀念的な一致を裏切ることにはならない。強ひて兩者の差違の擧げると、ワイニンゲルは、最も甚しい女性のタイプとして娼婦の型の外に母の型を認めたが、西鶴は、最も甚しい女性のタイプは娼婦の型の外に出でないと考へた。一方が二元的に見たところを、一方は一元的に見た。一方が種屬保存の性能と、本能滿足の欲求とを對立的に見たところを、一方は種屬保存の性能を、本能滿足の欲求に對して隷屬的に見た。これらの點を除くと、ワイニンゲルの穿いた靴は、ただちに西鶴の足に嵌るらしい。

ワイニンゲルに從ふと、女性は全身的に性慾的官覺が發達してゐるから、男性よりも速に且つ、容易に性の眼覺めに達し得るといふことであるが、西鶴の描いた女性は、一人として早熟でないものはない。『一代女』の主人公が初めて男を知つたのは十三の年である。お夏が清十郎を口説いたのは十六歳の春であり、お七が吉三郎と情を通じたのは十七歳の春である。少女としての彼等が、異性に對する關係を發展させてゆく態度は極めて大膽であつて、いささかたりとも行動の放逸を抑制する反省といふものが見出されない。『一代女』の主人公のギ

タ・セクスアリスは、この點に於いても決定的な斷案を與へてゐる。

如何なる場合にあつても、女性は常に性慾的であると長嘆したのはワイニンゲルであるが、西鶴の描いた女性は、上流社會であらうが、下層社會であらうが、黑人であらうが、素人であらうが、婆であらうが、娘であらうが、人の細君であらうが、獨りものであらうが、すべて娼婦であるといふ點に於いて一致してゐる。ある女には節操があり、ある女には節操がないといふことは、その所在を取りかこむ環境的條件の如何によるのであつて、本質的に何等かの差違があるわけではない。『一代女』や、『五人女』のやうな銘を打つたボルノグラフイは云ふまでもない。彼の殘した作品の總てに出て來る女性は殆んど例外なく私の觀察を確めるものと云つていい。『武家義理物語』や『武道傳來記』などに於いて、彼が如何に屢姦通を描いたかを注意せよ。道德を口にするのは、既に墓の骨頂であるが、彼の描いた女性には、世間並の義理人情すら備はつてゐない。生きるも肉、死ぬるも肉、ひたすら性の衝動に身を委ねて、刹那から刹那へと官覺の陶醉を追うてゆく。糜爛した生の姿は人の眼を蔽はしめるが、そこに活躍する人間には、深い悔恨や煩悶はない。長々しい告白を終つた後、一代女の

主人公は、『よし〳〵是れも懺悔に身の雲晴れて、心の月の清く春の夜の慰人、我れは一代女なれば、何にをか祕して益なし。』と云つた。これが果して本當の懺悔を意味するものであらうか。

西鶴に從ふと、先天的にドン・ジュアンたらんとする傾向は、男性よりも女性に多いといふワイニンゲルの說を否定すべき理由はない。社會的な制裁がなく、因襲的な拘束がなく、且つ、周圍の事情さへ許すならば、すべての女性は、相率ゐてドン・ジュアンとなり、相携へて娼婦となるに相違ない。崇高なる觀念に奉仕し、尊貴なる事業に身を委ねるのは、たゞ男のみ許された任務である。戀愛の聖殿に額づいて香を炷き、女の背後に赫はしい光輪を描いて讃唱の辭を捧げる詩人等は、到底西鶴とともに杯を擧げる勇氣は持たないであらう。

八　西鶴と近松

西鶴は野人であつた。精神的にも、學問的にも、あまり高い敎養を受けた男ではなかつた

らしい。持つて生れた器用で文を綴り、物語を書いたが、藝術の高貴な使命を自覺してゐたわけでもなければ、文學の徹底した技巧に就いて考へてゐたわけでもない。アーチストとしてよりも、むしろより多くアーチザンとして筆を執つた彼は、同じタイプの女性を描くにしても、『ナナ』の作者や、『サツフオ』の作者のやうに、醜いものを美しくしたり、淺薄なものを深刻にしたりする技術はなかつた。彼は、彼の眼前に展開された天和、貞享の時代相を仔細に觀察し、彼れ一流のリアリスチツクな態度を以て忠實な寫生を試みたに過ぎないから、彼の殘した作品が野卑で、露骨で、醜惡で、如何はしい文字に充ちてゐたからと云つて、半は時代の罪であると云つてよい。

この點に於いて、西鶴に對して最も鮮かな反襯をなすものは近松である。時代相の忠實な寫生を試みた點では、彼もまた西鶴の足迹を辿つた作家であるが、その態度に於いて、兩者の間には、參商も啻ならない隔たりがあつた。西鶴の骨の髓まで巢食ふものはリアリズムであり、近松の毛細管の末まで流れるものはアイデアリズムである。兩者の眼に映つたものは同一の事象であつたにしても、その事實を受け容れる心持の上には、兩者の態度を正反對の

方向に引すつてゆく相違があつた。從つて、男女間の情事を寫しても、西鶴の女性が肉の奴隷として現れるのに反し、近松の女性は精神の君主として現れる。『一代女』や『五人女』の中に出てくる女性と、近松の世話物の中に出て來る女性とを比較すると、到底日を同じうして語ることは出來ない。『森の門松』のお菊や、『天の網島』のおさんのやうな女は、嘗て一度も西鶴の頭腦に描き出されたことはないであらう。

西鶴は、肉の上に一つのエリシアムを築きあげた作家である。彼の思想の中には、根柢ある信仰も哲學もあるわけではないが、幾分傳統的支那の神仙思想が影響してゐたらしい。努力よりも無爲を、未來よりも現世を重んずる態度は、彼の作品の隨所に於いて散見するところである。かの『一代男』の主人公が、その最後に於いて未知の無何有鄕に向つて出發したといふことは、おのづから彼の思想が曝露したものであると思ふ。

近代文藝とデモクラシー

一　デモクラシーの語義

私は玆に近代文藝に現れた民本主義といふ問題に就いて幾分の考察を試みたいと思ふ。しかし、この問題に對する考察を進めてゆくためには、當然の順序として先づ民本主義（Democracy）といふ言葉の有つてゐる正しい概念から決定して蒐る必要がある。この意味に於いて、私をして姑らく甚だ不馴れな、且つ、甚だ不似合な學究的穿鑿に陷ることを許して頂きたい。

Democracy といふ言葉は最近の流行語である。否、單に流行語であるといふ以上の深い意味と、大きな力とを以て最近の思潮を支配してゐる言葉である。しかし、私の眼に觸れた限りに於いては、此言葉に就いての我國に於ける Terminology は貧弱だと云はなければならない。大した反省もなければ、また、大した顧慮もなくして、呑氣に民主主義とか民本主義とか譯してはゐるものの、一度び疑惑を挾んで來ると、果して何が Democracy なのか、

一向理解が出來なくなつて來るやうなことはあるまいか。

各個人が各個人特有の表現を持つてゐる樣に、各民族も各民族特有な表現を持つてゐる。所謂Democracy などといふ言葉も、今日に於ては最早其背後に隱れてゐる米國及び米國民を閑却しては全く考へられない樣になつてはゐないかと思ふ。この點に於て、Democracy といふ言葉が米國特有の意味を有つてゐることは、かの Kultur といふ言葉が獨逸特有の意味を持つてゐたり、かの Constitution といふ言葉が英國特有の意味を持つてゐたり、かの Liberté といふ言葉が佛蘭西特有の意味を持つてゐたりするのに等しい。しかし、私から言ふと、一體 Democracy といふ言葉は米國特有の言葉であつて、此言葉の發生的意義は、その最も完全な意味に於て、眞に米國及び米國民の存在を條件として初めて成立ちうるものであるかどうかといふことを疑はないわけにゆかない。

米國に於ける最大の Lexicographer ともいふべきウエブスターは、此 Democracy といふ言葉を定義して「民衆に依る政治。主權が人民の手にあり、且つ、民衆に依つて直接に主權を行使する政治上の形式」と云つてゐるが、かういふ意味の政治上の形式は、嘗て執政官

(Are on Eponymus) の下に、人民會 (Ecclesia) と稱する機關を持つてゐた古代の希臘にも存在してゐたではないか。『擊壤歌』や、『康衢謠』や、『南風歌』に依つて想像しえられる唐虞三代の世は勿論、書契以前、いはゆる結繩の政治に依つて四民太平を樂んでゐた支那の古代を見ると、後に孟子のやうな民本主義の思想家が生れたり、墨子のやうな人道主義の哲學者が現はれたといふことは決して偶然ではない。『國家』(The State) と題する著書を見ると、學者ウヰルソンは大統領ウヰルソンと等しく、盛んに民本主義一手販賣店の代辯者振りを發揮して、「今日自分等が口を開いて文明國の政治を談ずると、必ず輿論政治と云ひ、必ず庶民政治と云ふのを常とする。」などと云つてゐるが、卿等の誇りとする政治上の形式や精神やは、何も卿等の鄉土と、卿等の兄弟とに依つてのみ創り出されたものではない。民本主義の勿體なさを說き、民本主義の有難味を宣傳するウヰルソン氏の博辯宏辭が如何に善美を極めてゐようと、それは野蠻な古代の支那人が土を擊つて「日出而作。日入而息。鑿井而飮。耕田而食。帝力于我何有哉。」と歌つた壯快な民謠の前に何の優先を主張しうるものぞ！徒らに今日と云ふ勿れ。徒らに文明國と云ふ勿れ。眞に偉大なる精神は、反つて文化の未だ

發達しない、人智の未だ進歩しない古代に存するではないか。

言語學者の説明に據ると、Democracy といふ言葉は、希臘語の δημοκρατία といふ言葉に相當するさうである。さらに希臘語の δημοκρατία といふ言葉は、同じく希臘語の δῆμος (The People) といふ名詞と、κρατεῖν (to be strong or to rule) といふ動詞とから出來上つてゐるさうである。果して然りとすると、Democracy といふ言葉の原義には、People—to be strong といふ場合と、People—to rule といふ場合との二つがあると云はなければならない。私にとつては此事實が非常に面白い。

People—to rule といふ原義に依つて判斷すると、Democracy いふ言葉は、ウエブスターの云つたやうに當然「人民に依る政治」と解釋しなければならないわけである。併し、今一つの原理たる People—to be strong といふ原義に依つて判斷すると、Democracy といふ言葉は果して如何に解釋したらいいであらうか。兩者ともに同じ意味に採つて、前者は人民の政治に對する關係を形式的に説明するものであり、後者は人民の政治に對する關係を實質的に説明したものであると云つた風に解釋する方法もないではないが、それはどうも事實

の眞相を穿つた見方ではないやうな氣持がする。

若し、私一個の臆斷が許されるならば、希臘の原義から云ふと、Democracy といふ言葉は、元來二つの意味を持つてゐたのではあるまいか。即ち、一方では人民の生活に對する關係を政治的に規定した意味に於いて、今一方では人民の生活に對する理想を倫理的に規定した意味に於いて、結局は同一の精神に歸着するにしても、兎に角表面上では相關的に相通ずる二つの語義を含んだ言葉として通用してゐたのではあるまいか。——豫め斷つて置いたやうに、これは素より私一個の臆斷に過ぎない。しかし、Democracy といふ言葉の原理が包含する People—to rule と、People—to be strong といふ二つの語義を仔細に考へて見ると、私の推測は自然其點まで落ちてゆかなければ止まなくなつて來る。

正直に云ふと、私にとつて Democracy といふ言葉が多くの興味に値する所以は、それが People—to rule といふ意味の背後に、People—to be strong といふ意味を寓してゐるからである。從つて、私にとつて Democracy の本質的價値は、政治上の或形式たる「民衆に依る政治」そのものにあるものではなく、「民衆に依る政治」が、やがて道德的に民衆生活

の水準を高め、且つ、民衆生活の内容を強健にする點であるのだと云つていい。今日世界の人類が盛んに喚き立てゐる Democracy なるものも、かく考へることに依つて、始めて無限の味ひを生じて來るものである。

かうした見地からすると、Democracy なる外國語を日本語に譯して、苦もなく民主主義とか民本主義とか云つてゐるのは聊さか呑氣過ぎはしないであらうか。假りに是れらの譯語を比較的に妥當であるといふ意味の下に許容したにしても、是れらの譯語に依つて我國に移植された Democracy なる言葉の原義に對して正當な判斷を缺いてゐたならば、それは Democracy を單に形骸に依つてのみ理解することであつて、未だ精神に依つて理解することではない。現在の我國民が陷らうとしてゐる誤謬は全く此點にあると思ふ。

二　文藝上の民本主義

上述の意味に於いていはゆる民本主義なるものを解釋する時、吾人は果してかくのごとき

思想の藝術的表現を近代文藝の中に於いて發見することが出來るであらうかどうか。——玆に至つて、私は初めて私に與へられた問題の契點に接觸するのである。

私は先づ第一の意義、卽ち、People—to rule の意義に於いて文藝上の民本主義を考へて見たい。

卒直に云ふと、私の知る限りに於いては、近代文藝の如何なるものに於ても、私は未だ嘗てかくのごとき意味に於ける民本主義の藝術的表現を發見したことはない。若し People—to rule の意義に於ける民本主義を廣義に解釋して、單に政治上の變革を要求し、寡頭政治（Oligarchy）若しくは金力政治（Timocracy）に對する輿論政治若しくは民衆政治（ある意味に於ける Proletariat の專權）の合理的なる所以を暗示するものとすると、私はそれを十八世紀以後の露西亞文學に於いても發見することが出來よう。また、單に專制政府の暴橫に反抗し、いはゆる自由民權の大義を主張するものとすると、私はそれを十九世紀前期に於ける青年獨逸（Das Junge Deutschland）の詩人團、例へばハイネや、グッツコウやラウベなどの製作中にも發見することが出來よう。併し、これらの政治的意味を帶びた文學と雖も、

正しい意味に於ける民本主義の精神と相距ること太だ遠く、その思想的背景の或點に至つては、兩者全く相容れないほどの相反を見出すやうなことさへないではない。

眞正面から民本主義を解釋して、政治上に於ける民本主義の思想的宣傳を共儘文學の中に發見しようとするのは抑々間違つてゐる。かくのごとき文學は、後世に至つて再びリチャードソンのやうな文藝史家が現はれ、現世紀の Political Literature のために特に一章を設け、嘗てのパトリック・ヘンリーや、ジョン・ランドルフや、ダニエル・ウェブスターや、アブラハム・リンコルンなどの場合に於けると同じやうに、ブアイアンの演說や、ウイルソンの教書やを一々文學的形式として認めて呉れるやうなことがあれば兎に角、然らざる以上は到底不可能であるに相違ない。何故なれば、近代に於ける藝術的自覺は、文學を以て一つの方便と認め、これを政治的、或は社會的意味を帶びた實際的教義のプロパガンダとして用ひるほど、しかく墮落してはゐないからである。

果して然りとすれば、私は第一の意義、卽ち、People—to rule の意味を棄てゝ、第二の意義、卽ち、People—to be strong の意味に於いて文藝上の民本主義を考へて見るの外は

ない。

People—to be strong の意味に於いて文藝上の民本主義を考へると、私は先づ最初に宗教的情熱と、宗教的自覺とを以て民衆救濟の福音を宣傳しようとする文藝を擧げなければならないと思ふ。『藝術とは何ぞや』に於いてトルストイが力說したところの藝術は、正にかくのごとき意味を持つた藝術であつた。彼は云ふ。——

「全人類の間に普及さるべきものとして撰ばれた當來の藝術は、今日の場合に於けるがごとく、單に金持階級に屬する人間に依つてのみ親しまれやすき感情を傳達するものではなくて、我々の時代の最も高い宗教的覺醒を傳達するものであらねばならない。而してすべての人間を同胞的結合に導くべき感情を傳達し、且つ、さうした世界的感情がすべての人間を結び付けることの出來る場合に於いてのみ藝術として認められるのである。」

藝術上の貴族主義を擯け、いはゆる「藝術のための藝術」に代ふるに「人生のための藝術」を以てし、あらゆる民衆を結合するに基督教的精神の發現に依らうとする點に於いて、トルストイの藝術的信條は明かに民主主義であると云はなければならない。——便宜上、私は文

藝に於ける此種の民本主義を名づけて人道的民本主義と呼んで置く。

次ぎに People—to be strong の意味に於ける民本主義の文藝として私の擧ぐべきものは積極的に民衆の意義と精神とを高唱して、民衆の力強い自覺を以て藝術の生命を支配しようとするものである。此種の文藝にあつては、前者の場合に於けるがごとく、救濟的態度を以て民衆に臨まない。否、民衆的精神を以て世界を包括しようとする點に於いて、民衆自身が反つて救濟的態度を以て文藝に臨んでゐると云つてもいゝ。究極するところは結局同一であるにしても、前者の傾向が著しく現實否定的であるに對して、後者の傾向は著しく現實肯定的であり、前者の色彩が著しく厭世的であるのに對して、後者の色彩は著しく樂天的である。『藝術論』に於いて、「彼の同胞に對して彼の偉大なる感情を傳達するために、藝術家は彼の時代と民衆との中に於いて象徴を使用しなければならない。」と云つたのはエマーソンであるが、かうした態度を徹底的に押進めて、さらに彼の時代と民衆との精神に燃ゆるがごとき獨立的感情を吹き込まうとするところに、後の場合に於ける民本主義文藝の眞骨頂がある。從つて、此種の文藝には自由や、解放や、獨立に對する熾烈なる欣求や、自然や、本能や、健

康に對する力強き憧憬などとともに、個人性の發展に對する限りなき信頼がある。此點に於いて、後者を前者たる人道的民本主義と區別して、私は特に自然的民本主義と呼びたい。『民衆演劇論』に依つて理解するところに據ると、ロマン・ローランのいはゆる民衆藝術なるものは、私のいはゆる人道的民本主義と、私のいはゆる自然的民本主義との間を行つたものらしい。何故なれば、彼が「自分等は貧血性の藝術に活力を注入し、其枯痩した胸廓を肥大ならしめて、そこに民衆の力と健康とを吹き込まんと欲するのである。」といふ主張を見ると、彼のいはゆる民衆藝術なるものは、著しく私のいはゆる自然的民本主義の藝術なるものに酷似してゐるやうではあるが、同時に、彼が「自分等は人間的精神の光榮を民衆に奉仕せしめようとするのではなくて、むしろ自分等とともに民衆を人間的精神の光榮に奉仕せしめようとするのである。」といふ主張を見ると、彼のいはゆる民衆藝術なるものは、何となく私のいはゆる人道的民本主義の藝術なるものに似通つてゐるからである。彼がトルストイに於いて藝術家としての一つの典型を發見した一方に於いて、さらにミレーに於いて藝術家としての今一つの典型を發見したといふことは、はしなくも前記の事實を具體的に立證したもの

と云つていゝと思ふ。

文藝上の民本主義なるものに就いての概念の決定は、大體に於いて以上のごとくだといふの外はない。以下私の考察しようとするところは、上述の二つの意味に於ける民本主義が、いはゆる近代文藝に於いて如何に現はれてゐるかといふ事實上の問題である。便宜の點からして、私の考察は先づ人道的民本主義から始められなければならない。

三　ヴィクトル・ユーゴー

人も知るやうに、トルストイは大膽なる態度を以て過去のあらゆる藝術を否定し終つたのち、僅かに三四の作家に屬する作物を擧げて其藝術的存在を許容した。此三四の作家の中に在つて、彼がヴイクトル・ユーゴーと、ドストエウスキーとの名を擧げることを忘れなかつたといふことは、此際特に注意すべきことである。

今更多言を費すまでもなく、トルストイの藝術的理想たる人道的民本主義の立場から見て、

ユーゴーが深夜の散策から味ひ得た思想と、ドストエウスキーが切實なる體驗から學びえた精神ほど典型的なるものはあるまい。併し、此兩巨頭を擧げるトルストイの說に贊同すると同時に、我々は此巨頭と列を儕しうするに足りる今一人の巨頭があることを忘れてはならない。それは誰れであらうか。云ふまでもない、レオ・トルストイその人である。

公平なる見地から見て、此三人の作物、卽ち、ユーゴーと、ドストエウスキーと、トルストイとの作物は、近代に於ける一つの良心を體現するのだと云つていゝ。十九世紀前半の佛蘭西に於けるユーゴー、十九世紀の中頃から十九世紀の末期にかけての露西亞に於けるドストエウスキーとトルストイ、——これらの偉大なる三個の人物の存在が暗示する意味に就いて考へると、我々は如何に驚くべき多くの事實を見出すことであらう。近代に於ける人類生活の進步發展の裏面に潛んだ疾患を指摘した點に於いて、此三人者の手に依つて成つた診斷書ほど適確にして、且つ、深刻なものはないのである。

時代の點から云つても、思想の點から云つても、此三人者は互ひに Comrade と云つてもいゝやうな位置に立つてゐるが、その中にあつて、最も年長者として見るべきものはユーゴ

ーである。

ユーゴーの大作『ミゼラブル』が初めて巴里の書肆の店頭を飾つたのは千八百六十二年のことであつた。ゲルンセーの謫居に於いて、日夜セントサンブサンの描くがごとき海景を見ながら筆を執つた此作物の劈頭に序して、彼は次ぎのやうなことを云つてゐる。

「すべての問題は民衆の裡にある。飢ゑたるものや、貧しいものの裡にある。空氣の流通のわるい部屋に青白い顔をして働いてゐる勞働者や、裸足で町の舗道を歩んで行く子供等や、むさくるしい部屋に默念とうずくまつてゐる老人や、慘めな地獄に陷つてゐる娘達や、寒さに凍えようとするものや、飢ゑに泣かうとするものの裡に、何よりも重大な社會の問題がある。」

『ミゼラブル』に於いて彼が描き出さうとしたところは、取りも直さず、彼が嘗て『死刑囚最後の日』に於いて現はさうと試みたもの、及び、彼が嘗て『クロード・ギュー』に於いて解決しようと試みたものに對する具體的表現である。此點に於いて、彼は最後の運命に近づいた死刑囚の疑惑、「妻や娘達を饑餓から救はうとして、反つて妻や娘達を亡ぼした自分が惡

いのであらうか。それともまた自分を罪人にすることに依つて、妻や娘達を不幸にした法律が悪いのであらうか。」といふやうな問題や、同じく死刑を宣告せられた囚人が裁判長に對して與へた詰問・「自分は何故に人を殺したのであるか、自分は何故に他人の物を盜んだのであるか。」といふやうな問題に對して、最も明晰な解答を與へたものであると云つていい。『死刑囚最後の日』、『クロード・ギュー』及び『ミゼラブル』の三篇を透して、ユーゴーの人道的精神は燦然たる光輝を放つてゐる。彼は鋭い眼を以て現代生活の裏面と、現代生活の裏面に潜んでゐる怖るべき疾患とを見た。彼は實際的見地から文明なるものが果して如何なる意味を持つてゐるかといふことを見た。彼は現代生活の規律ある制度や、法律や、司法權や、牢獄や、强權やが果して如何に利用されてゐるかといふことを見た。彼は罪惡の根源と人性の本然とが果して如何なる關係に立つてゐるかといふことを見た。彼は自身の前に展がつてゐる現實を凝視する時、いさゝかたりとも廻避的態度を示さなかつた。彼はあくまで現實を直視した。現實を直視して、現實の表裏に纏絡する事實の眞相を看破した。

彼は社會と人生とに存する總ての不調和なり缺陷なりに對して、溫い心と、熱い涙とを持

ちうる人であつた。彼は不正を怒つた。不正に依つて醸された不公平を悪んだ。従つて、彼は一字一句の裡に血涙を封じて、社會と人生とに存する總ての不調和なり缺陥なりの原因たる不正と不公平とを描いた。『ミゼラブル』に於ける彼の筆が如何に感激に顫へてゐるかを見よ！　父母なくして巴里の町をさまよへる少女ファンチンヌの悲慘な運命を描いた一節を讀んで自ら滲み出る涙を覺えないものは、到底彼の文中に輝いてゐる氣高い靈感の光を見ることの出來ないものである。

併し、彼は此呪ふべき現實を救濟する手段として果して何を教へたか。

この點に至ると、遺憾ながら彼の態度は極めて空想的であると云はなければならない。何故なれば、彼は靈魂の救ひを以て社會に於ける不調和を除去しようとし、個人の人格的向上を以て人生に於ける現實的な缺陥を補塡しようと試みてゐたらしい。宛も大僧正ミリエルが二個の燭臺を以てジャンバルジャンの精神を購うたやうに、彼は宗教的救濟といふ美名に依つて、總ての不正不義を購はうとするのである『内部の聲』に於いて、「民衆よ。詩人に聽け。神聖なる夢に聽け。』と訓へた彼は、此場合に於いてもまた遂に神聖なる夢を説くに過ぎない

ものであらうか。

彼の批評家は、彼の藝術的特質を評して Pure Humanitarian Sentimentalism と云つた。彼の作品の底に流れてゐる弱々しい感情、彼の作品の背後に隱れてゐる涙に殉じやすい性癖、リアリスチツクな割合には力の弱い觀察、正義に對する敏感、道念の斷え間なき流出、——彼の作物に現はれてゐるさうした特徵に就いて考へて見ると、彼の評家のいはゆる Pure Humanitarian Sentimentalism も、要するに彼のロマンチツクな詩人的性格を指摘したものに過ぎないやうな氣持がする。言葉を換へて云ふと、如何なる場合に於いても、彼は咏嘆から脫却することが出來なかつた。咏嘆に依つて、人生を詩化することから脫却することが出來なかつた。彼の藝術的特質に存してゐた一つの弱點は、全く此事實に因緣するものではあるまいかと思ふ。

人も知るやうに、一面に於いて彼は現實的に活動した人であつた。彼の八十三年間に亘る長生涯は、藝術家としての生涯であるとともに、志士としての生涯でもあつた。かやうに外面的には二重生活を送つてゐたに關らず、內面的には全く一元的に統整された生活を送つて

ゐた。玆にも亦彼の藝術的特質を說明するに足る一つの事實が存してゐるのである。

四　三者の比較

ドストエウスキーの代表作『罪と罰』が出版されたのは、ユーゴーの『ミゼラブル』の上梓に後るゝこと四年、トルストイの『戰爭と平和』の完結に先立つこと三年である。殆んど時を同じうして、北歐と西歐とにかくのごとき大文學が頻出したことは、慥かに世界文藝史上の偉觀であると云つていゝ。

此二人に就いては我々はすでに餘り多くを語り、且つ、あまり多くを聞かされてゐる。從つて、私は玆に更めて彼等の文藝が有する個々の思想的背景に就いて物語るの煩を避け、ユーゴーと、ドストエウスキーと、トルストイとの三者を通じて發揮されてゐる人道的民本主義の異同に就いて少しく思ふところを述べて見たい。

その思想的背景に於いて、ドストエウスキーと、トルストイとの何れがユーゴーに近いか

と云ふと、私は言下にドストエウスキーを擧げるであらう。ドストエウスキーの精神と靈魂とを露はしてゐる血液は、慥かにユーゴーの精神と靈魂とをも露はしてゐるに相違ない。『虐げられたる人々』を讀んで、ペテルスブルグの陰鬱な空の下に、如何に多くの罪惡や、虚僞や、貧窮や、饑餓や、不正や、不義や、姦淫や、醜惡やが潜んでゐるかといふことに就いてのドストエウスキーの警告を見た眼を以て、更に『ミゼラブル』の中に描かれた現代生活の壯大的展開の中に潜んでゐるユーゴーの警告に接すると、私は此兩者が如何に涙に濡れた眼の裡に、哀愁の光を包んで現實の社會と人生とに對してゐるかを知ることが出來る。彼等はともに人間の苦痛に對して頭を下げた。彼等はともに人間の靈魂の一隅に巢を喰うてゐる神性の火花を認めた。彼等はともに神を畏れる心と心との犧牲的な抱愛を信じた。——ドストエウスキーが基督の使徒として自分等の前に立つてゐる意味に於いては、ユーゴーもまた立派な基督の使徒として自分等の前に立つてゐるのである。

彼等と雖も其性格の根抵に潜んでゐる氣稟の相違は如何ともすることが出來ない。ドストエウスキーが悲哀に充ちた冷靜を以て Pander を寫してゐる時に、ユーゴーは醜い醫面を作

つて Gaminghouse を描いてゐる。後者が詩人の咏嘆を以て現實の醜惡に對してゐる時、前者は宗教家の瞑想を以て人生の暗黑面に對してゐる。併し、究極に於いて彼等が見出すもの、究極に於いて彼等が感得するものには何の相違もない。彼等は常に同じところに同じものを發見し、同じ場合に同じものを感じてゐる。この點に於いて、私は嘗てブランデスがドストエウスキーに就いて云つた言葉を忘れるわけにはゆかない。彼は云ふ。——

「ドストエウスキーの作品に現れてゐる道德的には何等非難することの出來ない墮落した女は、實在の人物といふよりも、われわれに對してはむしろユーゴーの描いた人間的な相對物を想ひ起させる。」

また彼は云ふ。——

「ドストエウスキーが佛蘭西人から貰つたものは藝術上の話し方ではなかつた。彼が彼等から自分の身に受け容れたものは Humanity の理想、即ち、ルイ・ブランや、晩年のユーゴーなどに似通つた國民的見解のそれである。」

この點に於いて、私は直ちにドストエウスキーをユーゴーの弟であると言ひ切ることの不

安を感じないわけにはゆかない。併し、それと同時に、彼とユーゴーとの間に存してゐる極めて緊密な精神的連鎖に就いても、私は何人が敢て否定の辭を陳ねることが出來ようぞと云ひたい。

此の二人者に比較すると、トルストイはより多く豫言者の俤を持つてゐる。彼の落凹んだ眼や、異樣に輝く瞳や、髭むしやの顏や、廣い肩幅や、不格好な鼻や、醜い顎は、彼は尊い血を享けたスラヴの藝術家であるといふよりも、むしろ駱駝の毛衣を着、腰に皮の帶を卷いたスキシアの豫言者であると云つた方が適切であることを思はせる。

トルストイにはユーゴーに於けるがごとき詩人的咏嘆もない。ドストエウスキーに於けるがごとき宗教的瞑想もない。彼にあるものは滿身の昂奮と感激とである。從つて、前二者が熱涙を以て見るものを、彼は動もすると怒りを以て見た。彼は野の嵐のやうに叫ぶ。彼は海洋の狂瀾のやうに怒號する。十五世紀の昔、フロレンスのサン・マルコの敎壇に於いてサヴォナロラが絶叫したところを、五百年後の今日、北歐の曠野に於いて繰返したものはトルストイである。その本質に於いて、彼が現代の救濟として提唱したものも畢竟虛榮の燒却に外

ならない。

彼は理想を具體化しようとする熱烈なる信仰を持つてゐた。併し、その信仰を裏書する彼の教養は極めて高遠なる空想に過ぎなかつた。彼は深い理解と、深い同情とに赴くべき鋭い洞察を持つてゐた。併し、その洞察を生かしてゆく彼の感情は極めて紛糾した矛盾に充ちてゐた。彼の沈鬱な容貌と、粗野な風采とが如何に花やかな、如何に混濁した過去の體驗を包んでゐるかといふことを考へると、彼の一身に依つて示された教訓は、現代生活そのものゝ兩面に潜んでゐる欣びと惱みとの撞着を示唆するものではなかつたか。

近代の科學を理解する能力を缺き、近代の人間生活に存する不調和や不合理の經濟的原因を洞察することの出來なかつた點に於いては、ユーゴーも、ドストエウスキーも、トルストイとともに非難を受けなければならない。此點に於いて彼等は餘りに人間の心のみを見過ぎた。心のリアリチーのみを見過ぎて、人間生活のリアリチーを見ることが出來なかつた。『ミゼラブル』を見よ。『虐げられたる人々』を見よ。『復活』を見よ。彼等は現代の生活を描くに直ちに Revoner として描いてゐる。併し、現代の生活が何故に Revoner としての墮落に

達してゐるか、その實際の動因を描いてゐない。彼等が說くところは唯だ魂の救濟である、たゞ愛の福音である。その教說が愈々高遠になればなるほど、そのエフエクトは愈々心細くなつてゆくばかりである。

惟ふに、キリストの復活を以て現代を救はうとするのは、猶ほ木に緣つて魚を求めるがごときものであらう。現代生活の裏面に潜んでゐる根深い疾患を救治するためには、最早さうした理想の膏藥は何の役にも立たない。現代と、現代の民衆とが求めてゐるものは、一にも事實、二にも事實である。事實に立脚しない解決は、たゞ理論上の解決であるに留まつて、到底實際上の解決たりうる力はない。

私は人道的民本主義の莊嚴と、高遠と、深遠とを疑ふものではない。また私は人道的民本主義の中に生きてゐる偉大なる精神と、崇高なる信仰とに盲目なものではない。併し、あくまで私の疑ひとするところは、彼等が眞に民衆の力強い自覺を呼び起し、眞に民衆の幸福と救濟とに貢獻しうる力がありうるだらうかといふことである。

五　ワルト・ホイットマン

「私はあなたの『草の葉』と題する驚くべき贈物の持つてゐる値打を認めないわけにはゆきません。あなたの書物は米國が今までに貢獻し得たものの中で最も卓越した靈知と聰明との産物であります……。私はあなたの自由な、勇敢な思想に對して欣びを送り、且つ、私自身も其中に欣びを感じます。私は到底比較しがたい事物が、彼等のあらねばならぬまゝに、到底比較しがたいほどの巧みさを以て表現されてゐるのを發見します。」

千八百五十五年の夏に出版された僅か九十四頁の Quarto が、當時敵かき緣に包まれたコンコルドの幽棲に蟄居して、出來るだけ喧騷と饒舌とから遠ざかつてゐたエマーソンの物靜かな生活を驚かしたといふことは、極めて興味の深いことと云はなければならない。

さらに言葉を繼いでエマーソンは言つた。

「私はあなたの偉大なる生涯の始めに於いてあなたを祝福します。さうした出發には何處

かに必ず長い前景があつたに相違ありません。私は此太陽の光が若しや幻想ではあるまいかと思つて、私自身の眼を強く擦つて見ました。併し、儼乎とした意義を以て、此書物は私に鞏固な確證を與へます。」

十九世紀の中葉に於けるワルト・ホイツトマンの出現がエマーソンにとつて一つの驚異であつたと同じ程度に於いては、今日の我々にとつても猶ほ一つの驚異たるを失はない。——敢て私は問ふ。今日までに唯だ一人でもホイツトマンのやうに強健なる態度と、ホイツトマンのやうな雄偉なる格調とを以て、獨立の精神や、平等の理想や、自由の感情やを高唱したものがあつたかと。

なるほど十八世紀の末期から十九世紀の初頭にかけての世界の思想界を震撼したロマンチシズムの潮流は、あらゆる國家の、あらゆる文藝に對して、精神の解放と、思想の自由とを致へたかも知れない。中にも英文壇に於けるロマンチストの一群、例へばバーンスや、バイロンや、シエレーなどの詩中に於いて發見する Liberation に對する熱叫は、これを或意味に於ける民本主義と見て差支へはあるまい。——"My heart's in the Highland" と歌つ

た農民詩人バーンスの自然に對する憧憬や、"Prometheus Unbound" に於いて解放された自我の强號を示したシエレーは云ふまでもない。伊太利の志士マジニーをして「平民主義が彼に負ふところが如何に大であるかを必ず思ひ起すの日が來るに相違ない。」と云はしめたバイロンは、現にゼノアに於いてレイ・ハントとともに『自由』と題する雜誌を發刊したではないか。

併し、要するに彼等は反動の人である。彼等の民本主義は毫も彼等の民衆としての自覺に根差してゐない。彼等は男性的な友誼に依つて階級と國家との間に存する障壁を除かうとしてゐない。彼等は民衆の健全な感情と、民衆に奉仕する正しい同情とを持つてゐない。彼等は熱情を以て同時代人等と結び付かうとする敬虔さを持つてゐない。彼等は矢張象牙の塔に立籠つて、塵埃と、煤煙とに包まれた街頭に立たうとする誠實を持つてゐない。彼等の云ふところは唯だ呪咀である。唯だ不平である。唯だ憤怒である。男らしく現世を肯定して、地上に劃する愛と眞理との自由を築き上げようとするのは彼等の任とするところでない。

此點に於いて、十九世紀の中葉に於けるホイツトマンの出現は、一つの驚異でなくして何

であらう！

私から云ふと、ホイツトマンの偉大なる民本主義は純正なる自然感情から生れてゐる。宛もバーンスの自然に對する情熱が、彼をして草木禽獸の末に至るまで "O, my fellowmortal!" といふ呼びかけでなさしめたやうに、ホイツトマンの自然に對する信愛は、彼をして飽くまで manly love of comrades を強調せしめたのである。

離々として生えてゐる草よ、その別々に呼吸してゐる匂ひよ、

私はそこに精神的な通信を見た、

宛も人と人との親愛な友誼を要求するかのやうに。

かうした意味から云ふと、或點に於いてホイツトマンはエマーソンの精神的遺産の相續者だと云つていゝかも知れない。否、單に精神的遺産の相續者といふのは當らない。エマーソンの精神的遺産を相續して、さらに　遺産に對する新しい價値と意義とを附加した有爲なる後繼者と云ふのを至當とするであらう。

『草の葉』の上梓に先立つこと十九年、千八百三十六年の秋『自然論』一篇を携へて文壇へ

の Debut を試みたエマーソンは、果して如何なる言葉を以て彼の超絶哲學の第一歩を踏み出したか。彼は云ふ。——

『太陽は今日も亦輝いてゐる。野には愈々綿羊が繁殖し、愈々麻が茂つてゐる。そこには新らしい土地がある。新らしい人がある。新らしい思想がある。希くば我々をして我々自身の事業、我々自身の法則、我々自身の信仰を要求せしめよ。』

また彼は云ふ。——

『平原に佇立すると、私の歌は爽かな空氣に洗はれ、限りなき空間に持ち上げられ、——すべての卑しいイゴイズムは消滅して終ふ。私自身は玲瓏曇りなき眼球となり、虚無となり、萬象を見、普遍的實在の流れは私を通じて流れ、私は神の一部分若しくは一分子となるのである。』

さらにまた彼は云ふ。——

『私に健康と一日とを與へよ。さすれば私は帝王の驕奢をも一笑に附するであらう。』

偉大なる先蹤の精神の中に生きて、より力強き思想と、より剛健なる信仰との許に新ら

しい民衆の福音を說いたホイツトマンのことを思ふと、私は再びかのアブラハム・リンコルンの驚嘆を繰返さないわけにはゆかない。

"Well, he looks like a man!"

六　ホイットマンの心の弟子

多くの文藝批評家はホイツトマンの詩を生んだ母胎を論じて、直ちに彼等のいはゆる「新らしい大陸」、「年少なる國家」、「未開の領土」、「歴史なき國民」、「自由なる民族」を說かうとする。全然首肯すべき見解であると云はねばならない。

私は亞米利加の歌うてゐるのを聞く。私はいろ〳〵の頌歌を聞く。

機械工等は各々それが愉快で、強くあらねばならないやうに彼の唄を歌ふ。

大工は板や梁を量る時に歌ふ。

……

朝の路上、正午の休憩、又は夕暮に於ける木樵の唄、野を耕す子供の歌、母親のやさしい歌、或は仕事にいそしむ若妻の唄、或は又裁縫や洗濯をする少女の唄。何れも彼の唄、或は彼女の唄、何人にも屬さない彼自身の唄。

その日その日に、——夜は、若者の群れが力強く、且つ、親しげに、大きな口を開けて彼等の強い韻律を持つた唄を歌ふ。

彼自身のComradesと等しく、彼もまた大きな口を開けて、彼の唄を力強い韻律を以て歌ふのではないか。彼は慥かに亞米利加とともに歌つてゐる。徹頭徹尾彼は亞米利加の詩人である。彼の詩の中には亞米利加の若さと、希望と、健康と、樂天と、未來と、力とが籠つてゐる。彼の民衆愛は、彼の博大なる民衆に對する愛着は、三百年以前處女林を切り開いて母國から移住した清敎徒の精神の中から發してゐる。亞米利加を理解せずしては、到底彼を理解することは出來ない。

彼の自然的民本主義は、大膽なる現實の肯定から出發してゐる。彼には呪咀もない、懷疑もない、悲歎もない、憤怒もない、孤疑もない、廻避もない。彼は唯だ力強く自己を主張し

て限りなき未來に永遠と握手しようとする。彼には勿論顧るべき過去はない。況んや否定すべき現在があらう筈はない。常に滿足と勝利とに充ちた心持を以て、彼はひたすら未知の世界への躍進を續けて行く。彼の偉大なる自然感情は、この靈の躍進の中に宿つてゐる。

彼に從ふと、人生と自然とは全く同一のものである。文明と雖も單に自然の統御に過ぎない。彼は山に樹木の生ゆるがごとく、野に千草の茂るがごとく、地に人類の增殖するごとく、あらゆる可能性の發展を祝福する。宗教も、科學も、藝術も、この可能性の發展のために、總べて實在の聖殿に奉仕するより外に意味はない。「地球の天に麗れることを疑ふことは出來ないやうに、地球上のすべてのものは同一の精神的結果に向つて走つてゆく。」——彼の民本主義は、すべてのものの差別を撤して、すべてのものを宇宙の永遠不易なる秩序の中に見出さうとし、且つ、完全なる靈と肉との抱擁の中に、すべてのものゝ不滅の意義を鑛刻しようとするところにある。

自然的民本主義のチャムピョンとして、ホイツトマンの心の弟子としてエドワード・カーペンターを見出したといふことは、さらに一段の興味に値する。

私の幻想には今小さな、見すぼらしい小屋が浮んで來る。それは道化役者の帽子を思はせるやうな三稜形の藁屋根と、板貼りの壁と、自然生の荊棘を折り曲げて作つた垣根とから成つてゐる。その單純さと素撲さとは、私をしてどうしても其處に住んでゐる人間が猿猴族に近いニューギニアの土民か、若しくは、頭に鳥の羽根を飾つた西印度の蠻族かであるに相違ないといふやうな想像を抱かせないでは止まない。併し、私達は此小屋の中で、或は此小屋に近い野や森の中で、千八百八十一年の春から冬にかけて、或は終日、或は徹宵、雨の降る日も、風の吹く日も、霜の降りた晨も、雪の降る夕も、灰色の沈鬱な空の下にも、きらびやかに照り輝く日の下にも、殆んど毎日のやうに一部の貴重なる書物が書かれたといふことを忘れてはならない。

カーペンターが我々に與へた新らしい民衆の福音書『民本主義の方へ』(Towards Democracy)は、全くかうした意味深い背景の下に生れたのである。

彼は云ふ。「ホイツトマンの偉大に較べると、自分のごときは太陽の前の月光に過ぎない。」と。げに月は太陽に依つて光を持つ。若しホイツトマンがゐなかつたならば、我々は終にカ

ーペンターの存在に心付かずして過ぎたかも知れない。すべての意味に於いて、彼は最も忠實なるホイツトマンの弟子である。ホイツトマンの詩中に生きてゐた精神、ホイツトマンの詩中に宿つてゐた思想は、何等の省略なくして彼の詩中に再生してゐる。「七年の長い間、私はホイツトマンの詩集 "Leaves of Grass" を幾度となく繰返して讀んだ。」と云つた彼は、彼の細胞を通じて、彼の血管を通じて、ホイツトマンの詩が與へる總ての靈感を吸收したに相違ない。

民衆のたゞ一人の裡に、また、男女のただ一つの靈魂の裡に、彼自身を知らしめる時、そこに Democracy は始めて存在す。

彼は烈しく國家と國會との民本主義を否定した。彼の民本主義は大地と民衆とに接觸して、力強き生活の肯定の中に、永遠の歡喜を見出さうとするところにある。彼は新鮮な大氣の流動に對して心戰く、彼は自然の深い呼吸に對して激動を感じる。この自然と大氣とに擴充する自主（Self）の精神を驅御して、遍ねく天を廻るもの、遍ねく地に擴がるもの、汎愛の裡に靈の釋放を求めようとする。

美しき朝。手に大いなる手帚を持ちて田園を彼方此方と行き返る彼。左右の一歩ごとに播き散らさるゝ穀粒の輝く急雨のごとき飛揚。太陽と地球とを友にして、蔦色の腕、蔦色の顔、輝く眼、農丈な靴、――疲労を知らぬ播種者の終日の播種。

こはこれ程なく無數の人々の口に入るべき糧なるを知らずや。

神を畏るゝものゝ敬虔と、従順と、勤勉とを以て描かれたミレーの『種を蒔く人』が、カーペンターに依つて如何に快活に、如何に強健に、如何に潑溂に描かれてゐるか。――彼の宗教は悲哀の裡にはない。

彼の自然的民本主義は一種の宇宙的情緒の流露である。見渡すかぎりの廣々とした地平の上に、あらゆる限界、あらゆる鐵柵、あらゆる柱梧、あらゆる階級を撤し去つて、唯だあるがまゝの自主（Self）をして靈の王國に奉仕せしめようとする。茲に彼のいはゆる「内から外へ、暗昧から明晰へ、情緒から實行へ、夢幻から現實へ」赴く創造的過程があり、且つ、實在に合致する自我の躍進があるのである。

（ここで私はホイットマンの今一人の心の弟子勞働詩人トラウベルに就いて一言すべきであらう。併し、私に許されたる紙數は、最早彼及び彼の製作にまで言及するの餘地を與へない。遺憾ながら後日の機會に讓ることゝする。）

七　北方と南方

以上に於いて私の近代文藝に現はれた民本主義の二つの現はれ、卽ち、人道的民本主義と、自然的民本主義とに對する極めて大雜把な鳥瞰的觀察は終つた。併し、愈々筆を擱くに當つて、私は今一言附け加へて置きたいことがある。

それは外でもない。一つの民本主義たる人道的民本主義が最も酷烈なる專政政治の下に生れ、今一つの民本主義たる自然的民本主義が最も噪狂なる平民政治の下に榮えたといふことである。此の事實は我々に對して果して如何なる意味を囁くであらうか。

ドストエウスキーやトルストイの思想的鄕土たる露國、ホイツトマンやトラウベルの藝術

的母胎たる米國。——此二つの極端なる反襯の中には、幾多の興味多き事實が藏せられてゐる。北方の憂愁を見よ。北方の陰鬱なる空の下に醸されてゐる懷疑と、厭世と、否定との惱みを見た眼を以て、さらに南方の歡喜を見よ。南方の爽かな平野の上に漲つてゐる明るい靜謐と、力强い肯定と、生々とした躍動とを見よ。

すべてのものは地から生れる。思想も、宗教も、藝術も、地から、土から生れる。何人か敢て此大事實を否定しようとするものぞ！

白樺派雜感

1 "La Pléiade"

フランスの文學史に興味を有する人は誰れでも知つてゐることであるが、今から凡そ三百六七十年前、卽ち十六世紀の中頃、フランス文壇に"La Pléiade"と稱する文學者の一團體が起つて、當時の王朝文學に反抗し、盛んにフランス語の改良發達を主張したことがある。その"La Pléiade"と稱する團體は總數七人で、首領はかの有名なピエル・ロンサールであつたが、彼等の主張は果して當時のフランス文壇に非常な影響を與へ、爾後殆んど二世紀に垂んとする間、フランス文學の思潮を支配する事が出來た。この意味に於て"La Pléiade"の團隊運動は、フランス文學史上に於ける劃期的事件として、多くの文學史家から重視せられてゐる。

いふまでもなく、"La Pléiade"といふのは昴宿を意味してゐるのであるが、その團體員の數が偶々七人であつたのと、昴宿の性質が一種の指導的意味を包含してゐるところから、

彼等は自ら自分等の團隊に命名して"La Pléiade"と云つたのだといふ。

首領のピエル・ロンサールといふ男は華かな中年と淋しい晩年とを持つた詩人であつて、新しい詩にクラシツクの様式を與へた人だといふことである。併し、それはシエーレルなどの言つてゐることで、筆者自身には何にも分らない。

二　『昴』の出現

それに就いて想ひ起すことは明治四十二年の一月一日から發行された我國の『昴』のことである。あの雜誌は慥か舊新詩社の年少文學者、例へば木下杢太郎、石川啄木、長田秀雄、吉井勇、北原白秋などの諸氏が故平出修氏を盟主とし、森鷗外さんを賓客として成立した文學上の結社であつたが、あの團隊名たる『昴』といふ名は、恐らくフランスのそれから失敬したものであつて、それらの團體員諸氏が自ら期するところも、また"La Pléiade"のそれに劣らないほどの劃期的運動をわが文壇に惹き起さうとするところにあつたであらう。

今日から考へて見ても、なるほど雑誌『昴』の存在は大いに有意義であつた。すこし誇張して云へば、年少の才人雲のごとくにして、その華々しい活躍振りは殆んど一世を風靡するの概がなきにしもあらずであつた。併し、自分をして無遠慮に言はしめると、その團體員中に才人雲のごとくであつたに關らず、雑誌そのものゝ文學史的に有する意義はしかく重大なものではなかつたやうに思ふ。言葉を換へて云ふと、雑誌『昴』の存在が大いに有意義であつたのは、其團體員中から多數の有爲な文人を輩出したからであつて、かの "La Pléiade" に於けるが如く、何も結社そのものゝ有する意義が重大であつたのではない。もつと突込んで云ふと、"La Pléiade" は鮮明なる旗幟を翻して一種のムーヴメントを意味するものであるが、雑誌『昴』の有する團體に、團體それ自身にさうした特種の意味がない。或は恐る、皮肉なる後世の文學史家は、雑誌『昴』の勳績を記して鷗外さんの「復活」に資した事實を擧げ、反つて年少才人諸氏の輩出に言ひ及ぼすことの少くはなからうかといふことを。

それに較べると、雑誌『白樺』のわが文學史上に有する意義は "La Pléiade" それのに比して、しかく甚しい遜色はあるまいと思ふ。

三　過去の追憶

自分の記憶は或は誤まつてゐるかも知れないが、雜誌『白樺』の生れたのは慥か七年ばかり前であつたと思ふ。

その頃自分は岡山の高等學校にゐた。學校には殆んど出席せずに、毎日下宿に籠つて本ばかり讀んでゐた。哲學の本を讀めば、宗教の本も讀む。戲曲も讀めば小說も讀むといふわけで、その頃でも自分が幼い頃からの癇疾たる亂讀の癖は止まなかつた。その證據には一方にダヌンチオの小說を讀んで感心するかと思ふと、一方には水滸傳を讀んで金聖歎の批評に隨喜するといふわけで、讀書そのものゝ方針には何等の定見も持つてゐなかつた。——情史の中から材料を引き出して、シュニツツレル風の情話を書いたらなどと思つたのも、よく考へて見ると、恰度その頃のことである。

さういふわけであるから、月々東京から來る雜誌も出來るだけ澤山讀んだ。殊に新しい雜誌

が發刊されると、必ずその一號だけは買つて讀んだ。——さういふ事情の下に、自分は『白樺』第一卷第一號からの讀者であつた。

四　『白樺』の出現

『白樺』は非常に自分を喜ばした。

第一に氣に入つたのは體裁である。一口に云つて終へば清新な感じに充ちてゐた。挿繪も氣に入つた。第一號には慥かクリンゲルの "An die Schoenheit" と題する Radierung があつた。それが特に氣に入つた。その後フオーゲラーの繪が出た。フオーゲラーの持つてゐるリリシズムが、甘美でありながら繊弱でないのが、當時の自分の心持にぴつたりと合つた。

第一號の讀みものには『それから』に就いて書いた武者小路氏の批評と、『網走まで』と題する志賀氏の小說とがあつた。二つながら自分の頭にいゝ印象を殘した。

その後の自分は勢ひ『白樺』の忠實なる讀者とならざるをえなかつた。——やがてゴツホを

教へられた。ゴーガンを教へられた。ロダンを教へられた。自分は正直に白状する。是等の新しい美術家を知るの喜びをえたのは、全く『白樺』諸同人のお蔭である。その點に就いては、自分はあくまで感謝の念を忘れない。

五　文壇の輕薄性

『白樺』はその正當なる位置を認められるために、あまり多數の日子を要した。今日武者小路氏でなければいけぬと云ひ、志賀氏、里見氏、若しくは有島氏でなければいけぬといふ連中が、今から二三年前までは果してどんなことを云つてゐたらう。

「輕薄」といふ字は文壇の字引にもある。教へられるだけのものは教へられ、聞くだけのものを聞いて、然る後更つて「さて」といふ。「成程畫の紹介などは隨分有益であるが、併し、彼等が書くものは幼稚である。彼等はお坊ちやんだから駄目だ。」——さう云つて空嘯いてゐた連中は今日何のざまである。一人でも白樺派の暗示にかゝらぬものがあるか。

六　白樺派の意義

雜誌『白樺』は多數の卓れた作家を出した。その點に於いては毫も『昴』に讓らない。併し、昴の出した作家が文壇に與へた影響と、『白樺』が出した作家が文壇に與へた影響とを比較して見ると、それは必ずしも同じではない。

文學史的に云ふと、『白樺』はすくなくとも一種のムーヴメントを代表してゐた。從つて昴派といふ語彙が單に或種の雜駁なる概念を與へるときに、白樺派といふ言葉は常に或種の統一した概念を與へる。若し、昴派の團體的意義を Cooperation といふ字で云ひ表すとすれば、白樺派のそれは Organization といふ字で云ひ現はすことが出來よう。昴派の結合は形式的である。これに反して、白樺派の結合はある程度まで本質的である。この意味に於いて自分はわが文學史上に有する白樺派の地位を、フランス文學史上に有する "La Pléiade" の地位と比較することの、必ずしも不倫でないのを信ずる。

七　清新派の空想家

自分はこれまで幾度となく白樺派の作家及び作品に就いて云つた。それを今茲に三度し四度するだけの根氣はない。從つて、自分の云ふことは動もするとChatになりがちだらう。

今から四年ほど前の十月下旬、自分はある用務を帶びて北海道に行つた。途中津輕海峽の暗碧な海を見、駒ケ嶽の壯大な景色を見て札幌に着いた時は、肌に粟立する程の寒さを感じた。淋しいアカシアの街樹道の傍らに玉蜀黍を燒く匂ひを嗅いだ時は、自分の頭に不圖薄倖な詩人啄木の「しんとして幅廣き街の秋の夜の玉蜀黍の燒くるにほひよ」といふ哀調を思ひ浮べた。

その時のことであつた。札幌行きの汽車中に於いて、自分は不圖した機會から札幌農科大學の一豫科生と相識になつた。彼は種々なことを話した。牧場の話などもした。殊に高原の牧場に就いて話した。霧のやうな雨が降つて、足許の草がしつとりと濕つた朝など、牧場の木柵に凭れて、ぢつと遠方で歌つてゐるピュコリクの聲を聞くなど實に詩的ぢやないかと言

つた。——自分がある農大豫科の一教師に就いて聞いたのは、この愛すべき清新派の空想家からであつた。

彼の語るところに據ると、その農大豫科の一教師は非常に頭のいゝ人であつた。教へてゐる英語もよく出來た。教室では課業の話などの外に時々文學の話をするが、其が非常に面白い。奥さんとは仲が善くて、時々一緒に豊平川の潜など散歩する。表面の擧措はかなり謙抑であるが、内面は隨分自信家だ。——といふのである。自分は何となくその一教師に心を惹かれた。そこでその教師の名を聞いた。

其時自分が彼から聞きえた固有名詞は、果然『ある女のグリンプス』の作者の名であつた。

八　有島氏の作品

以上の追憶は何も『有島武郎論』に入るための前提として書いたものではない。併し、有島氏に就いて何か云はうとすると、勢ひさうした追憶が浮んで來る。その追憶を追憶として

書いただけのものである。

正直に白状すると、自分は有島氏の書かれたものをさう澤山讀んでゐない。『ある女のグリンプス』は大抵目を通したが、あの頃、『白樺』に載つたものでは一番印象が强かつた。最近に至つて讀んだものでは、いろ〳〵の瑕瑾もあるに相違ないが、矢張『カインの末裔』が面白かつた。有島氏の作には「把握」の點に危さはないが、その「把握」されたるもの>「配列」の點に難がある。言葉を換へて云ふと、製作の上の Betonung が足りない。從つて、調子は高いが、單調である。——尤も、この批評は極めて少數の作品を讀んだ後の感想であるから、以て氏の全般を蔽ひうる批評であるか否やは保證の限りでない。若し誤まつてゐたら謹んで氏の前に謝罪する。

今一つ附け加へて云ふと、自分の交遊の範圍に於て、比較的年少の文人中長者の風格を帶びた唯一の人として安倍能成氏を知つてゐるが、自分は何となく有島武郎氏もさうした風格を有する人ではないかと思ふ。『クロポトキン訪問記』や、『ミレー禮讃』などゝいふ風なものを讀んで見ても、何處となく臭床しい「老成」が潜んでゐる。

九　長與氏の『項羽と劉邦』

『項羽と劉邦』を讀んでゐる時に感じたことであるが、作者たる長與氏は項羽を書く點に於いて常に成功してゐながら、劉邦を書く點に於いて多く失敗してゐた。それが自分には非常に面白かつた。

秀吉を書くのは、或は家康を書くよりたやすいかも知れない。ナポレオンを書くのは、或はタレーランを書くよりたやすいかも知れない、これは家康やタレーランの方が、秀吉やナポレオンより偉いからではない。寧ろ云ひうべくんば偉くないからである。——併し、長與氏が劉邦を書くことに於いて失敗したのは、恐らくさういふ意味ではあるまい。

自分から云ふと、長與氏は項羽のやうな人物を書くときこそ、實際に長與氏のエレメントの中にゐるのである。長與氏は假令項羽だけ偉くなからうとも、項羽の中になら十分自分を見出すことが出來るのである。若し無遠慮な言葉が赦されるならば、長與氏が作家としての

立脚地は、一にも「力」であり、二にも「力」であり、或は三にも「力」であると云つていゝかも知れない。

項羽は、ある程度までヘツベルの書いたホロフエルネスに似てゐるが、惜しいかな、長與氏は、まだヘツベルだけの「力」を持たない。ホロフエルネスのところへ行くと、遺がの項羽も、彼の蹴飛ばした王冠のごとく、彼自身が一氣に蹴飛ばされて仕舞ひさうな氣持ちがする。

一〇　志賀氏の短篇

最近に至つて再び志賀直哉氏の作品を見ることが出來るやうになつたのは、至極結構なことである。

『好人物の夫婦』は書き方があまりに輕快すぎたやうな憾みはあつたが、『佐々木の場合』は實にうまいものである。いつも云ふことながら、氏の作品はデッサンが聢つかりしてゐる。いゝ加減なところや誤魔化したところがすこしもない。一點一劃を大切な壺に嵌めて、漸次

に全體の構成を形作つてゆく點は、何となく名工のやうな冴えを思はせる。わが文壇に於ける貴重な短篇作家の一人と云つていゝだらう。あれだけ要領をえた、引き締つた筆を以て、いはゆる長篇を書き消化すだけの力が出來て來れば、それこそ氏の手から驚心駭魄な大作が生れるに相違ない。

一一　武者小路氏とロンサール

若し白樺派を以てフランス文學史上の "La pléiade" の一團に比較すると、早速ピエル・ロンサールの地位に立つべき武者小路實篤氏は、いはゆる「新しい村」の問題が起つて以後、さして作を發表しないやうである。

ピエル・ロンサールの顯晦を以てすると、武者小路氏の閲歷は非常に似通つたところがあると思ふ。魏徵の『述懷』といふ詩の中には、「投筆事戎軒。」といふ有名な句があるが、ロンサールは戎軒を棄てゝ詩に親しんで以來、約七年の間毫も聞えるところはなかつたが、千五

百五十年に一巻の短詩集を發表するや、盛名俄に天下を壓して、熱心な保護者を帝王の間にすらえた。國の事情が異ふ關係から、武者小路氏には、さういふ果報はなかつたかも知れない。併し、久しい默殺の後一時に天下に喧傳された點に於いては、兩者の間に必ずしも大した相違はない。

ロンサールの晩年は火が消えたやうに淋しかつた。嘗て歡聲を擧げて彼を迎へたものも、後には殆んど彼の存在すら忘れるやうになつた。――わが武者小路氏は今我國に於ける唯一のロバート・オーウエンとして、遠く日向の森の中に隱れてゐる。私は、此の若き理想主義者の晩年がどうであるか、それに就いては勿論考へたことはない。

人としての森鷗外

一　二つの生涯

ギクトル・ユーゴーは云ふ。「閲歴は閲歴それ自身が最後の解答である。どれだけ焦慮したところで、人は到底彼自身の閲歴が語る以上のものを語ることは出來ない。」

若しさうであるとすれば、森鷗外氏の閲歴は自分等に果して何を語るであらうか。——自分は先づ、鷗外氏の體驗的背景の推移を外側から見て、そこに描き出さるべき輪廓の跡を模寫して見ようと思ふ。

今日から鷗外氏の生ひ立ちを顧ると、その生涯が明に二本の違つた色絲を以て綯ひ上げられてゐることが分る。その一つは平和の生涯であつて、今一つは努力の生涯である。鷗外氏の生涯は何時如何なる部分に於いて切り開いて見ても、そこには必ず「卓越せんとする意思」が動いてゐる。氏にとつては、生きることは卽ち卓越することで、卓越することは卽ち努力

することである。從つて、氏が今日までの生涯は明かに努力の生涯であつたとともに、今後と雖も、氏の生涯は矢張努力の生涯であらう。「朝に道を聞いて夕に死するも可なり。」――生きんとする要求の形式から云ふと、氏の態度は「道」を體得したものの態度であつて、この一途に於いては、氏の胸中些の不安もなければ、些の躊躇もあるまい。

鷗外氏の努力の生涯には、またその努力に適はしい多産な生涯があつた。積んで山を成すがごとき業績は、その質に於いて假令幾分の言議を挾むべき餘地を見出しえたにしても、單にその量に於いて猶ほ何物かの意義を齎し來るに相違ない。生むといふことは、兎に角自己を擴張することである。擴張せられた自己が、未だ擴張せられない自己より優れてゐるのは勿論である。この點に於いても、氏は通常人より慥かに違つたところを持つてゐる。

この勤勞に充ちた生活を、鷗外氏の生涯を貫く經とすれば、氏の平和に滿ちた生活は、氏の生涯を彩る緯といふことが出來よう。

古來幾多の大文學者の傳記を飾るものは、その復雜多端を極めた閲歷であるのを常とする。これらの大文學者に比較すると、鷗外氏の閲歷は、むしろ平凡と云つてもいいほど單調であ

る。強ひて氏の閲歴の上に幾分の特異を求めると、それは氏が歐洲に留學せられたことと、日清日露の兩戰役に從軍せられたことと、今一つは、前の奥さんを離別せられたこととであるが、それとて別に特筆大書に値するほどの事件でもあるまい。

鷗外氏の生涯は、終始一本の軌道を辿つて、寸毫もその軌道を踏み外さなかつたほど調うた生活の連續であつた。一口に云ふと、氏の生活は靜かであつた。穩かであつた。波瀾もなければ、變化らしい變化もない。自分の輪廓をちつと守つて、聊かたりともそれを崩さない端正を以て貫いてゐた。

この生涯の單調といふことは、一面鷗外氏の順調な生活を意味してゐる。實際氏ほど平坦な人生の行路を進んで、瞬時も榮達の道を遮ぎられなかつた人はすくない。氏が文壇の大家として一世の重望を鍾めたのは未だ三十にも足らぬ年であつた。身を官界に投じて、陸軍といふ小むづかしい世界に足を踐み入れながら、殆んど蹉跌らしい蹉跌すら經驗するとなしに、陸軍省醫務局長、陸軍々醫總監といふ顯榮の地位にまで漕ぎ付けたといふことは、その事自身が既にある程度の驚異に値するだらう。俗世間に通用する規矩を以てすると、氏が嘗て有

してゐた驚くべく長い頭衙すらも、猶ほ且つ氏の偉さを立證するにすこしも不足はない。この點に於いて見ると、氏は慥かに卓れた立志傳中の人物である。

併し、自分が今研究して見ようと思ふことは、さういふ外面的な事實ではない。もつと突込んだ意味に於ける、もつと根本的な意味に於ける鷗外氏の內面的生活、いはゞ氏の人そのものの實相は果して何であるか、その思想の色合は如何、その態度の根調は如何といふ問題である。

從つて、自分の筆は勢ひ鷗外氏に對する內面の觀察に移らなければならない。

二　傍觀者としての鷗外氏

人間は矛盾を嫌ふ動物である。何等の關係なく配列された萬有の中にも、猶ほ何等かの統一を求め、何等の所緣なく成立した人事の裡にも、猶ほ何物かの因果を見出さうとするのが、人間の持つて生れた痼疾である。

頭から、宇宙は合理的なものだと決めて蒐つてゐる人間にとつては、矛盾はありあたはぬのみならず、また、あつてはならぬものである。從つて、若しそこに何物かの矛盾らしいものがあれば、その矛盾らしいものは、必ずや單なる外見の矛盾にあらずんば、恐らくは間違つたものである。——人事現象に於ける間違つたものは、當然不正を以て認められなければならない。

多くの人は云ふ。鷗外氏が藝術家でありながら同時に軍人であつたことは、何人も疑ふことの出來ない矛盾である。この矛盾を犯して平氣でありえた限り、氏は到底眞面目な人ではないと。

鷗外氏が藝術家であつたことは勿論事實である。また氏が軍人であつたことも勿論事實に相違ない。併し、この二つの事實を認めたからと云つて、直ちに氏が矛盾の人であるといふのはどうであらう。自分は未だ軍人といふ概念に抵觸する藝術家といふ概念に遭遇したこともなければ、藝術家といふ概念に抵觸する軍人といふ概念に遭遇したこともない。スタンダアルは軍人であると共に藝術家であつた。併し、何人が彼を呼んで矛盾の人と云ひえよう。

トルストイが自ら矛盾であると云つて戟軒を投じたのは、彼の藝術觀乃至彼の人生觀に照して矛盾であるので、同時に普遍の意義を持つべき性質のものではない。況んや鷗外氏が軍人であるといふ意味は、單に軍務に服する人であるといふことに留まつて、その實本當の戰爭に參加する人ではないに於いてをやである。

併し、かういふことだけは云ひうるかも知れない。多くの場合地上の權威を否定し、地上の權威を認めない藝術家の身でありながら、鷗外氏が生涯の大部分を擧げて這個の世界に生きえたことは一種の不可解なる謎であると。——然り、これを一種の謎として見るのはいい。併し、謎は結局解きうべきものである。この解きうべき謎を現實に解いて呉れる鍵は果して何處にあるであらうか。

田山花袋氏は、嘗て鷗外氏を批評した文章の中で、「……併し、鷗外さんはロマンチシズムを論じても、あるひはナチユラリズムを說いても、何時も自分は傍觀者または批判者たる位置を動かず、その渦中に捲込まれるといふやうなことは決してない。だから、思想が該博

にして、總てのものがよく分るといふ獨特の長所があるとともに、自分が思潮の中心になつて、大なるムーヴメントを起すといふやうなこともない。」と云つたことがある。

鷗外氏を評して、傍觀者又は批判者であるといふ批評は、獨り田山氏に限らず、多くの人々が常に口にするところである。事實自體の上から見て、この批評は先づ肯綮に當つてゐると云つていい。なるほど『あそび』の中にも「……木村も前半生では盛んに戰つたものである。」と云つてゐられるやうに、『柵草紙』時代の氏は好んで問題の渦中に投じ、自ら劍戟を擁して戰陣の間を縱橫に驅驅する勇敢な戰士であり、また、自己の信條を奉じて一世の思潮を逆流せしめようとする壯快な實行家でもあつた。しかし、その時代に於いてすら、氏は決して無我夢中になつてはゐなかつた。隨分大きな聲で物を云ひ、隨分烈しい態度で外界に應酬する時でも、氏の冷かな理知は常に眼醒めてゐた。その眼醒めた理知が絕えず對境の凝視を續けていはゆる第三者の傍觀的批判を棄てないとともに、また、自己自身の立場に對する不斷の反省をも忘れなかつた。殊に『柵草紙』休刊以後今日に至るまでの氏の態度は、昔の華かな夢などはもう忘れて終つたといふやうな樣子で、終始一貫事物に對する靜觀の態度を喪

ふといふことがない。そして文壇や思想界の表面にどれだけ大きな波瀾が湧き立たうと、氏は自ら乗り出してその渦中に投ずるといふことがない。氏にとつてはすべてが對岸の火災である。すべてが眼前を擦過する雲烟に等しいものである。

果然鷗外氏は「僕は生れながらの傍觀者である。子供に交つて遊んだ初めから大人になつて社交上尊卑種々の集會に出て行くやうになつた後まで、どんなに感興の湧き立つた時も、僕はその渦卷に身を投じて、心から樂んだことがない。僕は人生の活劇の舞臺にゐたことはあつても、役らしい役をしたことがない。高がスタチストなのである。さて舞臺に上らない時は、魚が水に住むやうに、傍觀者が傍觀者の境に安じてゐるのだから、僕はその時尤も其所をえてゐるのである。」(『百物語』)と云つてゐられる。なるほど『牛タ・セクスアリス』に出てゐる年少時代の生活を見ても、また宴席を主題とした作品、例へば『懇親會』などに出てゐる氏自身の態度を見ても、氏の位置はいつも活躍の中心から離れてゐる。——これは果して如何なる理由に因るのであらうか。その點について、多少とも自分の考へてゐるところを述べて見たい。

『キク・セクスアリス』を讀むと、鷗外さんは自ら告白して、自分は少年の時から、餘りに自分を知り抜いてゐたので、その悟性が情熱を萌芽のうちに枯らして終つたのである。」と云ふ口の下で、「併し自分は悟性が情熱を枯らしたやうなのは、表面だけのことである。永遠の氷に掩はれてゐる地極の底にも、火山を突き上げる猛火は燃えてゐる。」と云つて、すぐ前言を取消してゐられる。——慥かフレデリツク・アミエルであつたと思ふ。間違つてゐたら御免を蒙りたいが、「元來人間といふものは可燃性のものである。適當な燃料さへ注げばすぐ燃え上る。絶對に燃え上らなくなつたときは、死が人間を襲うた時である。」といふやうな意味の事を云つてゐたが、この點に於いて鷗外氏が人間外れだといふことは自分と雖も認めない。否、それどころではない。氏の情熱だつて矢張動もすると燃え上らうとする傾向はあるが、それが愈々燃え上らうとする瞬間に、例の冴えた悟性が頭を擡げて、その情熱が意思の世界に移され、その意思が所謂實行となつて現れる前に、それをすつかり冷かなものにして終ふ。自分をして云はしめると、氏が傍觀者としての態度は、すべてこの瞬間の心機に支配されてゐるのである。從つて氏の落付きには何處となくイリタチーヴな不安がある。明鏡のごとく

また、止水のごとく澄んだ理知の奥底に、なほ何物かの不醇を藏してゐる。

年少時代の鷗外氏は、自分の顏の醜いのを意識して、自分には到底美しい女は惚れないだらうと思つて淋しがつたほど、自己そのものの相をはつきりと見ることの出來る人であつた、氏の透徹した理知は、さらに自己自身の眼前に在るものをはつきりと見分けることが出來て、自然自己の裡にある感情を使嗾したり、または情意の放埒なる盲動に一身を委ねたりする機會を與へない。從つて、何かの調子で不圖動き出さうとすることがあつても、例の理知が出てすぐ押へ付けて終ふ。無遠慮に云ふと、氏は徹頭徹尾理知の監視を受けてゐるのである。理知の監視を受けてゐる人に、何處となくイリタチーヴな不安があるのは、これまた自然の數だと云つていい。

鷗外氏の作『魔睡』の中には、大川博士といふ人物が描かれてゐる。「大川博士は氣のゆつたりした人で、何事があつても驚くの慌てるのといふことはない。世間の人の周章狼狽するやうなことに出くはすと、先生極めて平氣で、不斷から透明な頭がいよ〳〵透明になつて來る。」やうな人物でありながら、遺がに自分の細君に振りかゝつた危難に對しては無關心で

ありえない。」と云つて、我を忘れて憤激するといふのでもない。矢張「野蠻人が腹にある毒を吐かねばならないので糞を飲む」時のやうな心持で、「『ええ、糞を』と云ひたいやうである」のを、ぢつと熬へ」て忍辱するのである。——また『金毘羅』といふ作には、小野博士といふ人物が描かれてゐる。小野博士は平素から自分の生活の空虚で、自ら哲學者と名乘りながら、他人の思想の受賣をしてゐるのが不愉快であり、且つ、夫婦の愛や家庭の幸福といふやうなものが、人生の内容には殆んど關係がなく、「妻も子供も、只因襲の朽ちた索で自分の機關に繋がれてゐるに過ぎない。あゝ、寂しい、寂しい。」と云つてゐる人であつて、覿面にその愛子の死を見ても、「只心の空虚の寂しみを常より幾らか切に感じたばかりである。」といふやうな人物でありながら、すべての光景が「芝居の舞臺に出てゐる人物のやうに、よそよそしく而もはつきりと目に映じてゐる。」のを自省して「自分がそんな風に傍觀者の位置に立つてゐるのが不愉快でたまらないのである。」——この二人の人物ほどはつきりと、自分の眼に傍觀者としての鷗外氏を浮き立たせるものはない。いふまでもなく、そこには傍觀者としての不安も出てゐれば、また、傍觀者としての焦慮も出てゐるが、それらの複雜な氣持の中

で、最も自分の心を惹くものは、どうしても情熱に殉ずることの出來ない傍觀者としての淋しさである。

鷗外氏は嘗てその作『舞姫』に於いて功名と戀愛との闘ひを極めて美しい筆に依つて描いた。ある意味に於いて云ふと、それすらも情熱に殉ずることの出來ない淋しさを描いたものだと云つていい。かういふ淋しさは鷗外さんの一生にも度々あつたことであらう。無遠慮に云ふと、氏の生涯は『雁』に描かれた女主人公のやうに、到底自分の不滿足な現在を拔け出すだけの勇氣を持たないでゐながら、猶ほ何物かを求めて焦慮するやうな淋しさを以て充たされてゐたかも知れない。——自分は玆に氏が藝術家と官吏といふ卑近な生活樣式上の（所謂）矛盾を忍びえた第一の理由を見出したい。

その（所謂）矛盾を以て、人は一口に鷗外氏が不眞面目なからだといふ。なるほど高いところに立つて、長い物差しを持つて計つたならば、氏と雖も隨分不眞面目なところはあらう。それは自分も同感である。併し、不眞面目といふことは、その不眞面目なことに何等の不安も何等の苦痛も伴はない時を云ふのであつて、不安と苦痛とに責められた不眞面目は、決し

て眞當の不眞面目ではありえない。――『かのやうに』の五條秀麿が、自己の實人生に處してゆく上の態度を一に「かのやうに」の哲學に求めてゐるのは、彼の妥協的な、幾分不徹底の嫌ひある生活態度の裡にも、猶ほ悲痛な自覺が潜んでゐることを語るものではあるまいか。彼は停車場に貴顯の人々を送迎する時に於いてすら、それを單に社交的禮譲として、若しくは單に社會的義務として合理化することを許さない。深刻鋭利な反省の裡には、矢張り自分も物欲しさに動く獸群の一獸であるといふ胸惡さを感じてゐるのである。自分は到底鼓を鳴らして鷗外氏の不眞面目を責めるだけの勇氣を持たない。

三　『あきらめ』の心持

多くの場合、人間はかくあるべく生れ付いてゐるのである。それが謂ふところの人間の運命である。

嚴密に云ふと、鷗外氏も勿論傍觀者として運命付けられた人に相違あるまい。氏自身もさ

うした氏の性情を解して、「與へられたる事實」、即ち素質の罪に歸してゐられるやうである。併し、鷗外氏の場合にあつては、單に素質そのものの罪ばかりとは云へないやうに思ふ。自分の見るところを以てすると、素質以外に、すくなくとも境遇の力が與つて非常な影響を及ぼしてゐるに違ひない。

假に鷗外氏の閲歴を見てもいい。氏が五十有餘年に亙る長生涯に於て、氏は前の奥さんの離緣問題（自分の臆斷を逞しうすると、この問題だけは、氏の感情生活にかなり深刻な傷痕を留めてゐるであらうと思ふが）以外、別にこれといふほど、大した感情的方面の動搖を惹き起しさうな問題に逢會してゐられない。物質的生活に於いても亦然りで、勿論富裕といふほどのこともあるまいが、未だ貧困と戰ふといふやうなこともなかつたらしい。久しい間兩親も健在で、その兩親がまた所謂慈父慈母といふべき側の人であつたとすれば、氏のごとく聰明な資質を稟けて生れた人は、必ずや人生に對して傍觀的な態度を保持する人となるに相違ない。況んや氏の專攻學科が醫學といふ自然科學の分派に屬してゐたに於いてをやである。

いふまでもなく自然科學は觀察と推理との學である。觀察と推理との學に奉仕する自然科

學者にとつては、あらゆる自然人事の諸相も、皆單なる現象たるに留まつて、そこに寸分の情緒を介入する餘地だに與へない。從つて、自然科學者の態度の基調をなすものは、徹頭徹尾客觀的批判であつて、主觀裡に蕩漾する感情的沒入は、到底彼等の經驗しないところである。自然科學者の一人たる鷗外氏が、遂に人生の傍觀者として終始する所以は、全くこの點に根差してゐるのではあるまいか。「冷眼に哲學や文學の動搖を見てゐる」氏も、その作『妄想』の一節に於いて、既に「幾多の歲月を閱しても、科學はなかなか破產しない。凡ての人爲のものの無常の中で、最も大きい未來を有してゐるものの一つは、矢張科學であらう。」と云ひ、さらに一轉語を下して、「辻に立つ人は、多くの師に逢つて、一人の主にも逢はなかつた。そしてどんなに巧みに組み立てた形而上學でも、一篇の抒情詩に等しいものだといふことを知つた。」と云つてゐられるが、それを見ても氏の科學に對する信憑の比較的に薄いことは、十分これを想察するに足りるであらう。この點に於いて、氏はすべてのものを否定すると叫びながら、猶ほ自然科學を信仰したバザロフに似てゐる。然り、氏はバザロフがニヒリストであつたやうな意味で、或はニヒリストであるかも知れない。何故なれば、氏にとつ

ては何一つ權威ある存在を認められないからである。

一般の場合から云つて見ても、人生の傍觀者の多くがニヒリストであり、ニヒリストの多くが人生の冷笑者であつて、眼前に擦過する許多の人事現象は、この種の人に對して常に一種の猿芝居として映ずるのを常とする。鷗外氏も「傍觀者といふものは、矢張多少人を馬鹿にしてゐるに極つてゐはしないか。」と云つてゐられる。漱石先生の警句に云ふ。「俗界萬斛の反吐皆動の一字より來る。」と。靜觀の瞳に映ずるものは、すべて狂妄の相ならざるはない。醒めたものよ、汝の名は傍觀者であると云ひたくなる。

そこに行くと、昔の鷗外氏はまだ醒め切つてゐられなかつた。大きな華かな舞臺の上に登つて、自ら立役者たるを快とする稚氣もあつた。氏が今日の心境から當時を回顧すると、或ひは「若氣の過ち」といつたやうな苦笑を漏らされる時もあらう。併し、氏の明かな悟性は、年とともに加へて行く年齡と知識とのために、日一日とその清澄さを增して行く一方に、靜かな老年の淋しさと、淡い聰明の悲しみとを齎したに相違ない。自分は氏がストリンドベルヒの『稻妻』を譯出せられた時、果してどんな心持を經驗せられたか、それを聞くことにかな

りの興味を持つてゐる。現に『妄想』一篇を讀むと、胸に滲み込むやうな靜寂の裡に、翳のやうな憂愁の隨所に漂うてゐるのを感じるではないか。傳道者の言葉に云ふ。「嗚呼我は大なる者となれり。我より先にエルサレムにをりしすべての者よりも、我は多くの知慧をえたり。我心は知慧と知識とを多くえたり。我心を盡して知慧を知らんとし、狂妄と愚癡とを知らんとしたりしが、これも亦風を捕ふるがごとくなるを曉れり。夫れ知慧多ければ憤激多し、知識を增すものは憂ひを增す。」——自分は敢て氏に問ひたい。氏の生涯にもまたかうした心持を噛み締めて味はれたやうなことはなかつたかと。

鷗外氏の「復活」は、いはゆる自然主義の一世を風靡してゐる頃であつた。猫も杓子も自然主義でなければ夜が明けないほど有頂天になり切つてゐる時代に、氏は獨り自己に許された世界を守つて、それらの空騒ぎに時々冷かな瞳を投げるだけであつた。その態度の根調は矢張例の傍觀者である。そして、その傍觀者の態度の裡には、例の「人を馬鹿にする」ところが隱れてゐた。『ル・パルナス・アンビュラン』とか、『鏡』とかいふ作品は、隨分思ひ切つて當時の文壇者流を冷嘲したものである。併し、いくら傍觀者の地位に安んじてゐる氏だからと云

つて、毫も孤獨の淋しさを感じないほど非情な人ではない。『杯』の中で、「わたくしの杯は大きくはございません。それでもわたくしはわたくしの杯で戴きます。」と云ひながら、「自然」といふ銘のある杯を突き返した第八の娘は、同時に、『木精』の中で昔答へた木精を懐しんで、久し振りにそこを訪ねてハルロオと呼んでも、もう何の答へすら聞くことの出來ないフランツである。杯を突返した第八の娘の聲は、假令鋭い聲であつたにしても、昔の木精を聞くことの出來ないフランツの心持は、「何とも言へないほど心細く寂し」かつたに相違ない。失望を以て山を降りて行くフランツは、心の中で下のやうなことを考へる。「自分のハルロオに答へないので、木精が死んだと思つたのは間違であつた。木精は死なない。併しもう自分は呼ぶことは廢さう。こん度呼んで見たら、答へるかも知れないが、もう廢さう。」

一面から云ふと、傍觀者の心持はレシグネーションの心持である。「あきらめ」の心持である。

四　『あそび』

自分は以上の叙述に於いて、鷗外氏が一種の傍觀者であり、且つ、何事に對しても常に批判的態度を棄てえない所以を說明したが、自分をして云はしめると、この種の人々は多くの場合ヂレッタントの氣分に充ちて、あらゆるものを信ずる代りに、あらゆるものを樂しまうとする傾向が强い。かのレオナルド・ダ・ヴィンチはこの種の傾向を代表する最も偉大な一人であつて、わが鷗外氏のごときも、また同じ範疇に入れて差閊へなからうと思ふ。

その作『あそび』を見ると、鷗外氏は木村といふ主人公(氏自身の影)を評して、「此男は何をするにも子供の遊んでゐるやうな氣になつてしてゐる。」と云ひ、また、木村がその友人から「君はぐんぐん爲事を捗らせるが、どうもはたで見てゐると、笑談にしてゐるやうでならない。」と云はれたのを評して、「此男の表情、言語、擧動は、人にかういふ詞を催促してゐると云つても好い。役所でも先代の課長は不眞面目な男だと云つて、ひどく嫌つた。文壇では

批評家が眞劍でないと云つて、けなしてゐる。一度妻を持つて、不幸にして別れたが、平生何かの機會で衝突する度に、『あなたはわたしを茶かしてばかりゐらつしやる。』といふのが、其細君の非難の主なるものであつた。」と云つてゐられる。最も眞率な自己告白の言葉と見てよからう。

なるほど鷗外氏ほど種々雜多なことに興味を見出す人はすくないとともに、また、鷗外氏ほどすべてのことに死身になれない人もすくなからう。單に文學の方から云つても、氏は和漢洋何れの方面の文學にも研究が行き屆いて居るばかりでなく、文學のあらゆる分派、卽ち詩、小說、戲曲の何れに對しても、それ相應の感興を寄せてはゐられるが、併し、その何れもが氏を獨占してはゐない。同じ小說を書いて見ても、ある特定のイズムに縛られて、そのイズムの桎梏の下に筆を執るといふやうなことは、氏の生涯を通じて恐らくは一度もなかつたであらう。高等講談と罵られながら歷史小說を書き、塚原澁柿の歷史物に等しいと嘲られながら『伊澤蘭軒』を書き續ける勇氣は、勿論氏が優越者として許された自信の上にも立つてゐるのであらうが、一にはかうした氏の多趣味な性向が、氏をして自然にさうした新しい試み

に就かせるものだと見てもいい。蓋し、デレッタントの心持は、斷えず流れて輟まないものだからである。

斷えず流れて輟まないものだから、ある一事にのみ執着して、そこに全幅の熱中を集めるといふことも出來ない。極端に云ふと、日常茶飯の俗事と藝術上の仕事との間にも、さう大した相違を認めるといふことなく、すべてに平等の感興を寄せるとともに、また、すべてに相對の價値しか認めないのであるから、鷗外氏にとつては、藝術上の仕事が一つの「あそび」であると同じ意味で、官吏としての仕事も一つの「あそび」であるに相違ない。すべての仕事が一種の「あそび」に過ぎない以上、その「あそび」と「あそび」との間にどうして矛盾がありえよう。——自分は玆に氏が藝術家と官吏といふ卑近な生活樣式上の(所謂)矛盾を忍びえた第二の理由を見出したい。

鷗外氏は云ふ。「同じ『遊び』に面白いのもあれば、詰まらないのもある。こんな爲事はその詰まらない遊びのやうに思つてゐる分である。役所の爲事は笑談ではない。政府の大機關の一小齒輪となつて、自分も廻轉してゐるのだといふことは、はつきり自覺してゐる。自覺し

てゐて、それを遣つてゐる心持が遊びのやうなのである。（中略）どうかすると、こんな事は罷めたらどうだらうなどと思ふ。それから罷めた先きを考へて見る。今の身の上で、ランプの下で著作するやうに、朝から晩まで著作をすることになつたとして見る。此男は著作をする時も、子供が好きな遊びをするやうな心持になつてゐる。それは苦しい處がないといふ意味ではない。どんなpostをしたつて、障礙を凌ぐことはある。又藝術が笑談でないことも知らないのではない。自分が手に持つてゐる道具も、眞の鉅匠大家の手に渡れば、世界を動かす作品をも造り出すものだとは自覺してゐる。自覺してゐながら、遊びの心持になつてゐるのである。」

以上の心持をはつきりと理解することが出來れば、鷗外氏がサアベルを提げながら文筆を執られた心持も、またはつきりと理解することが出來よう。この心持を以て、人は動もすると氏の不眞面目を云ふ。併し、いはゆる意味の不眞面目は、果してかういふ心持を云ふのであらうか。それにしては餘りに淋しく、また、餘りに沈んだ心持ではなからうか。

自分は玆に特に言つて置きたい。鷗外氏は、あらゆる哲學書と云ふ哲學書の中で、初めてハ

ルトマンを讀んだ人であるといふことを。「伯林の Garson logis の寢られない夜なかに」幾度か嘗めた自省の淋しさは、氏をして此厭世哲學者の許に走らしめたのである。氏は云ふ。「ハルトマンの形而上學では、此世界は出來る丈善く造られてゐる。併し有るがいいか無いが好いかと云へば、無いが好い。それを有らせる根元を無意識と名付ける。それだからと云つて生を否定したつて世界は依然としてゐるから默目だ。現にある人類が首尾好く滅びても、又或る機會には次の人類が出來て、同じ事を繰り返すだらう。それよりか人間は生を肯定して己を世界の過程に委ねて、甘んじて苦を受けて、世界の救援を待つが好いと云ふのである。自分は此結論を見て頭を掉つたが、錯迷打破には强く引き附けられた。Dis Illusion にはひどく同情した。」と。

鷗外氏の告白に從へば、氏はハルトマンの錯迷打破卽ち幻滅の思想には全然同感したが、ハルトマンの結論たる一種の「あきらめ」的人生觀には贊成することが出來なかつたといふことではあるが、晩年に於ける氏の思想は、始んどハルトマンの結論に近づいてはゐなかつたであらうか。ハルトマンの捕へ來つた前提が當然這個の結論を生み出すか否かは知らないが、

假りにそれが論理の必然なる歸決であつたとすれば、ハルトマンの前提を容認した氏の人生觀が、偶々ハルトマンの結論と吻合したといふことは、素より怪しむべきことでない。若し、氏が果して意識的にか無意識的にか、ハルトマンの思想に近づいてゐたとすれば、氏が一種の傍觀者であり、且つ、一種のニヒリストであつて、單なるヂレッタントの淋しい心持を以てする以外に、あらゆる自然人事の諸象を受け納れることの出來ないことも、また當然の理數として承認することが出來よう。

同じヂレッタントの中にはペテロニウスのやうな人もゐる。レオナルド・ダ・ヴィンチのやうな人もゐる。アナトール・フランスのやうな人もゐる。これらの人達に比較すると、鷗外さんのヂレッタンチズムは、餘程地味であるとともに、また、餘程淋しい氣持がする。強ひてその隣を近代の文學者中に求めると、或ひはゴンクール兄弟のごときがそれに近くはなからうか。彼等の多藝多能の才幹と、その不平怨磋に充ちた生涯とを思ひ浮べると、彼等と氏との間にはどうも一脈の相似た寂寞が流れてゐるやうに思はれる。

記せよ。鷗外氏がヂレッタントであるといふことは、毫も氏が不眞面目であるといふこと

の反證にはならないことを。

五　新しい保守主義者

鷗外氏の夫人しげ子女史の書かれた小說に、『波瀾』と題するものがある。その作に出て來る女主人公富子が自分の夫大野を評して、「夫は有觸れた洋行歸りとは違つて、餘程長く外國にゐたので、世間でいふハイカラアとは氣風が變つてゐる。どこか深く西洋化してゐるらしい。なんだか小說に出てゐるエズイツトのやうなところがある。詰まり西洋の惡黨じみてゐるのである。」と云つてゐる。自分はこの言葉を以て直ちにしげ子夫人が鷗外氏を批評せられたものとして考へることの果して妥當であるかどうかは知らない。併し、假りにさうだと考へて見ると、自分はその評語の中に云ふに云はれぬ味ひを見出す。

自分は既に鷗外氏が一種の傍觀者であり、且つ、一種のニヒリストである所以を幾度となく說明したが、更に一步を進めて云ふと、しげ子夫人の所謂「どこか深く西洋化してゐる。」

ところは、取りも直さず、氏の態度の傍觀的であつて、常に第三者の立場からすべてを批判的に觀る點を暗示してゐるのであつて、小説に出て來るエヾイットのやうなところを思はせたり、また、西洋の惡黨じみたところを思はせたりするのは、氏の客觀的態度が多くニヒリスチックな調子を帶びて、對手の心持に何となく一種の冷かさを感ぜしめるからではなからうかと思ふ。

果して鷗外氏自身も云つてゐられる。「今は大分おとなしくなつてゐるが、彼れの微笑の中には多少の Bosheit がある。こんな、けちな惡意では、ニイチエ主義の現代人にもなられまい。」（『あそび』）

自分をして忌憚なく云はしめると、鷗外氏の血管に、かなり多量にコスモポリトの血が流れてゐる。しかし、獨り鷗外氏ばかりには限らない。眞當の意味の傍觀者といふものは、多くコスモポリトであつて、彼等は特に自己の隷屬する精神上の王國といふものを持たないがために、自然思想的理解が廣汎で、すべてを公平な見地から觀察することが出來る。從つて氏の眼には人が進歩だと騒いでゐるものが、一向進歩ではなかつたり、人が退歩だと騒いで

ゐるものが、一向退歩ではなかつたりする場合が多い。さういふ場合に遭遇すると、氏は敢然として氏獨自の見解を主張し、世論の皮相にして且つ淺薄なる所以を力說する。

鷗外氏が歐洲から歸つて來られた頃は、明治初年の急激な歐化思想が、稍や堅實な色を帶びてゐた頃である。しかし、西歐文明の燦爛たる表面のみを見て、毫もその醜惡なる裏面を察しえない短見者流は、相も變らず齒の浮くやうな急進說を主張してゐた。眼のあたりその有樣を見せつけられた氏は、矢張何とか云はなくてはゐられなかつたらしい。その作『妄想』にはかう書いてある。「東京では都會改造の議論が盛んになつてゐて、アメリカのAとかBとかの何號町にある、獨逸人のいふ Wolkenkratzer のやうな家を建てたいと、ハイカラア連が云つてゐた。その時自分は『都會といふものは、狹い地面に多くの人が住むだけ人死が多い、殊に子供が多く死ぬる、今まで橫に並んでゐた家を、竪に積み累ねるよりは、上水や下水でも改良するがよからう。」と云つた。又建築に制裁を加へようとする委員が出來てゐて、東京の家の軒の高さを一定して、整然たる外觀の美を成さうと云つてゐた。その時自分は『そんな兵隊の並んだやうな町は美しくは無い、强ひて西洋風にしたいなら、寧ろ反對に軒の高

さどころか、あらゆる建築の様式を一軒づつ別にさせて、エネチアの町のやうに參差錯落たる美觀を造るやうにでも心掛けたらよからう。』と云つた。……そんな風に、人の改良しようとしてゐる、あらゆる方面に向つて、自分は本の默阿彌説を唱へた。そして保守黨の仲間に逐ひ込まれた。洋行歸りの保守主義者は、後には別の動機で流行しだしたが、元祖は自分であつたかも知れない。』

嘗て鷗外氏の友人井上通泰氏は、「森君は洋學者中の保守主義者」であると云ひ、氏自身も自ら保守主義者を以て任じてゐられるやうではあるが、所謂意味の保守主義者といふものは、果して鷗外氏のやうな人を指して云ふのであらうか。自分から云ふと、氏ほど徹頭徹尾西歐化した人はすくない。若しハイカラアといふ言葉が許されるならば、氏は明かに精神上のハイカラアである。歐洲近代文明の表裏を流れてゐる極めて微妙なる律動にも感じ、その思想的背景に潜んでゐる極めて纖細な神經をも捕へらる點に於いて、何人かよく氏に追從しえられよう。その人が一見保守主義者のごとく見えるのは、あまりに歐洲の近代文明を知り過ぎて居り、且つ、あまりに「進歩」といふことの實質的意義を了得しえてゐるからである。そ

の一例として、自分は、茲に「秩序」といふことに對する氏の意見を紹介して見よう。

その作『かのやうに』を讀むと、その一節に於いて鷗外氏は、次きのやうなことを云つてゐる。『……自由だの、解放だのいふものは、皆現代人が在來の秩序を破らうとする意嚮の名である。そしてそれを新しい道德だと云つてゐる。しかし秩序は道德を外に表現してゐるもので道德自身ではない。秩序といふ外形の縛には、隨分古くなつて、固くなつて、改まらなくてはならなくなるところも出來る。道德自身から見れば、外形の秩序は何でもない。さうはいふものの、秩序其物の價値は少くはない。秩序があつてこそ、社會は種々の不利な破壞力に抵抗してゆくことが出來る。秩序を無用な抑壓だとして、無制限の自由で人生の諧調が成り立つと思つてゐる人達は、人間の欲望の力を侮つてゐるのではあるまいか。餘り樂天觀に過ぎてゐるのではあるまいか。若し秩序を破り、重みをなくしてしまつたら、存外人生の諧調の反對が顯はれて來はすまいか。人は天使でも獸でもない。……』

この一節を讀んで見ても、鷗外氏の近代文明及び近代思想に對する理解が如何に透徹したものであるかといふ事も分れば、また、氏の態度の動もすると保守的に見られ易い理由も分

るであらう。兎に角氏は一度歐洲を「卒業」(勿論いい意味で)した人といふ感じを與へる。歐洲の此岸にゐて保守思想を唱へるのではなくて、歐洲の彼岸に在つて保守思想を唱へるのである。從つて、所謂意味の保守思想とは隨分その內容が違つてゐる。自分が氏を評して腹の底までハイカラアであるといふのは、全くこの理由に基いてゐるのである。

聰明な傍觀者は人間の愚を冷嘲するとともに、また人間の愚を愍れむものである。人間の愚を愍れむところにのみ、眞當の意味の教訓といふものが生れて來る。

この點に於いて、自分は鷗外氏の態度を教訓者的であると評するものの言に贊意を表さうと思ふ。

鷗外氏が小倉時代の自分を描かれたらしい『獨身』といふ作を讀むと、富田といふ客が主人の大野に對して、「又お講釋だ、ちよいと話をしてゐる間にでも、おや、又教へられたなと思ふ。あれが苦痛だね。」といふところが書いてあるが、自分等が氏の小說を讀んで得る感じも

矢張それである。勿論、氏は知らん顔をして物を云つてゐる。しかし、知らん顔をしながら氏の云ふ言葉にはいつも意味深長なところがある。よく嚙み締めて味はつて見ると、意外なところに意外な暗示があつて、それとなく讀者を敎へてゐる。

これは單に小說の上での話であるが、鷗外氏が實人生に處して行かれる態度の上にも、矢張かうしたところがありはしないか。自分の頭には『鶏』の主人公石田少介のことが思ひ浮べられる。石田少介はすべての醜惡な世間を自己の周圍に發見して、しかもその醜惡な世間に反撥するものの不滿や憤怒を感ずるといふことなく、極めて靜かに、極めて平氣にそれを凝視しながら、いつも淋しい微笑を湛へてゐる。その微笑の中に假令人間の愚を冷嘲する惡意があるにしても、猶ほその半面にはすべてを赦さうとする善意がありはしないか。『金貨』の中に出て來る主人公荒川のごときも、また何處となく石田少介の風格を偲ばせる。すべての感情をぢつと自己の裡に包み終せて、あらゆる醜惡を同情と理解との眼を以て見ようとする寬容な態度は、獨り荒川その人の有するものではなくて、氏自身の人格の裡に具はる一種の美德ではあるまいか。

しかし、それだけの完成味を持つてゐる人にしては、鷗外氏は意外に細事に拘泥する人である。『あそび』の中にも、何とかいふ新聞が、氏の悪口を云つた文章を載せたので、もうその新聞から委嘱された應募原稿の選はしないと云つて憤慨することが書いてあつた。さういふことはかなり度々見かけることで、氏ともあらう人が、三文雑誌の六號活字まで氣にかけて、かれこれ辯明などせられるのを見ると、自分は何となく不可思議な氣持がする。これは噂話に聞いたのであるから眞僞は素より保證する限りでないが、氏が以前小倉の師團に赴任せられる時、初めは公式の出發だと云つて品川まで行き、そこで下車して一旦自宅に歸り、再び淋しく新橋を出發せられたことがあると聞いてゐる。若しこの話が事實だとすると、玆にも氏の有する神經質な一面が遺憾なく發揮されてゐると云つていい。

典型的意味の近代人たる鷗外氏は、その近代人の特質たる偏執的な性情を、矢張多量に稟けてゐられるのであらうか。氏自身は寧ろそれを否定するらしい口吻を漏らされてはゐるが。……

昭和五年四月十二日印刷
昭和五年四月十五日發行

亡友芥川龍之介への告別

定價金壹圓參拾錢

著作者　池崎忠孝

發行者　森園豐吉
東京市神田區表神保町一〇番地

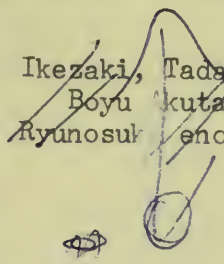
印刷者　本間十三郎
東京市牛込區矢來町一五七番地

發行所　天人社
東京市神田區表神保町十番地
振替東京五五二〇番
電話神田二六八七番

天

人

社


Ikezaki, Tadata
Boyu kutaga
Ryunosuk eno k

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02998 9464